

---

# 仮面ライダーディアンド

赤月イナト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディアンド

### 【Nコード】

N1379V

### 【作者名】

赤月イナト

### 【あらすじ】

貴方は生きる事に何か目標はありますか？それともただ死にたくないだけですか？・・・生き続けるためにその手を綺麗に保てますか？・・・ 諸事情により他サイトから引用しています

あらすじ

仮面ライダーダイヤモンド「坂白マナト」は高校生である

……ん？

どっかで見た事がある始まり方だって？

気にしたら負けだ……！

気を取り直して……

こっから本筋だってばよ……！

職業：学生（高2）

彼女いない歴〃年齢

信頼できる親友が一人いて（そいつはイケメンでモテて）俺は成績

が…(ゲフンゲフン)

普通の高校行って、普通に友達と戯れて普通の暮らしをしてたのにいきなりよく分からん展開になっちまった!?

「変身!」

【KAMEN RIDE】

【DIAND】

「あの…主人公、俺なんだけど…」

二人が出会う時、物語は始まる

……これもどっかで見た…?」

レビュー待ちです

## 序章・プロローグ（前書き）

この度「仮面ライダーディアンド」にお越しいただき誠にありがとうございます  
でございます

筆者の赤月イナトです

キーワード等に記した通りこの作品は「仮面ライダーディケイド」  
の二次創作作品ですが原作設定はほとんど起用していません  
ご了承ください

## 序章・プロローグ

「はぁ……！はぁ……！」

「グルル……！」

早く……！早く……！逃げなきゃ……！！

「はぁ……！はぁ……！」

逃げるって何処へ！？

早くしないと殺されちゃう！

「グルル……！」

「はあ……！はあ……！……！？」

そ…そんな…行き止まり…！

「あ、あなた達に殺されるなんてごめんよ！」

「ゲル…！？」

私は逃げるのを諦めて懐から変わった形状をした剣とノート型のホルダーらしき物を取り出し後者を左腰に当てるとそこからベルトが流れるように出て私の腰に巻かれていく……

もうこうなったら抵抗する以外手段はないわ

迷ってる暇もない…！

続けざまに腰につけたホルダーを開き一枚のカードを取り出す



それを真正面にいる……怪物と呼ぶに相応しい異物に見せつけるよ  
うに構え高らかにこう叫んだ

「変身……！」

## 序章・プロローグ（後書き）

以上

プロローグとさせていただきます

こんな感じで進めていきたいと思えます

これから先長くなりますがよろしくお願ひします！

第一章・#1 変わりゆく日常(前書き)

記念すべき第一話!

駄文ですが皆さんの目にとまっていただけでも光栄です!

それではごっしょー!!

## 第一章・#1 変わりゆく日常

ここはとある高校……

ではなく「赤ヶ龍高等学校」という立派な名前の学校がある

そしてその一角の教し……

「あー！もう！そんな堅苦しいナレーションはいいからさ！俺の話聞いてくれよ！」

…彼はこの学校に属する生徒、名は「坂白マナト」

「なあなあこれ見てくれよ」

見せてきたのはある紙ビラだ

よく見ずとも赤ペンで「x」と書かれた文字が目立つ

想像は容易いがこの紙は……

「赤点だぁ…もうおしまいだぁ…」

「なに落ち込んでんだよ、マナト」

別の青年がマナトに話し掛けてきた

彼は「神岡悠二」マナトの親友で気が合う友達だ

悪い点があるとすればイケメンでモテる…

………し、嫉妬じゃないぞ!?

簡潔に説明したただけだからな!!

「悠二い〜!」

「なんだよ、情けない声だしやがって…」

「……これ……」

見てくれよ、と言わんばかりにその紙ビラ……もといテストの解答用紙を悠二に見せつけてみた

「これ…?」

その用紙を見せられ……

ああ…なるほど、それでマナトが落ち込んでいるのか

……それ故に反応に困ってしまった悠二

……だが今の状況で悠二にはマナトを励ます絶好の言葉があった

そう……必殺の言葉が……！

「マナト……俺達、進級してまだ間もないぜ？」

「……は？」

どういふ事ですかい？

「いやだからな、高校2年生に進級したばっかなのに今赤点とって  
もほとんど影響ないからな」

「なん…だと…！」

マナトはその言葉を聞いて驚愕の表情を浮かばせていたが次第ににんまりとした余裕の笑顔になっていく

……読者に宣言しておこう

坂白マナトは（作者を含め）バカだと…！！

「そうだったのか…！そうだったんだな…！いやっほ…！今年も大いに満喫できそうだぜ…！！」

「……（どうしてだろう？約一年後にコイツの泣き崩れる姿をこつも簡単に想像できるのは……）」



\*\*\*\*\*

(いきなり) 時間が進み (いきなり) 視点が他所に変わる

……ここは商店街、昼間なら各々の店が開店しており賑やかなのだが今は夜中、全ての店が閉まっており人気もない死んだみたいになかな商店街へと化していた

そんなところに一人の男が慌ただしい様子で走ってくる

「はあ！はあ！ぐっ！はあ！はあ！だ、誰か…！誰か助けてくれ…！」

春先…といってもまだ寒い時期だ  
それだというのにも関わらず男は大量の汗を流しておりまともに喋  
れない程、息が上がってしまっている  
何かから逃げてるように見えた

「……」

「ひっ！？待ってくれ！俺は死にたくない！！…そうだ！何でも言  
うことを聞く！だから…！」

「……！」

「何か」は男の聞き事など聞いていないかのような雰囲気醸し出  
していた

そして腕のようなものを振り上げる

「……………」

男は何をする気だと疑問に上がった

……………がすぐに察しがついた

だがもう遅い

その夜、男は悲鳴と共に血が噴水になりながら倒れた

\*\*\*\*\*

マナトはいつものように通学路を経由して学校に通っていた

「ふあゝ、今日もいい天気だぜ」

欠伸をしているのは寝る時間が遅かったからである  
どうやら深夜にゲームをしていたようだ  
良い子は夜更かししてはいけません

学校に着いた、しかしHRが始まる二分钟前……

遅刻寸前、学校の時計の針は止まることを知らず刻一刻とマナトを  
焦らす

「やべ……遅刻だ……!!!!」

\*\*\*\*\*

「はあ…間に合った…！どんなもんだ…！」

「誰にいつてんだよ…！」

「誰でもいいじゃねえか」

そんな二人が会話しているとHRが始まるチャイムが響いた

いつものように担任の先生が連絡事項を告げていく

今日の日程…今日の行事…今日の先生のラッキーカラー……

ん？最後の報告はいいって？

んな事言われても先生の事知りたい人にはこの報告は欠かせないで  
しょ！（主に作者とか）

だが今回は最後に一つだけ忠告を付け加えてきたのだ

「最後にお前達に言っておかなければならない事がある、ニユース  
を見て知っている者はいると思うが昨日、隣町の商店街で残酷な殺  
人事件が起きた、犯人もまだ捕まってないそうだ、気を付けるよう  
に」

クラス全体がざわめき始めた

事が大きい故に当然の反応だが……  
マナトも

「……！？（殺人事件）……！？」

嘘だと思った

まさかそんな近くで殺人事件が起こっていたなんて………  
しかし悠二は驚いたマナトを見て

「お前、もしかして知らなかったのか？」

「え？悠二は知ってたのか？」

「ニューズ見なかったのか？……まあ遅刻しそうだったし見てる余裕  
なんかないよな………知らないなら言っとくけど結構惨たらしい姿  
で遺体が見つかったらしいぜ」

「む、惨たらしいって……？」

悠二は一息置いてからまた口を開いた

それほどに酷かったのだろうか……？

「上半身だけが左肩から腰までにかけて体が割れてるように斬り殺  
されてたらしい」

「……………」

それを想像してみる

単純に恐ろしい…！

「俺達も気を付けようぜ、死ぬのはごめんだからな」

「そ、そうだな……………」

\*\*\*\*\*

同時刻

ここはあの殺人事件が起きた商店街  
事件のせいかな、前よりも商店街に訪れる人は極端に少なかった



……やはり多くの人間は未だに逃走中の殺人鬼を恐れているようである

……とそこに

「……ここもやられたのね……」

意味深な事をいいながら「KEEP OUT」と書かれたテープの前に現れたのはマナトや悠二と同じ年代くらいの少女だった  
彼女は続けて言う

「早く見つけ出さないと……早く『これ』の力を引き出せる人を探さなきゃ……」

手に持っている『それ』を見ながら……

第一章・#1 変わりゆく日常（後書き）

第一話「変わりゆく日常」

いかがだったでしょうか？

自分ではこれが最高の文だと思ってます

…………… 本当に大丈夫かな…………… （泣）

次回初めての戦闘回！

お楽しみに！！

## #2 仮面の少女(前書き)

差し出がましい事を聞きますが

人気が出る小説はどつやったらでできるでしょうか(泣)

## #2 仮面の少女

殺人事件から数日経った今日、マナト達は部活を終え下校中だ

二人仲良く（ホモ的な展開期待したら大負けですよ）2列に並んで歩いており辺りは夕方を過ぎ空は暗かった

今や彼らが歩くのは道のおちこちにある街灯ぐらいしかなくそれに頼るしかない

「なあ、マナト」

「うん？」

「前のHRで先生が言った事覚えてるか？」

「え？…ああ、あの殺人事件の事か？それがどうした？」

「殺人鬼が襲いかかってきたらお前はどうか対処する？」

「うん…」

マナトは考え込むように黙ってしまっ  
無理もない、殺人事件が近所で起きていたなんて未だに信じられな  
いのだ

やはりここは世間一般に従って逃げるに限る！

でも逃げ切れなかったら…？

「俺は…」

何かを言いかけた……………

その時

「うわあああああ！……！」

「！？」

どこからともなく男性の悲鳴が聞こえた

距離からして遠くも近くもない……

路地裏か……！

マナトと悠二は気になったのか悲鳴がする路地裏へと駆け出す

\*\*\*\*\*

着いた路地裏はとっても暗く自分の足のほんの数センチメートル  
までしか見えない

「な、なあ悠二…なんかここやばそうだぜ……おとなしく帰らないか？」

「なに言ってるんだよ！さっきの悲鳴聞いただろ！？その人に何かあったんだから俺達が助けてやらないと！」

「それは…そうだけど……」

ああ…もうこんな不気味なところから早く出た……

(ドンッ)

「ひっ……！」

マナトの足に何かがぶつかる音がした

……が何かおかしい……

うまく説明ができないのだが、なんだろう……ぶつけた物がコンクリートや壁のように硬くはなくむしろ少し柔らかい……

「どうした？」

「悠二……足……ぶつけた……けど……なんか変……！」

マナトは顔が真っ青になり硬直していた

やれやれ、と悠二が暗闇の中目を凝らしてマナトの代わりに足元を調べてみる  
そこには……

「……」



「なななな、なんだよ悠二……！黙ってないで何か……！」

……二人は見てしまった

本体から多量の赤い液体を流しピクリとも動かない……

死体を

「ぎゃあああ……？悠二……！早く……早く警察を……！」

二人は、特にマナトはかなり焦っている  
なにせ今朝聞いた殺人現場を今こうして目の当たりにしているのだから

マナトは焦りのせいで自分の携帯電話を持っている事さえ忘れ悠二に電話をかけさせようと指示する

さすがの悠二もそんな事指摘してる余裕もなくマナトに従い自分の鞆から携帯電話を取り出そうしていた

……しかし彼らが警察へ通報するのを許さない『存在』がいたのだ

「……？なんだあれ……！？」

「……え………？」

二人は『存在』に気づきついに動かなくなってしまう……

というよりもそれを見て恐怖で動けずにしたのだ

そこにいたのは、二足で立っているのだがどう見ても人間ではない  
姿をしており特に右腕は巨大な刃の様なものが生えている

その『存在』を一言で例えるならば……………怪物

「うぎゃああああああ……！……！殺されるうううう……！……！助け  
てええええええ……！！！」

マナト、本日二度目の悲鳴

「まさかコイツが殺したっていうのか！？逃げるぞマナト……！！」

「死ぬのいやあああ……！！」

「ほら！泣きわめいてないで逃げるぞ……！！」

自分がすっかりせねば……もうマナトは頼りにならないかもし  
れない

悠二は彼の腕を無理矢理引っ張り逃げようと試みる

……だが

「「！？」」

怪物は逃がさないと言わんばかりにマナト達の頭上を飛び越え先回  
りした、なんつー跳躍力……！

「くそ！こんな所で！……」

「俺は……死ぬのか……」

絶望に浸る横目に怪物は二人に向かって左手をかざしてきた

「？」

二人が疑問に思った……次の瞬間

「……………！」

「「うわぁっ!?!」」

怪物は左手から波動を放ち、二人を吹き飛ばす

それも10m以上も

「……!悠……!大丈夫か……!?!」

「はは……飛ばされた衝撃で足しくじつちまった……もう走れねえ……  
お前だけでも逃げろ!」

「そ、そんな……できるわけないだろ!」

さすがに外道の道には走りたくないのかいくら怖くても親友は置き去りにするつもりはないマナト

……（友情魂が）ふつくしい……

だが人一人担いでこの怪物から逃げられるなんて到底思えない

どうすりゃいいんだ……！！

「はぁー！！」

「グルガアッ！？」

「「！？」」

……突然の出来事だった

何者かがいきなり現れ怪物に攻撃を仕掛けたのだ

「大丈夫？」

「ダリナンダアンタイトイ！？……まあなんとかって感じたな……  
…それより何だよその格好……」

いきなり現れたのも驚きであったがその者がしている格好にも驚きを隠せなかった

全身に黒色ベースで所々白いラインが入った鎧っぽいスーツを着ており頭部にもそれに似合ったプレートが何枚か突き刺さっている仮面をしている

「説明は後！それよりあれをどうにかしないと！」

声からして明らかに女性だ

しかもマナト達と同じくらいの年齢を思わせる声だ

（でも世の中には三十路でもロリ声出せる人がいるんだよ）

「グルル…！」

「はあああああ！」

その者は怪物に向かって走り出す……

書き忘れるところだった。その者は剣……否、玩具のような形状をした剣を持っていた

「はああ…！」 剣を怪物に降り下ろす……しかし

「グガッ…！」

「なっ！？……って、きゃあ…？」

遺憾ながら……怪物は右腕の刃で防ぎ、してそのまま押し返す



その者はなんとか受け身を取り間合いを取った

「(ダメ…このまま戦っても勝てない……ここは一か八か!)」

左腰に付けられているノート型のホルダー『ブッカー(インフィニティブッカー)』からあるものを取り出す

「(お願い!)」

取り出したのはカードだった

そのカードには何やら絵柄が描かれている

……するとそのカードを

## 【ATTACK RIDE】

右手に持っていた剣『ダイヤモンドライバー』の鏢部分にあるカードの差し込み口に入れた

それと共にディアンドライバーからダンディな電子音声が流れる  
そしてその反対にあるトリガーを引いた……が

【ERROR】

「あああああ!!?」

「ええええええええええええええええ!!?」

……一瞬何が起きたのかわからなかった

目の前の仮面の人が突然全身に強烈な電流を浴び悲鳴を上げ苦しみ  
始めたのだ  
やがて力尽きたのか地面に膝間付いてしまう

「グル！」

それを好機だと思った怪物が腹部に蹴りを放った

「かは…！？」

全てがスローモーションになった

その一瞬だけが異様な長さに感じる

蹴られた勢いで後ろにいるマナトと悠二の前まで転がり込んできた

「おい大丈夫か！？しっかりしろ！！」

「しっほっ！しっほっ！はぁ…はぁ…」

仮面でよく見えないが苦しいのがわかる……それもかなり重度……

「くそ！今度こそ終わりかよ！」

その時だった……

それまでに仮面鎧で隠れていた姿が虚像を描きながら消えていき顔が露になっていく

「変身…解けちゃった…」

正体は………

やはり先ほど声からの推測通り自分達と同じくらいの年代少女だった

かわいいな……

いやいやそんな事思ってる場合か!?

彼女の額からはとてもではないが結構な量の血が流れている

ここまで酷いと生命に関わる重体かもしれない……

「うめ…ん…なぞ…い…」

彼女はそれだけ口にするとあまりの痛みに気を失ってしまった

再度訪れた災厄……

どうすれば……どうすればこれをきり抜けられる……!?

「……!」

意識したわけではないが偶然彼女が握られている『ダイヤモンドライ

バー』がマナトの視界に入った

もしかしたら……

「マナト……!？」

マナトは彼女につけられていた『ブツカー』を無理矢理に外す……  
…そうするとベルト部分が『ブツカー』にシユルルと収納されて  
いった

……が感覚的にわかる……

それを左腰に押し付けるとベルトが再度放出しマナトの腰を軸にゲ  
ルツと一周して彼を巻いた

「!?!?.....おい、まさか!?!?」

「.....俺も男だ...男はやらなきゃいけないときがある!?!?」

そういうとマナトは『ダイヤモンドライバー』を勢いよく拾い上げた

「悠二、さっきの『襲いかかってきたらどうする?』.....って質問、  
これが答えだ!?!?」

なんだろう?.....さっきあんなにも怖かったのに.....  
今はいける気がする.....いや、いける気がしない!?!?

どんどん感覚的に分かってきた

マナトは『ブッカー』から一枚のカードを取り出す  
そのカードの絵柄は先ほど彼女が戦っていた時の『姿』が描かれて  
いた

そしてそれを怪物に見せるように向け……

「……………変身！」

【KAMEN RIDE】  
【DIAND】

電子音が鳴り響くと今度はマナトの周囲に人型の残像が現れ取り囲み頭上には半透明なカードが幾枚浮遊していた



次第に残像がマナトと一体化していき同時に浮遊していたカードも頭に向けて降り注いでくる

「マナト……？」

悠二が目を疑うとその場にマナトはいなかった

代わりにその場には全身に鎧スーツと仮面に包まれた影があった……

その姿は先ほど彼女が戦っていた時の姿と一緒に……いや、黒色ベースだった鎧スーツに赤、茶色、青などと様々な色の配線がバランスよく駆け巡っておりさらに極めつけにカードが突き刺さったかのように見える仮面には丸い大きな赤い複眼が二つ付いていた

なにわともあれ彼女が戦っていた姿とは少しばかり違う………今の姿の方が一際目立って………

そう……これこそ坂白マナトの現在の姿

その姿を見た悠二は驚きのあまり声すら出ない  
というか口が半開きしてしまっている

「な、なんかやった……!!なんか知らないけどやった!!よし……!  
倍返しにしてやるぜ……!!」

さっきの恐怖心はどこへやら

彼はがむしゃらに怪物に走り出していった

「うわあああああああ……!!うらあ……!!」

そのまま勢いを殺さず怪物に『ダイヤモンドライバー』で斬りかかる

「ゲルツ!?!」

怪物は腕刃でマナトの攻撃を受け止めた……つもりだった

「やあゝあ!だあ!でいやあ!……!!」

一発目の斬撃は止めたのだが怪物の反応速度よりも早く二発目が入る

その流れで三、四、五、六……とヤケクソになってどんどん怪物を斬ってダメージを蓄積させていく

「うりゃああっ!!」最後の絞めに怪物が吹き飛ぶくらいの斬撃を喰らわせた

まただ……

次する事が無意識に頭に浮かんでくる……!

吹き飛んだのを確認すると ブッカーから更なるカードを取り出した  
そのカードを変身した時と同様にダイヤモンドライバーへ差し込みト  
リガーを引く

【ATTACK RIDE】

【BLAST】

少女が使っていた時と違い「エラー」と鳴らず「ブラスト」と発音

された

さっきみたいな強烈な電流もないし……これが正常運動なのかな……？

と、とにかく今はアイツをなんとかしないと……！

促すように怪物に剣先を向け……

すると剣先付近の空間から銃弾が現れ、そのまま怪物へと飛び交う

……それも一発や二発だけではない、数えきれない程の、しかもマシガン以上の連射速度だったのだ

その弾のほとんどが怪物に命中した

「グルアアアアアア！？」

「うわああ〜！？剣から弾丸出てきた！？ど、どつなってるのこれ！？」

敵を無視し、むしろディアンドライバーをあらゆる角度から恐れながらそわそわと眺めてみる……

ま、マジでこれどうなってんだ!?

「マナト!!前!!」

「え?」

悠二の指摘によりディアンドライバーを眺めるのをやめて前を見ると苦し紛れにストレート攻撃してくる怪物が……

「うおわっ!こっち来るな!!」

慌てて回避しつついでに怪物をもう一度斬りつけある程度の距離まで吹き飛ばす……

やれる……!!

このまま押し切ろう!!

「よ、よし!これで最後だ!!」

再度カードを引き抜き（以下省略）

【FINAL ATTACK RIDE】

【DI-DI-DI-DIAND】

ダイヤモンドライバーの刀身に粒子らしいものが集まっていき次第に青白く輝いていく……

「うおおおおああ！！！」

その状態で身構え敵目前まで走り出す  
そこまで到達すると……

「でややあああああああ！！！」

怪物の眼前で消えてみせ、再度一瞬にして怪物の背後に現れてみせた（簡単に言えば怪物の背後に通り過ぎる間だけ消えた）

すると怪物は悲鳴を上げることなく……まるで銅像のように硬く  
なった………

その後……それは粉々に崩れ散っていく

それが怪物の最期だった………

「はあ……はあ………うそ……！？本当に俺がやったの！？……やった！  
やったあぁー！！！」

まるで小学生のように万歳して喜びそして変身解除………もとい元の

姿に戻り喜びの感情を必死に押さえ落ち着こうとする

……うん、でもやっぱり嬉しいものは嬉しいよ  
やった！やったぞ……俺！

「マナト……大丈夫か……」

さすがは親友！

さっきのマナトの姿やら怪物やら気になることがあるのに真っ先に  
友人の安否を心配してくれるとは……！

「な……なんとか、大丈夫……それにしてもこれ……」

『ディアンドライバー』

すごい兵器だ……

この世にこんな非現実的なものがあるのか……！

「それよりも！まずはその人を早く病院を運ばないと！」



少女はまだ気絶している

今は彼女の回復が何より優先すべき事だ

「わりい、俺の携帯吹っ飛ばされたとき壊れたみたいだ……お前の  
で救急車呼んでくれ」

「分かった！」

怪物を倒せたのがよほど嬉しかったのかはたまたまこうして生きてい  
られるのが嬉しいという感情が抑えられないのか手が震えるほど張  
り切ってポケットから携帯電話を取り出し、119番へ電話をかけ  
救急車を呼び彼女を病院へと搬送させた

彼女、無事だといいんだけど

「あ……この剣と本（？）返しそびれた!!」

## #2 仮面の少女（後書き）

戦闘映写は難しいですね

ダイヤモンドのファイナルアタックライドなのですがカイザスラッシュ（ゼノクラッシュ）とほぼ同じです

強いて違いがあるとすれば刀身が黄色く輝くのと青白く輝くところでしょうか

### #3 少女からの戦利品(前書き)

なんと！投稿してわずか二日しかたっていないんですが400もア  
クセスがありました！！

せいぜい50近くだろうとは思っていたのですが……………

なんだか俄然やる気が出てきました！！

### #3 少女からの戦利品

あの日、家に帰ったら門限をとくに過ぎていたので両者共に両親に怒られました

「両」だけに……

あれ……ウケない……！？

と、まあそんな事はどうでもいとして

あの事件から四日後

恐らく怪物にやられたであろう男の死体はあの後夜中の内に警察が回収したらしい

通報者のマナト達はその場で軽い事情聴衆を受けたが疑われることも無かった

当然…怪物が殺したって言うても信じてもらえないと考え二人はあえて事実を話さないことにした

その二日後にはその事は新聞に「男、謎の死を遂げる」という見出しで掲載された

まあ…殺人なんだけどね…やっぱり話した方がよかった………かな………？

次に訳のわからない仮面になって戦ったあの少女の事だが悠二の話によると病院に搬送された後、おととい目が覚めたらしい

一体そんな情報どこから収集してきたのか気になるところだが……

とりあえずマナトの提案でお見舞いに行くことにした

あの日に返しそびれた物だって返したいし彼女の容態も気になるし

……

「……というわけで病院に来たわけだけど……」

「うーん…悪いけど名前までは分からなかったな」

よく考えればマナト達は彼女の名前を知らない

これじゃナースステーションで病室の場所を聞き出せないし手当たり次第探して、病室の前の彼女の名前が書かれたプレートが目についたとしてもそれが本当に彼女の名前かどうか分からない

よわった……

……はいはい、分かりましたよ

このままじゃ展開進まないからこの作品の（自称）神様であり作者である私が主人公補正かけてやりますよ

「（コイツが神様とか認めたくねえ！！）」

「（全くだ！……でも本当に展開進まなくなるから言わないでおく

か  
」

二人が困り果てていると……天（笑）は見放さなかった

「……………あ  
」

「……………あ  
」

なんとこれは天（笑）の巡り合わせか……

彼女に病室ではなくナースステーション付近でバッタリと会えてしまった

イエイ！  
さすが私！  
グッジョブ！！

……あれほど血を流して命に危険があるとマナト達は危惧していたが少女は頭に軽く包帯が巻かれただけで怪我は軽そうに見えた

……でもいくらなんでも回復早すぎないか……？

いや、実際スタスタと歩いてきたから大丈夫なんだろうけど……

ま、いつか、無事だったんだから！

「あ……あの……ごめんなさい……！」

「「！？」」

なんと彼女はその場で深々と礼をして謝ってきたのだ

これは一体どういう事だ……？

「あの時……守ってやれなくて……むしろ逆に守られて……」

「あの時ってもしかして四日前のあの事件の日の事か……」



「別にそっちが謝る必要もこっちが謝れる必要もないと思うけど……  
…っっていうか俺達が礼言わなきゃな、あの武器みたいなのなかった  
ら全員助かってなかったし……」

「え!?!もしかして変身したの!?!」

「変身って…ああ、まあ……俺が使った」

なんかいきなり突っかかってきたな……

「あ、もしかして他人に使われたらまずいとかそういうんじゃない……」

「そうじゃないの、ただ気になることがあって……私の変身姿  
と君の変身姿って違ってたりしなかった……?」

それを聞いた瞬間あの時の事がフラッシュバックされる

確か彼女の変身姿はほとんど黒一色で所々白い線が走っている単調

で質素なものだった

それに比べマナトの変身姿は黒色鎧スーツの上に彩りどりな線が走っていて仮面には真っ赤な複眼まで付いていた

ここまで相違点があるのに同じ姿なんて言えるはずがない

「そうなんだ……だとすれば……」

少女が何かいいかけた

……だが

「まあまあ、一旦話切ってお互い自己紹介しようじゃないか、てかここ玄関ホールで話しくいしさ、病室いかない？」

さすがイケメン

病院だから彼女自身の部屋ではないとはいえ女の子の部屋に潜入しようというのか！

これだからイケメンは…

でもまあ悠二の場合はそんなこと意識してないだろうし確かに人々が共有するこの場では話しづらいかも

「あ、そうだね…じゃあ案内するね」

彼女の許可も難なく貰えたので一行は病室へと向かった

\*\*\*\*\*

着くと重傷患者に使われる一人一部屋の個室だった

少女はベッドの縁に座り、二人も元々立て掛けてあったパイプ椅子を開いて座る

よし、これで誰にも気にせず話せるようになった

「じゃあまずは俺から……俺は神岡悠二、よろしくな」

くそ、イケメンが…

普通に自己紹介してもかっつけえじゃねえかよ……

「じゃあ次俺、名前は坂白マナトだ、悠二に同じくよろしく！」

うん……ぎこちない…悠二みたいに爽やかにデキナカッタ……

「マナト君に悠二君…ね、私は『サカツキライナ賢月来奈』です、よろしくね」

彼女……もとい来奈は最後にニコっと笑ってくれた

…ああ…天使の微笑みみたいだ……かわいいな……

「（って悠二はかつこよくできて来奈は可愛くできて………平凡な俺だけで浮いてんじゃない!?）」

\*\*\*\*\*

「……で、さっきの話を続きなんだが……」

「うん、『あれ』を使ったっていうのは……」

「それってもしかしてこれの事か？」

マナトは自分の持ってきた鞆からディアンドライバーと ブッカー  
を取り出し来奈に見せてみた

「返そうと思ってな……」

「わざわざ持ってきてくれたんだ…ありがとう…」

当然だ、なんでも借りた物はキチンと元の持ち主に返すのが鉄則だ、  
しかも今回については無断で借りたようなもんだから礼をして……  
「悪いんだけど……マナト君が持っていてくれないかな？」

Why?

「え……………だってこれ来奈のやつ……………」

「……………もしかしてさっき話してた変身姿がどうのこつのって……………」

「うん……………実はその剣『ダイヤモンドライバー』って言うんだけど……………あ、そっちの本みたいなのは『ブッカー』ね……………ダイヤモンドライバーは人を選ぶの……………」

「人を選ぶ……………?」

「あの事件で見た通り、私みたいな不適合者が変身するとあまりダイヤモンドライバーの力は引き出すことができないの……それでも無理矢理に力を使おうとすると……」

「……あんな風に全身に気絶しかねないほどの電流を浴びる……って事か」

「ええ、でもダイヤモンドライバーが選んだ適合者が変身すると力を何のリスクも背負うこともなく最大限に活かすことができる……その姿を『ダイヤモンド』と呼ぶの」

「『ダイヤモンド』…?」

「そしてマナト君……あなたは選ばれた、『ダイヤモンド』として」

「な、なに……！……って全然実感が持てないんだけど……」

「適合条件は不明だからね、しかも適合者だっごくくわずかだっ

研究所で言われてたし」

…ん？今『研究所』って……………

「研究所？」

「うん、そこでダイヤモンドドライバーが作られた所なの、私の両親は科学者で二人ともその開発工程に大きく関わっていて特にお父さんはダイヤモンドドライバー開発部の最高責任者だった…………でも今はその研究所はないの」

その事を話し出すと来奈は表情が一気に険しくなっていた

なにかあるんだろうか？

「原因は二人も事件の日に見た…………あの怪物よ…………研究所は怪物にやられたの、跡形もなく…………お父さん達も…………」

そうか…………それで表情が険しくなっただんな…………  
悪いことしたな



「え？……あ、ごめん、思い出させて……」

「いいよ、私から言い出したことなんだしもうキチンと受け入れたし……でね時折お父さんとお母さんに研究所に連れていってもらったからディアンドの事知ってたまたま研究所が襲撃されたとき私は自宅にいたから助かったの……その事件の数日後に宅配で完成したディアンドライバーと ブッカーと『お父さんからの手紙』が届けられてた……手紙の内容は私に親としての最後の言葉とディアンドライバーの適合者を探してほしいって内容だった、もともと私達一家は近くに親族はいないし両親が残してくれた遺産では到底暮らしてはいけなくなったの、だから私はその事情も兼ねて通ってた学校も辞めて生きるために家も売って旅に出たわ……各地を転々として、そしてついに君という適合者を見つけたの」

「そうだったのか……」

だとしたらさぞかし苦労したのだろう

両親の死を受け入れながら自分も必死に食らいついて生きてきて……必死に数少ない適合者のマナトを探してた……そこまで必死になられちゃその事も断れない……！

「よし、分かった！！ようは俺がああ怪物を……って怪物ってあの一匹だけじゃないのか？」

「うん……いたる所で出現してるって目撃情報があったの私も何度が襲われたし……まあダイヤモンドライバーがあつて私でも倒せるほど弱い怪物ばかりだったから……私も怪物に関してはよくわからないの、なぜ人を襲うのか……」

できれば怪物の事も知りたかったが……まあ仕方ないか

「……なるほど、よし頑張れ！マナト！」

「悠二！？お前人の事だと思つて!？」

「やっぱり……ダメかな……?」

ぐ……そんなに上目遣いしないでくれ……俺にはダメージが大きすぎる……！

「~~~~!!!!よし！分かった！その怪物退治引き受けた！」

「本当に!?!?!無理……してない?」

「してない！……って言ったら嘘になるけど、それほど困ってて見放したら男が廢るでしょ？……だから、俺に任せて……」

「……！！ありがとう！！本当にありがとう！！」

彼女は何度も頭を下げてマナトにお礼をいった

たぶんマナト達が思っている以上に来奈は苦労したんだと思う

彼女の必死に頭を下げる姿がより一層そう連想させてくるのだ  
だから余計に断れない

いやむしろここまでなると彼女のためにもやってあげたいとさえ思  
えてきた

「マナト、俺も知った身だからできる限りの事は手伝わせてもら  
うぜ」

「悠二君もありがとう……もちろん私もマナト君のサポートはするか  
ら……」

「ああ……！二人ともこれからよろしく……！」

これがマナト達にとって非日常となる第一歩の始まりだった

### #3 少女からの戦利品（後書き）

というわけでこの作品のヒロインでした

彼女は私の友人をモデルにして創作しています

ですがモデルの元になった友人は万人が認めるほど美人なんです  
がぶっちゃけていうと鬼のように性格が荒々しいです

まるで男です

（自称）女王です

マゾヒストの方なら喜ぶかもしれませんが

ついでにいうと私含め周囲の友人も手下扱いされてます

私はいつも友人として対等な立場でいられるように要求はするん  
ですがねえ…「誰に口聞いているの!？」とか「立場わきまえろ!」  
とかいって全く聞いてくれないんです

男である私が女に敵わないなんて…（ちなみに同級生です）

その鬼の部分を抜いて作ったのが「賢月来奈」なのです

以上、私の愚痴を聞いてくれた方ありがとうございます

あいつが来奈みたいにおとなしくなってくれたらなあ……

## #4 彼女のこれから（前書き）

### 第四話です

意外にここのサイトはシステムが複雑だな……

正直舐めてました……

これじゃ更新が予定より遅れちゃいそう……

#### # 4 彼女のこれから

マナト達が来奈のお見舞いに行ってから二日後の今日、休日終わりの月曜日である

大体の人が感じていることだろうが休日から平日になるこの瞬間は脱落感が大きく休日でなまった体を平日初日に無理矢理に動かすというのは楽ではない

マナトと悠二もそんな類いの学生である

その証拠に二人はHRが始まる直前、自分達の席の机に這いつくばっていたのだ

「悠二い…しんどい…」

「奇遇だな…俺も同じだ…」



二人はお互い向き合いもせず口以外何も動かさず最低限の会話を交わしていく

遠くから見ると本当に寝ているようにしか見えない

お前らだらけすぎ……

そんなこんなで教室に先生が入ってきた  
そしてHRが始まる

いつも通りだ

「おはよう」

「「「おはようございます…」「」」

クラスメートの大体は先生に挨拶を返した

マナト達みたいに気力がないものは上の空または顔さえあげてない生徒もいる

先生も先生で気づいていない

……だが次の先生の発言でクラス全体が反応することになる

「えー、突然だが今日はみんなに転入生を紹介する」

その発言でクラス全体がざわめく

「（転入生…？）」

「（誰だ…？）」

マナト達含め気が無かった者も気になったのか一斉に注目し始めた

学生にとっては転入生がくるというのは数少ないサプライズイベントの様なものだ

誰だって多少は興味が湧くだろう

「入ってきなさい」

「はい」

教室の外に待機させていた転入生を招き入れる

教室の引き戸が開きその者は教卓へと進み最終的には先生の隣へ立った

そして先生はその者の名前を黒板にでかでかを書いていった…

「佐藤 直哉」と

「×高校から来ました、佐藤 直哉です、よろしくお願ひします」

入ってきたのは派手な印象も地味な印象も受けることなくむしろ「

THE・普通」と呼ぶに相応しい人物だった

佐藤直哉の挨拶が終わるとクラスからは普通に拍手をもらい先生に指示された空いている席へと座る

「それじゃHR始めるぞ」

そして再度いつものようにHRを開始……

「失礼します！先生！ちょっといいですか！？」

とはいかなかった

というのも始めようとした瞬間誰かが少し慌てたように教室へ入ってきたのだ

「どうしました？」

入ってきたのは別のクラス担任の熱血系先生だった

佐藤を含めたクラスがなんだ？なんだ？と不思議そうに見ていた

「実はウチのところの転入生とお宅のところの転入生が間違っ  
て入れ替わって入ってるんですよ！」

「あ、そうなんですか、ちょっと待ってください……佐藤君！君も  
ついてきてくれ」

「あ、はい」

そうすると佐藤と二人の教師は教室から出ていった

まさか転入生が二人も来てたのかと一部のクラスメイトが騒ぎ立てる

確かに同じ時期に二人も同時に転入生がくるなんて珍しいの中の珍しい出来事だ

その転入生同士が兄弟かなにかの関係をもっているというのなら話は別だがそれだと大体は一緒のクラスに入らされるのが普通…

だとしたら他人同士か…？

と、あまり時間もかけずウチの担任の先生が教室に入ってきた

あれ…？佐藤がいない……

「すまんすまん、佐藤君は本来このクラスに入る予定ではなく、『もう一人の転入生』と名簿記入が何らかの間違えで入れ替わっていたらしい、今度こそ入ってくる転入生こそこのクラスの生徒だ、入ってきなさい」

「はい」

先生の呼び掛けに応え転入生が入ってくる

それに対して一部の男子が興奮状態に陥る者もいた

それもそのはず、入ってきたのは佐藤が男だったのに対し、今度は女子が入ってきたからだ

しかしその男子の中で約2名、他の皆とは明らかに違ったりアクションをとった人間が…

「「…」」

マナトと悠二は驚きの余り絶句して無意識に口を大きく開けていた

先生は「佐藤 直哉」という名前を消し、新たに今いる転入生の名前を黒板に書き込んでゆく

「賢月来奈」と……

「この度、赤ヶ龍高等学校に転入した賢月来奈です、よろしくお願  
いします」

なんともう一人の転入生は来奈だったのだ

挨拶を軽くすませると

「来ちゃ～～～ん!!」

一人の男子生徒が教室に響き渡るほどに叫んだ

同じ転入生の佐藤とは思えない……（泣）

少しそれに驚いたがその後クラス全体が笑いに包まれる



「こら！転入生を困らせるんじゃないぞ、ちゃんと仲良くやるんだぞ」

湯を軽く入れる先生、うん！先生らしい！

「あの先生…私はどの席に…」

「そうだったな、賢月君の席はあの坂白と神岡の間の席だ、そこを使ってくれ」

「（え…？）」

指定された席を見てみると…いやその席じゃなくて両端を見てみるとそこには未だに口が塞がっていないマナトと悠二の姿がいた

「（マナト君に悠二君！？）」

前に会ったばかりなのに見慣れた感覚で驚いてしまった

席も近いだなんて……………これなんて漫画？

「？…どうした、賢月？」

「あ…いえ、なんでもないです」

「そうか、では改めてHRを始めるぞ…とりたいところだが特に連絡事項はない、今日も問題行動を起こさないように過ごすこと、以上」

先生はそれだけいって教室から立ち去っていったのだった

来奈も自分の席へと向かうのだが……

「マナトく……………って、ちょ！？」

「あ……………」

先ほど興奮していた男子諸君が来奈を遮ってしまっ

「来ちゃんってどっから転入してきたんだ!？」

「血液型は!？」

「なんか趣味とかある!？」

「俺のシャーペンにぎっつ」

「え…あ…その…」

男子からの質問攻め(約一名は質問じゃないが)に遭っ

女子転入生は大体こんなもんだ(そんなもんか!?)

しかしこの状況どうすればいい…

わざわざ話しかけられたのに無視するのはいささか気が引ける…と

思いきや

「ちょっと！あなた達！賢月さんが困ってるじゃない！」

横からグイツと現れたのはこのクラスの女子だ

それも何人も人が来奈を支援するかのようになんて注意してきたのだ

「そつよ！賢月さん一人に対して質問しすぎよ！彼女困ってるじゃない！」

「ええ！？俺達はただ来ちゃんと仲良くしたいだけだっけ！？先生だっけ言っただけだろっけ！」

「だからといって一方的に攻め立ててどうするの！？」

あわわわ…

男子と女子の口喧嘩が次第に大きくなっていく

あんたらが仲良くすべきだと大体の人は思う

来奈はあまりにも壮絶な口喧嘩に耐えきれなくなりその場から離脱してマナトと悠二の所へ向かった

しかし両者共に一步も引かないと夢中になって来奈がいなくなったことには気づいていない

「人気者だな」

「お、おだてないでよ！マナト君！」

「けどよ、無理ないと思うぜ？」

「？」

そうマナトも悠二も男子達も来奈がかわいいと……いやもしかしたら女優さんにだって負けないくらいに美人で体のスタイルもかなりいいと思うのに当の本人に至ってはそんな事は全然自覚してなかったようである

でもまあ自覚させる必要もないな

その方が天然っぽくって余計に可愛らしいし

「ところでなんでこの学校に？」

「ダイヤモンドドライバーをマナト君に託したから」

「それってどういっ…？」

「お見舞いに来てもらったときに言ったように旅をしたの、でもマナト君が見つかったから旅をする必要がなくなったの」

「そういうことか…マナトが『ダイヤモンド』に選ばれたからなあ」

「だからこの学校に転入生って形で入学させてもらったの…かなり強引なやり方だったけど」

「でも今更学校にくるって…」

「学業を疎かにしてはいけないと思って」

「（俺とは正反対の考え方だ！？）」

マナトは心底来奈の積極的に驚いてしまう

今の時代わざわざ学校に入ってまで勉強する人がいるとは…

悠二に関しても「やっぱり世の中には立派な人もいるもんだ」と感心の表情をしていた

「でもひとつ問題が…」

「「？」」

「寝る所がないの、旅をしたものだから…この辺に家賃が安い物件とか知らないかな？」

「「うん…」」

二人は思考を巡らせるが二人とも物件の事なんかに興味もないし知りもしなかった

というかまずこの近くに家賃の安いマンションを扱う不動産屋があるのかどうかも怪しい

しかしここで悠二があることを思い付いたのか一つ提案を挙げる

「そつだ、マナト、お前の家に客用の寝室とかあつたら？」

「あるけどあそこほとんど使っていないから物置になつてるなあ…まあ布団の一つ二つくらい置けるスペースはあるけどそれでもいいな  
ら。」

「本当！？あ、でもマナト君の家族に迷惑が…」

「迷惑どころか大歓迎してくれると思つぜ？」

「そうそう、俺もこいつんちに泊まりに行ったことあるけどあんな温厚な家族はなかないないと思つぞ！」

悠二曰く、マナトの家族は家に泊まったとき「もつここで暮らしち



やいなさいよ」とマナトの母親から言われたこともある

決して悠二を喰おうとしたわけではないのでご安心を

「（お金も節約しなきゃ…）それじゃあ遠慮なく…」

こうして来奈はマナトの家に泊まらせれることになった

ん？交渉しなくていいのかって？さっきの話聞いた通り大丈夫でしょ

ちなみに男子と女子の口喧嘩は授業中をインターバルにするかのよ  
うに休み時間にバトルを繰り広げそれが1日中続いたという、全く  
…よくやるよ…

\*\*\*\*\*

ところで来奈は部活に入るつもりはないらしい（部費とかかかるから）

とりあえず部活がある二人はそれに行つたが来奈はマナトの家に行くため二人が部活を終えるのを校門で待つことにした

その間何人かの人に告白とかナンパとかされたらしいが……

来奈さんモテモテですね

まあもちろん受け入れられることもなく全てを断つた、マナト達を待っていることもあるし

結果的に来奈の人気は留まる事を知らないようだ……

それから1時間くらい経つとマナトと悠二が部活を終え、校門で待っている来奈と合流した

「う…なんだか…視線が痛い…悠二は？」

「ピリピリはしてるな」

それもそうだろ…

さっき来奈にフラれた男子から凄い睨まれていたのだ

確かに端から見ていたら美少女転入生とたった1日で仲良くなって一緒に下校しているようにしか見えないからだ

実際はマナト達と来奈は数日前から知り合っではいるのだが…

「は、はやく行くこう！」

もしかしたら男子が飛びかかってくるかもしれない…そう思ったマナトは二人に早く下校する事を催促するのだった

実際視線が怖かったし…

\*\*\*\*\*

「どつだ？この学校は？」

「すごく活気があっていいなって思った、いつもあんな調子なの？」

「あれは特別だよ、ほら転入生によくある出来事！…まあいつも騒がしいのは変わりないけど」

「よくある…ってなんか違うかい？」

まあ確かに来奈に限らないとよくある出来事にはならないかもな、一種の例えだと思えばいいでしょう

\*\*\*\*\*

とある廃工場にて

「グルル……」

そこには一体の怪物がいた  
マナトが戦っていた怪物と形状がよく似ている

それともう一人

「ねえ、君は僕を楽しませてくれるの？」

中学生ぐらいの人間の少年が怪物を前にして微動だにもせず、  
どこるか少年が前へ前へと進み怪物がそれに怯えるかのよう  
に後退していく

これでは一般的視点から見たら立場が逆だ

「じれつたいなあ…そんな弱腰で君は本当に僕を楽しませてくれるのかい？」

「グオ……」

怪物は弱々しそくに鳴き声をあげる

それに反比例して少年の気迫はどんどん増していくばかり

一体何が…？

「もういい、君には失望したよ、消えて」

それをいうと少年は懐から二丁の大型装飾銃を取り出し、

【KAMEN RIDE】

お互いの銃をスキャンさせる

「次に生まれ変わる時はもっと強い奴になって出てきてね、変身」

「グルア……グガア……グガアアア……!!」

その怪物は無惨にも石のように砕け散った

#### #4 彼女のこれから（後書き）

最近知り合った子が突然自分の学校に転校してくるってもはや漫画の黄金パターンですね

まあただ転校してきたんじゃつまらないからワンクッション置かせてもらいました

ちなみに「佐藤直哉」の出番は予定ではもうありません（キリッ

そして最後の場面、

怪人が人を恐れる、人が怪人を襲うという演出を入れてみました

逆なのはなかなかないんじゃないって思いましたけどこの展開、今の仮面ライダー的によくありそうな展開ですよ

少年の正体は一体何なのか？

次回もお楽しみに！



## #5 坂白一家(前書き)

戦闘させたいんですが敵を出現させるのってなかなか難しいですね  
単にいきなり出してもついていけないし…

## #5 坂白一家

「え！？これがマナト君の家！？」

数分前に自宅が違う悠二と道を別れ、そして今俺の家を見た来奈が  
そう言った

なぜそんなこと言ったのか俺にも分からないが……

言ったら自慢になるが俺の家は他の住居に比べ豪邸だ

それで驚いているんだろうがただ俺的にはそんなに差異は感じられないのだ

でもなぜか来奈はとんでもなく差があるかのように驚いてしまっている

「そんなに驚くことか？」

「だ、だってこの庭ざつと見ても学校のサッカー場ぐらいの広さはあるよ！？」

「え？あ、まあ確かにそうだけど周りの住居と比べてそんなに差はないだろ」

「あるよ！家だってやたらでかいし！」

「そうかなあ…俺の家にはお金持ちでよくいるメイドさんはいないぜ？」

「そういう問題じゃないと思う…」

このまま話しているとキリがないので二人はとりあえず家の中へ入ることにした

\*\*\*\*\*

「ただいまあ〜」

「お邪魔します」

外も外ならば内も内というべきか

外装に伴うかのように内装も立派なものだった

入ってすぐ上を見ると天井までかなりの高さがありさらには吹き抜けの窓があった

次に右を見るといかにも高級感がある壺が花と一緒に飾ってあった絶対に壊してはならないものだとか来奈は悟る

そして床は1畳ずつ交互に木製と大理石が埋め込まれており不思議な模様を演出していた

目に優しく気品が溢れる豪華な床だ

うん…もうこれは大豪邸だな

それじゃなかったらなんて呼べばいいんだ

「ま、あがれよ」

「う、うん」

マナトは綺麗な下駄箱つばい所から自分専用と思われるスリッパを出しそれを履いた

もちろん来奈への配慮も忘れず来客用のスリッパを来奈の前に出す

ここまでしっかりと入りしていると逆に入りづらい  
平凡な自分とこの豪邸が釣り合っていないのだ

それでも入ろうとするがなんだか普段通りな歩き方が出来ない  
ちよつと遠慮がち

「あら、お帰りなさい」

二人が歩きそうすると自分達の向かいから女性が出てきた

色っぽくて綺麗な人だ

和風美人か、もしかこの人は…

「あら？マナト、この子お友達？」

「まあな、ちょっと分けありで家に連れてきたんだけどな、紹介するよ、『賢月来奈』、今日ウチの学校に転校してきた」

「は、初めまして！賢月来奈です」

奥さんがあまりにも綺麗すぎてちょっと緊張して声が裏返ってしまったが…大丈夫、バレてない

「来奈、この人は俺の母親だ」

「よろしくね」

「は、はい…よろしくお願いします」

マナトの母親と予想はできたもののやはり知ると多少は驚いてしまう  
来奈は深々と頭を下げた

あれ？挨拶ってそんなにも頭を深く下げるっけ？

「お茶入れてあげるわ、リビングにいらっしやい」

そういうと奥さんは玄関入ってすぐ左に曲がった所にあるリビング  
へと案内した

そこは狭すぎずちよいと広い部屋になっており、入るとまず大きさを  
何に例えたら良いのか分からないくらいデカイ液晶テレビが目に入  
った

キッチンとは一体化していて料理風景が見えるようになっていた  
食卓の机は表面が光って見えるほどツルツルな木製となっていた

「どっぞ、座って」

「あ、はい」

その食卓に添えてあるいかにも高級そうな椅子に恐る恐る座った  
マナトは遠慮なくドサツと座った

まあ自分の家だからか…

それにしてもこの椅子すごく居心地がいい  
あまりに良すぎて気持ちよく眠ってしまいそうだ

「来奈ちゃんか…可愛い子ね、ウチに住んでみない？」

「「ぶっ!?!」」

あまりに唐突な、且つ話の本题をまさかの奥さんから言い始めたの  
で二人は今飲んでいたお茶を吹き出してしまった

「か、母さん!?!今なんて!?!」

「え?だからここに済んでしまえばって…」



「実はその事で話があるんだが…その前にそれは本当にいいんだよな？」

「…どうしていいんだ？」

二人は来奈が寢床を探していてその理由も話した  
もちろんディアンドと怪物と両親の話はしていない

旅をしていて目的が果たせたとだけ伝えた

大丈夫、嘘はついていない

「あああ、そうだったの、大変だったでしょ？…その事についてはもちろんOKよ、これから家族としてよろしくね」

あ、あっさりすぎる…！

人はこんなにも簡単に了承なんてしてくれるものなんだろうか？

それともこの人が温厚すぎるのか？

「でも、お父様とかに知らせなくても大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ、あの人は私の言うこと何でも聞いてくれるわ」

その時一瞬奥さんの口元がニヤリツとしたのを来奈は見逃しはしなかった

なんだろう……怖いよ！

奥さん怖いよ！！

でも本当に住まわせてくれるなら来奈にとって嬉しいことこの上なし！

しかも自分が家族として受け入れられたのだ

「本当に、本当にありがとうございます！！」

「やあね、もう私達は家族じゃない、ほら泣かないの、可愛い顔が

台無しよ」

構わないでください

今の私は本当に喜びに浸っています

とつてもとつてもとつても…

私は泣き崩れてでもこの喜びを表現したいんです

「まな`とぐんも…あ`りがとね…」

「気にするな、俺も家族が新しくできて嬉しいぜ、ほら」

彼は来奈にティッシュを催促した  
彼女はそれを何枚か取り涙を拭く

「そつだ、父さんは仕事からまだ帰ってきてないから紹介できないけど、『妹』なら紹介できるな、母さん『愛華』って二階でゲームしてるだろ？」

「ええ、随分楽しげにやってたわね」

「そうか、分かった……来奈、俺らは俺と両親と妹の四人家族なんだ、今妹が二階でゲームで遊んでるから行ってみようか」

「でも、それならお邪魔しちゃ悪いんじゃない？」

「遠慮すんなよ！『家族』…だろ！」

\*\*\*\*\*

高級（ry

階段を経由し二階へと上る二人

マナトはあるドアの前に立った

そのドアには可愛いデザインで『あいかのへや』と書いてあった

「愛華あゝ、いるかあ？」

マナトは妹の名前を呼ぶと……

扉の向こうからドタドタとこっちに向かってくる音が聞こえてくる

「兄さん！お帰りですー！」

そして扉が開くと同時に小さな影がマナトに飛び付き抱きついた

「うおっと！ただいま！」

飛び付いてきたのはピンクのリンゴ頭でアホ毛が右に大きく反り出しておりとても活発そうな幼女だった

もしかしてこの子が…

「来奈、コイツが俺の妹の『愛華』だ」

またまた予想通り！  
まあ容易だったけど  
ていうかマナトの妹にしてはかなり幼い  
幼稚園児…？  
小学生…？

「兄さん、この人は？」

「新しく家族になった来奈だ、ほら挨拶しとけよ」

「そうだったですか？よろしくです！来奈姉さん！」

親も親ならば子も子とはまさにこの事

愛華も来奈を姉としてすんなりと認めたようだ

初対面の相手なのにここまで積極的にになれるのは正直尊敬に値する  
かもしれない

「ね、姉さん！？私、お姉ちゃんなの？」

「はい、来奈姉さんの方が私より大人ですし……おかしかったですか？」

家族になったといってもいきなり姉呼ばわりされるのは違和感半端ない

でもさっきと同じようにそれが嬉しく思えた

一人なんかより…全然……

「ところで今何やってたんだ？」

「スマ ラXです！」

「スマ…何？」

「なんだ、もしかして来奈はゲームやったことないのか？」

「ええ、まあ……」

聞いたことはあるが実際は機器に触ったことすらない

あまり興味だつて沸かないし…

「兄さん聞いてください！今日はオールスターモードの最高難易度を2分32秒でクリアできました！」

「お！新記録じゃねえか！ノーダメ達成もできたか？」

「もちろんです！」

来奈から聞いてると何を言っているのかさっぱり分からないがなんか凄さは伝わってくる  
なんか年齢的にも凄い兄妹だな

「姉さんもどうですか？」

「え？」

「ゲームしたことないなら一緒にやるです！兄さんもやりましょう！」



その後、三人で任 堂のオールスター格闘技をやりました  
愛華は手加減を知らず初心者の来奈に対してもボッコボコにやりま  
した

マナトと来奈でチーム組んで二人がかりで何試合したりもしました  
が愛華に対して一撃も加えることができずに返り討ちに終わりました

(ちーん…)

\*\*\*\*\*

あと挨拶していないのは父親だけとなったわけだが今日は出張に行  
ってるらしく帰ってこないらしい

できれば早めに挨拶をしておきたいところだが…

焦る必要もないだろう、奥さんも「大丈夫、私から言えば絶対に断  
りなんてしないわよ」って言ってたし

「いつかその日は終わっていくのであった」

「本当に…ありがとうね…」

## #5 坂白一家（後書き）

というわけで個人的な坂白一家でした！

自分でもこの回はテンポが悪かったような気がします  
たぶん皆さんからの目だと毎回だとは思いますが…

でもやっぱり主人公であるマナトの家族は紹介しておきたかったので

まず奥さんですが表はほのぼの系、裏は（ゲフンゲフン）という性格になってます

誰にも好かれ誰からも信頼されている、まさにできる人です！

そして妹の愛華ですが容姿については完全に私の趣味に走らせてもらってます

（このロリコンめ！）

「〜です」というタラちゃん口調で良い子という印象を醸し出しそしてさらにギャップ萌えとしてゲームがジャンル問わずにとんでもなくうまいという設定もつけてみました

どれだけうまいかはこの回を見てもらって分かったと思います

最後に父さんですがどうしようか悩んでいます

どんな人にすればいいのかなかなか浮かんでこないんです

どうも掴みづらいんですよねえ…

#6 友達(前書き)

今回はとても長いです

自分でも頑張れた気がします

## #6 友達

「それからここここを移行させて…」

ここ赤ヶ龍高等学校二年一組での四時限目の授業中

「ああ、全然わかんねえ…」

黒板いっぱい広がる数式にマナトの脳は疲れ果てていた

体を動かさず、つまり運動は得意な彼ではあるがこういった頭脳をフルに使う作業は極端に苦手なのだ

そもそも一年生で留年しかけたのは4割ぐらいが今やってる数学の成績不足が原因だ

当然、二年生になるとより難しくなり来年の三年生に進学値に到達できる可能性はより低くなる

でも大丈夫、まだ先の事だ

今は一刻も早くこの授業が終わってほしい！

これが終われば弁当タイムが待っているんだぞ！

「？」

彼はふと横を見てみるときつちりとした姿勢で授業を受ける来奈がいた

席隣だしね

しかもノートも覗いてみるとかなりの達筆でかなり見やすく書かれていた

マナトでも解りそうなくらいに

（キーンコーンカーンコーン）

「ようし、今日はここまで」

「起立、これで数学を終わります」

「」「」「」  
「ありがとうございました」「」

\*\*\*\*\*

「やっと終わったああ！！弁当 弁当 来奈、悠二、一緒に食おうぜ！」

先生が教室から出るやいなや早々に鞆から弁当箱を取り出し学校の一日の内の数少ない憩いの時間を満足げに過ごすマナト達三人

うん、やっぱり母さんが作った弁当は美味い

「とじろびよ」

もぐもぐ食べていると悠二が何やら興味をそそるような言い方をしてきた

ていつかそれは言い誘いだな

「あの怪物の事なんだけどよ、ネットの掲示板見たらさ結構目撃してる人多いんだよなあ、でもまだ都市伝説扱いらしいけど」

「……まだ認知はされてないのか」

以前マナト達は怪物によって殺された人間を見たことがある  
実際マナト達もその時までは怪物の事なんか見たことないしまして  
や聞いたこともない、都市伝説扱いだから知らなかったんだろっけ  
ど……

「けどなんで都市伝説扱いなのかな？危険なのに……」

そうだ、人の命が奪われているとあって注目すべき事実なのになぜ  
都市伝説扱いで留まっているという事が気がかりである



それに答えたのも悠二だ

「掲示板見る限り何人かは政府とか警察とかに訴えかけたりはしたらしいぜ、でも何かの間違えだつて簡単にあしらわれたらしい、酷いときには怪物なんているわけない、悪いならいい精神病院紹介します……って勝手に決めつけた挙げて舐めたこと言つたつてな」

「なるほどな、ここ最近、新聞に解明不可能な死亡事件がいつぱい載つてるのに疑問持つてないつてことか……頭堅いな」

「でも公表したらしたで混乱が起きそうだし……ある意味正しい選択はしてるのかもしれない」

「「「はあ」」」

「一体何が正しい選択なのか……」

「分からない」

だが分からないなんて都合のいい言い訳に過ぎないと思う

だって俺には来奈から授かった力があるんだ、二人だって協力してくれる

俺は何のためにディアンドになったんだ！俺にはちゃんとやるべき事があるじゃねえか！

それをしない限りは偉そうなこと言えない

いや、したとしても言えるに値はしないがしないよりは断然マシだ

「悠二、もっとその事について教えてくれよ、例えば近所で出てきたとか」

「それなら聞いたことあるぜ、この学校の近くに神社があるだろ？あそこでそれらしいのが頻繁に目撃されてるんだってよ」

「本当！？だとしたら早く片付けないといけないんじゃないか…！」

「まあまあよ、続きがあつてだな、その怪物遭遇したらしたで脅か

すだけで危害は加えないらしい、その証拠に俺達が初対面の時に起きた事件以来この近辺では死亡事件なんて起きてない」

「あ、確かに」

「でも一応は行っておいた方がいいと思うよ、いつ牙剥くかわからないんだし」

「確かに来奈の言う事も一理はあるな…よし今日学校終わったら行ってみようぜ」

\*\*\*\*\*

ここは学校の裏の辺にある神社

一見すると立派な木造建築の家があつて赤い鳥居があつてまさにどこにでもあるような神社という感じである

悠二がいうには午後5時…今ぐらいの時間帯にその例の怪物は現れるらしい

確かに人気もないこの場所はいかにも何か出てきそうな感じだ

マナトはいつでも変身できるように既に腰に ブツカーを巻いてデ  
イアンドライバーを握って進み、その後ろから来奈と悠二がついて  
くるといったフォーメーションをとっている

とりあえずこの神社をグルッと一周回ってみることにした

「なんかこういつの探検みたいで小さいときの遊びを思い出すな」

「まあ、これは遊びじゃないけどね」

一周の内に会話したのはこれだけ

一周してはみたのだが例の怪物は出てこなかった

そう都合よく出てくるわけでもないというわけか

「うーん、今日は外れ日だったか、また明日ここに……」

マナトが ブッカーを外そうとした

その瞬間！

「グルガア！！」

「「「！？」」」

突然怪物らしい鳴き声が聞こえたのだ

三人は反射的にその方向を見てみると確かに怪物がいた

いたんだけど

「あれがそうか！……でもなんかちっちゃくないか？」

「もしかしたら子供なのかもな、でも人を殺すってなら容赦するわけにはいかねえ！変身！」

【KAMEN RIDE】  
【DIAND】

「さて覚悟しろよ？」

変身を遂げたダイヤモンドは意気揚々と怪物に余裕の態度をとってみせる

本当は怖いのだが怪物にそれを悟られると不利な状況になるかもしれない  
だからこそ強がって…

「!!!？」

これは一体どういうことか  
ダイヤモンドに変身したのを見た怪物は戦おうともせず慌てた様子で逃げていくではないか

予想しえない行動に思わず三人は呆気にとられてしまう

「痛っ!?!」

仕舞いにはその怪物はスッコけて膝を押さえ痛がり…っであれ?

「いま…喋らなかつたか!?!」

「うん!いま確かに『痛っ!?!』って言った!」

「……こいつまさか!?!」

何かを閃いたディАндロが転けた拳げ句こちらに怯える怪物に近づき怪物の背中をまさぐってみる

すると

「背中にチャックがある!?!やっぱりこれ着ぐるみか!?!」



「「え!？」」

ダイヤモンドは少し乱暴気味に背中ofチャックを下ろしていく

「「ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!」

出てきたのは小学生でどことなく貧相な印象を受ける少年だった  
しかもどういうわけか顔を見せた瞬間ダイヤモンド達が要求してきた  
訳ではないのにこれでもかというくらいに涙目になって謝ってきた

136

「とりあえず落ち着け」

安心させるためにとりあえず変身を解除し少年を落ち着かせた

\*\*\*\*\*

なんとか来奈がお姉さんらしく優しく声をかけ泣き止ませると四人はそこらへんの石段に少年を真ん中になるように座った

ちなみに経過時間は5分

「まず名前を聞こうか」

「……」

少年は悠二の問いに応えず黙っている  
恐らく怯えているのだろうか

「悠二君、ちょっと乱暴になってるよ、こういうのは優しく話しかけないと……名前は何て言うのかな？」

「高倉…隼人…です」

「隼人君か…噂になるほど多くの人を脅かしたみたいだけど、どうして人を脅かしてるの？」

脅かしに使った道具はたった二つ

一つは超精巧に作られた怪物風の着ぐるみだ

近めでよく見ない限り気づかないくらい良くできている

一体どうやって作ったんだ？

そして二つ目、ボイスレコーダーだ

これで特撮か何かのテレビで録音して怪物さらながの声を出していた

「僕…弱いし友達あまりいないし…学校で…いつも苛められてて…怪物の話聞いて…それで見返そうと思って…」

「なるほどな」

少年の言葉だとちょっと解りづらいから要約すると隼人は学校では

友達があまりいない上気が弱いからいつも苛められている、直接は仕返しできないからそこで今都市伝説として話題になっている怪物に扮してその苛めてくる奴らを見返したかった

ということである

関係ない人まで驚かせてしまったのは計算外だったらしい

「お兄ちゃんたちが…逃げなかったのが初めてだよ…なんか凄い鎧着るから逆にこっちが驚いちゃった…」

「まあ…あれは……一種の芸だ！」

「そつなの？」

本当は違うけどね  
言えるわけないか…

「それでその子達には仕返しできたのかな？」

「うん…凄い怖がってた…その時は凄くスッキリしたんだけど…その後なんか余計に気まづくなって…苛めだって止めないし…」

確かに脅かすだけでは何の解決にもならない  
ましてやそのいじめツ子は隼人に驚かされたことを知らないんだ  
だったら余計に気まずくなるのは分かるのに…

いや彼はまだ幼い故にその考えに至らなかったのだろう

本当は単に彼の鬱憤ばらしに過ぎないのだ

だがそれも一時的のはず、また苛められてストレスを貯めてしまう

だとすれば…マナトは勢いよく立ち上がる

「よし！隼人！俺達と友達になろう！」

「え？」

「友達あんまりいないんだろ？だったら作ればいい！…俺達が友達  
にな！」

「でも…僕…」

今度はマナトに便乗する形で悠二が立ち上がった

「大丈夫だよ！俺達はお前の味方だ、弱い事なんか気にするな！」

続いて来奈も

「そうだね！一人なんかより二人三人四人いた方が断然楽しいよ！」

「お兄ちゃん……お姉ちゃん……う……ぐすっ……」

「困ったときはなんでも言えよ！できる限りの事はするからさ！」

「ホントに？」

「もちろん！」

それで会話が終了し帰ることとなった

隼人の家は悠二の家の方向が同じだったため彼に送りを任せ、マナト達は坂白家へと直接帰っていった

その日はそれで終わった

\*\*\*\*\*

「うっん強そうな奴いかなあ……」

また別のあるところ、いつぞやの中坊が裝飾銃をクルクル回しながら歩き回っていた

怪物を石にして殺した少年

「うん？」

人気がないところを歩いていた彼だがあるものが目に入った

「獲物発見」

目に入ったのは上手いこと道端に潜んでいた怪物だった

一般人からしたら気づかないがこの少年は普通にかくれんぼをしていた子を見つけ出すような感覚で見つけ出したのだ

怪物に至ってはまだ少年に気づいてない

「でもなんか弱そうだなあ……」

「……………」



「たまには趣向変えてみるのも悪くないかも…っついていってみようかな、なんだか楽しそうな事が起こる予感がするし」

\*\*\*\*\*

パパ、ママ、昨日はね、とっても嬉しい事があったんだ！

何かっていうとね初めて友達ができたんだ！

あつて間もないお兄ちゃん達なんだけどみんなすっごく優しいんだ！

パパとママにも会わせられたな……

うっん……そうしなくてもきつとお空から見てるよね？

僕……頑張るから！

僕の事見ててね！

\*\*\*\*\*

「ふわぁ……眠い……」

「もう…また夜中までゲームやってたでしょ？あまり体に良くない  
」よ

二人はいつものように朝早くから登校を開始していた  
といっても周りには自分達と同じように登校してくる学生もいるわ  
けだが

それにしても眠い…このまま人目にせず寝ちやいたいなあ…

「えいつ！！」

「いてっ！？なにすんだよ！？来奈！？」

「だって眠気覚まさせるためにはこれがいいかなあって」

今のはマジで痛かったぞ、細い腕してるのに力はあるんだな

「おーい！マナト！来奈！」

後ろから悠二の声が聞こえてきた

マナトはそれに応え振り向く

がそこにいたのは悠二だけではない

「あ！隼人君！おはよう！」

「おはようございます！」

悠二と一緒にいたのは昨日まで暗かったが今はマナト達に心を許してくれてきているのか見違えるほど明るくなった隼人がいた

そうか、よほど友達になれた事が嬉しかったんだな

「ところで隼人もこの通学路なのか？」

「どうやら赤ヶ龍高等学校と同じ方向らしいぜ、隼人の学校は俺達の学校よりもうちょい先に行ったところにあるらしい、だから一緒に登校しないかって俺が誘ったんだ」

「うん！いつも一人ぼっちだったから…お兄ちゃん達と一緒に学校行けて嬉しい！」

「なら毎日こうして一緒に登校しよっか？そしたら辛いことなんて忘れちゃうよ！」

「本当！？やったあー！！！」

隼人は手を万歳みたいに体全体で喜びを表現した  
そして笑顔

そうだよ、本来子供はこうでならなくては！

赤ヶ龍高等学校ついた三人は隼人と別れた

とその前に

「ねえお兄ちゃんお姉ちゃん、またあの神社に来てくれる？そしたら一緒にかくれんぼしない？」

「昨日のか、いいぜ、いっぱい遊んでやるよ！来奈も悠二もいいだろ？」

「うん！」

「おう！」

「やった！約束だよ！？」

「ああ、約束だ…ほら遅刻するぞ？」

「あ！本当だ！じゃあね！」

「気をつけて行くだぞぉー!」

彼はランドセルを背に元気よく駆けていった

「さてと…あとはアイツの頑張り次第だな」

「そうだね、苛められてるといっても私達が手をだしたらあの子のためにも、いじめツ子のためにもならないし最終的には自分の力で解決しないといけないからね」

「俺達に出来ることは励みになってやることだけだな」

\*\*\*\*\*

三人と別れて数分後、隼人は自分の来るべき学校へとやってきた

苛められている故にいつもだつたら校門を潜るのさえ嫌になるけど  
…大丈夫、前の僕とは違う！

「（お兄ちゃん、お姉ちゃん…それにパパ、ママ…見ててね、僕頑  
張るから！）」

隼人は意を決して胸を張り校門を潜った

すると早速

「あ、弱虫隼人だ！」

「本当だ！けどいつも暗いくせに今日はやけに堂々としてるな」



「なんかムカつく！やっちまおうぜ！」

まただ…もう見慣れたよこの光景、いつも苛める三人は僕を逃がさないように取り囲んだ

「おい、弱虫！今日はやけに意気がってんな！」

「弱虫のくせに意気がってじゃねえよ！」

「お前なんてどっか消えちまえ！」

いつもの僕ならここで言葉の暴力にシヨック受けてへこたれて泣いてしまうけど今は大丈夫、お兄ちゃん達が励ましてくれたもん！ここはとりあえずここは無視していこう！

「あ！？無視するのか！お前！？」

「弱虫のくせに調子に乗りやがって！」

すると三人の内一人が僕の後ろから背負っていたランドセルを掴み、

「うわっ!?!」

遠心力任せにその場から投げ飛ばした

「ハハ! いい様だな! 俺達の事無視するからだ!」

「やっちまえ!」

それから倒れていた僕に踏んだり蹴ったり追い討ちをかけてきた

「ぐ!?!」が!?!」

だめ！泣いちゃダメだ僕！励ましてくれたお兄ちゃん達のためにも  
パパとママのためにも頑張らなくちゃ！！

泣いちゃだめだ…！泣いちゃダメだ！！

「「らああー何してるです…！」

「やべ！？愛華だ！逃げろ…！」

「逃げろ！逃げろ！」

暴行に耐えているとピンク色のリンゴ頭でアホ毛が右に大きく反り  
出している少女がこっちに走ってきていじめっ子の三人を追い払った

「全く！ほんとうにあいつら懲りないです…！」

「あ…愛華ちゃん…」

「高倉君！大丈夫ですか？」

三人を追い払い僕を助けてくれたのはこの学校で唯一のそして初めて僕の友達になってくれた「坂白愛華」だった  
お兄ちゃん達と同じように彼女もまた優しいんだ

「怪我してるです、保健室にいくですよ？」

「大丈夫だよ、これくらい、僕は頑張らなくちゃいけないんだ」

「頑張るのは怪我が治ってからでも遅くないです！ほら、肩貸しますから行くです！」

そういつて僕は無理矢理愛華ちゃんに保健室に連れていかれた

そういえば愛華ちゃんの名字の坂白ってどこかで聞いたことあるよ

うな…

でも珍しい名字でもないしどこかで偶然耳に入っただのが残ってるんだらう

気にしないでおう

そしてその日の昼休み

「あ、そうだ！僕、昨日愛華ちゃん以外に三人も友達ができたんだ  
！」

「本当ですか！それは良かったです！」

「うんみんなすっごく優しいんだ！でね今日その人たちと遊ぶこと  
になってるんだけど愛華ちゃんも行かない？」

「行くです！みんなで楽しく遊びましょう！」

そんな会議が二人の間で行われた

もつと覧の皆さんはご存じでしょう…

あの三人と愛華の関係を……

こんな超ベタな展開でごめんなさいね

\*\*\*\*\*

そしてその日のあの神社

先に来て待っていた三人と隼人と一緒にいた愛華は互に見つめあって少し硬直し

「愛華…？」

「兄…さん…？」

空気が読めてないのか隼人がささっと互いを紹介しようとするが

「高倉君…お友達って兄さん達の事だったですか？」

「隼人…友達あまりいないってその内の一人が俺の妹だったのか？」

「え？お兄ちゃんと愛華ちゃんは兄妹…？」

こんな漫画的な展開ってあるんだな

「そうだったのか！こんな偶然あるんだな！」

「ちょっとびっくりかも……」

「そうか…隼人…だが妹はやらんぞ!!」

約一名完全に勘違いしている奴がいるがほっとこう……

と思ったがそういうわけにはいかない

なぜかというといつの間にか ブッカー巻いて恐ろしい目線で隼人を睨んでるからだ

「兄さん！私達はそんな関係じゃないです！っていつかその腰に巻いてるベルトみたいなのは何ですか!？」



マナトはハツとし我にかえる

ってかダイヤモンドのこと知らない愛華の前でなに変身しようとしてんだ！

「あ、いやこれは……その……腹巻きみたいなものだ」

「どこに腹巻き巻いて怒る人がいるです！それ以前に怒るのがおかしいです！」

「わ、悪かった！ついカツとなっちまって……」

「だいたい兄さんは……！」

ああ、いつもの始まったな

こうなるとしばらくこれが続くな……愛華の説教は地味に長い

説教受けている俺としては苦痛なんだがどうも妹に頭が上がりらん

兄妹喧嘩にも発展しないし

「あの…もういいんじゃないかな？お兄ちゃん反省してるみたいだし」

「まあ、高倉君がそういうなら…仕方ないです、今回は見逃してあげます、それより今日は皆で遊びに来たんです！楽しまないと損です！」

「助かった…サンキュー隼人、それとごめん、勝手に怒ったりして」

「ハハ…大丈夫」

そのわりには足がガクガクしてるが…本当に大丈夫なのだろうか？

それから五人はいっぱい遊んだ

かくれんぼ、缶けり、色鬼、だるまさんが転んだなど…いっぱい楽しんだ

単純な遊びばかりだったけどどれも面白くそして盛り上がった

ゲームするのもいいけどたまにはこういう遊びも悪くはない

気がつくともう既に日が暮れかけていた

人って不思議だな、楽しい時はこうやってあっという間に時間が過ぎるのに勉強とか授業とか早く終わってほしいときに限って遅くなる

本当…不思議だよ…

その日はそれで終わり、各々が家へと帰っていった

\*\*\*\*\*

マナト達が帰った後の神社

「グルル…」

怪物が身を潜めていた

どうやら先ほどの光景を観察していたようだ

そしてそのまたちよいと後ろ

「（ついできたと思ったら『的』同士の飯事か、別になにも面白くなかったなあ…でも面白そうなのは見つけたよ、『的』の一つが巻いていたあれ…もしかしてあれが『あいつ』が言ってたディアンダつてやつかな…なんだか面白くなりそう…!）」

\*\*\*\*\*

パパ、ママ、聞こえる？

その日からお兄ちゃん達と愛華ちゃんとで学校の終わりに毎日神社で遊ぶようになったんだ

皆でずっと笑顔で素敵だよ！

しかも毎日同じ遊びやってるんだけどね、なんか全然飽きないんだ！

164

何でだと思っ？

僕が思うに遊びの内容が重要なんじゃない、こっやって『友達』とふれあうことが楽しいんだと思う！

もう毎日のその時間が楽しくてたまらないんだ！

この日がずっと続くといいな！

ずっと……ね……

\*\*\*\*\*

それは突然だった

なんの前兆もなく、隼人から全てを奪い去ったのは……

「今日も何して遊ぼうかな？やっぱりかくれんぼ？それとも缶けり？」

「私はだるまさんが転んだがいいです！なんかこうビシって止まるのは緊張感があって面白いです！」

僕と愛華ちゃんは今日もお兄ちゃん達と遊ぶため何をしようか迷っていた

本当は遊べたら何でもいいんだけど今日は気分的に決めておきたい  
何がいいかな…

「あ…」

「どうしたの？愛華ちゃん？」

「学校に今日使った体操服忘れたです…急いで取りに行くんですから先に行ってくださいです」

「あ、うん分かった」

それだけ言うと愛華ちゃんは学校へ走っていった

急いでいくとは言ったけどもう学校からかなり距離が離れてしまっている

帰ってくるのに時間はかかるだろう

待っておきたいけどもしかしたら急ごうとして別の道から近道する  
って事で入れ違いになるかもだし本人も先に行っててって言ってたし

ここは待たずに神社へ行こう

先に行って一人で遊んで待ってればいいし

僕は単純に結論を出しそのまま神社へと向かった



\*\*\*\*\*

「今日は僕が一番乗り！」

神社へ着くとそこには誰もいなかった

たまにお兄ちゃん達が先に來てる事があるけど今日は違ったみたい

「とりあえず何して遊ぼうかな？」

僕は背負っていたランドセルをその辺に置き何をしようと考えていると・・・

本当にタイミングが悪い

お兄ちゃん達はいないし愛華ちゃんもいないし

あの三人がやってきた

「あ！隼人だ！」

「本当だ！弱虫の隼人だ！」

「なんでコイツがここにいるんだよ！？」

来たのはお兄ちゃん達ではなくいつも僕を苛めてくる三人組だった

「せっかく怪物の噂が聞かなくなったから来てみたのに代わりにコイツがいるなんて・・・マジ勘弁！」

「ここはおいら達の縄張りだぞ！さっさとどっかいつちまえ！」

「そうだ！そうだ！ここはおいら達の縄張りだぞ！どっか行ってしまえ！」

いじめ三人組は僕に容赦なく罵声を浴びせてきた

それに縄張りつて……

ここ神社なのに……

とりあえずその事は置いて、まずこの状況をどうするかだ

昔の僕なら耐えきれずに泣いて逃げた出したらろう

でもそんなことしたってどうせ明日学校で嫌味ったらしくその事を指摘してくるはず

……この考えに至ることが出来たのは弱虫だった僕が変わったという事だ

嫌な事から全て避けようとした僕からね

だったらここは負けずに言い張ってみるか！

今の僕なら例え怖くても胸を張って出来る！

よしそれだ！

瞬時に考え、結論を導き出した僕は三人の前に堂々と歩み寄った

「な、なんだよ、やるっていつのか？」

うん、動揺してる！

三人が思い描いている僕ならこうやって意気揚々と迫ってこないかな

「ぼ、ぼ……」

さあ言え！僕、高倉隼人！「僕が先に来たんだ、文句言っな！」って！

「ぼ……」

なあー！

「僕と…僕と一緒に遊ばない？」

「「「は？」「」」

・・・あれ？今なんて言った？

「あ…いや、これはその…」

ああ、どうしよう！

そんなの絶対断るじゃないか！

なんで不利になるようなこと言ったんだ！

僕のバカバカバカバカバカバカ！！

「……」

三人は未だに隼人が言った事を頭の中で理解できていなかった

だって隼人だぞ？あの弱虫と一緒に遊ぼうって誘ってきたんだぞ？

何かの間違えだ…そうだコイツがそんなこと言うはずがない！！

こうなったら力づくでこの場から退かせてやる！！

三人の内、一人が拳を上げた瞬間、その時だ

(ガサッ)

「  
「  
「?  
「  
「

横の草むらから何か物音がした

一同含めいじめ少年も思わず拳を止めてしまった

野良犬か？

そう思った矢先・・・！！

「グルガアアア！！！！」

「で、で、でたああー！！！！」

「あわわわわ……」



草むらから出てきたのは人に恐怖をもたらす異形の怪物だった

怪物の出現に四人とも腰を抜かしてしまう

ついでに言えば出てきた場所も悪い

なぜならその場所というのは鳥居の下にだからだ

この神社は構造上、鳥居からしか出入りできない

つまり逃げ道がないということだ

怯えて抜かしている四人へ怪物はこちらへと歩み寄ってきた

しかもだ、なにやら右腕がなにやらうにうやうにゃと細胞変化している

そしてそれが終わると右腕はサッカーボールみたいな形状になっていた

それにしてもあのボールみたいなの…かなり硬そうだ  
あれで殴られたらひとたまりもないぞ！

「そ、そんな・・・」

もう終わりだ・・・

僕はここで死んでしまうんだ

そしたらパパとママに・・・

「させるかあああああ！・・・」

「「「!?!?!」」」

「お兄ちゃん!?!」

怪物の後ろから救いの手……すなわちマナトが現れ怪物を蹴り飛ばしたのだ

そのまた後ろから来奈と悠二、それに愛華までついてきている

「な、なんですかあれは!?!もしかして噂になっていた怪物……」

「愛華!その話は後だ!来奈、悠二、愛華と隼人達の避難任せたぜ!変身!」

【KAMEN  
RIDE】

【DIAND】

虚像が彼を包み込みプレートが頭に突き刺さっていく……

「に、兄さん!？」

愛華は兄が全く別の姿になったのに唖然としてしまう

それもそうか、突然目の前で一瞬で変わったら……

「兄さん……コスプレの趣味あったですか？」

「違う！ほら危ねえから早く来奈達と一緒に避難しろ！」

ダイヤモンドは慌てた様子で愛華を避難するようにつに催促するが

「グルガア！」

「ぐわあああ！？」

「兄さん！」

その隙に怪物が腕の鉄球で殴りかかってきた

スーツからは火花が散りダイヤモンドも吹っ飛ぶ

見ての通りダイヤモンドにならず生身なら即死のダメージだ

「野郎！やりやがったな！」

しかしダイヤモンドはそんなに柔には出来ていない

多少はダメージがあったもののなんとか体制を立て直し迫り来る怪物に対応する

【ATTACK RIDE】  
【SLASH】

カードを取り出し装填

カードの正体は「スラッシュ」だ

ダイヤモンドライバーの刀身に超細な振動を送らせ切れ味を極限まで  
にあげる効果だった

「うらあ！でりゃー！」

一発一発確実にダイヤモンドライバーで斬撃を当てていき弱らしていく

相手の防御力が高いのか何発か耐えられたが大丈夫だ、問題ない！

「うしー」のまま行くぞー！」

さらなる追撃をかけようとしたその時だった

「グ・・・グルガアアア！！」

「な、なににい！？」

なんと怪物は二体に分裂したのだ

これは一体どういうことか？

「「グルガア！！」」

「ちいいい！！」

大きな舌打ちをし、両者ともに攻防・・・いやダイヤモンドが防戦気味になっていた

二方向から迫り来る攻撃に悪戦苦闘なダイヤモンド

「やばい！あのままじゃマナトが！」

そろそろ外野もダイヤモンドの苦戦ぶりに心配を募らせていく

だがそれとは対称的にダイヤモンドは

「へっ！心配しなくても！そっちが二体ならこっちは二本だ！！！」

押し合っていた怪物を二連続で蹴り飛ばし距離をあける

そしてその際に ブッカーからカードを取り出した



【ATTACK FORM RIDE】  
【KUUGA TITAN】

するとダイヤモンドのスーツが若干紫っぽくなり肩から反り出すほどの鎧が装着され複眼は紫に染められた

さらに左手には「タイタンソード」というダイヤモンドライバーと同等の大きさの剣が現れた

姿形を変え現れたのは「ダイヤモンド タイタンフォーム」だ

ダイヤモンドライバーとタイタンソードで二刀流となりしかもパワーと耐久力も上がるという上出来もの

「おら！おら！どんどん行くぜ！」

「「グオ！？オオツ！？」」

二本の剣により手数が増えたので対応がしやすくなりあっという間に形勢逆転の立場に立つ

「これでもとつときな！」

ある程度斬りつけるとタイタンソードを怪物に向かって投げつけたさつきも推測したとおり防御力に優れているのか、突き刺さりはしなかったものの大きなダメージは負わせることはできたようである

「もつといくぞ！」

その空いた左手でまた新たなカードを装填

【ATTACK FORM RIDE】  
【KUUGA DRAGON】

今度は全体的に青くなっていきタイタンの鎧が外れて軽装になっていく

もちろん複眼も青くなりさつきと同じように左手にはそれ相応の武器「ドラゴンロッド」が握られていた

「ダイヤモンド ドラゴンフォーム」

俊敏力と跳躍力に優れた形態だ

さつきの形態どころかノーマルフォームよりパワーや耐久力は劣るがスピードなら双方には負けない

手数の高さも武器となるのだ！

「おりやりやりやりや！！」

怪物には一切の隙も与えないダイヤモンド  
怪物達もたまったものではない

「てやあー！！」

跳躍力を活かし、空中で二段ドロップ式飛び回し蹴りをくらわしきつきと同じような距離をあけた

「そろそろ止めといこうか！」

ダイヤモンドはドラゴンロッドを放り投げカードを取り出そうとした

圧勝だったな、と思いながら・・・

だがその油断がとんでもない悲劇を起こすのだった

「グ…グオオオオ!!」

「!?!?しまった!」

なんと怪物の一体がダイヤモンドに勝てないと判断し、避難している  
来奈達へと向かっていくではないか!

「くっ!間に合え!」

【ATTACK FORM RIDE】  
【KUUGA PEGASUS】

止めのカードを引くのは止めて代わりのカードを装填

今度はアーマーと複眼が緑へと変色していき左手に「ペガサスボウガン」といった遠距離用の武器を携える

晴れて「ダイヤモンド ペガサスフォーム」になった

視覚と聴覚という感覚神経に優れている形態だが本来今の状況では使うべきではない形態だ

だが今はそんなこと悠長に構ってる暇などない

間に合わないから遠距離というだけでこの形態へ移行したのだ

「ふえ！？」

「愛華！！」

避難していた側も逃げ出したのだが必死に逃げるあまりバランスよく走れなかったため愛華が転んでしまった

その間にも怪物は迫ってくる

「間に合ええええー!!!」

ペガサスボウガンの尻尾を力強く引きそして放つ

怪物めがけて「ブラストペガサス」が一直線に向かっていった

「グオオオオ!!!?」

結果は見事命中

怪物の体には大きな風穴があき絶命

「え……?」

まだ安心するのは早かった

なんと怪物は苦しみながらも鉄球まがいの拳をふりあげたでないか!

このままじゃ愛華が!

「愛華! くそっ!」

生憎、ブラストペガサスが射てるのはたった一発のみ

今から射撃用のカードを装填する余裕さえない

あまりの恐怖に唾然とする愛華に鉄球が降り下ろされてきた



もうだめだ！  
死を覚悟できないままこのまま・・・

「愛華ちゃん！！」

「きゃあ！？」

そこには咄嗟の判断で意を決し、愛華を弾き飛ばす隼人がいた

こっぴつして愛華は殴られずに済むが

隼人は・・・

(ズガアア!!)

神社一辺にもものすごく鈍い音が鳴り響く

それと共に鮮血を撒き散らし吹き飛ばす隼人の姿が・・・

「高倉君!!?」

「隼人君!!」

「隼人!!」

「あああ……」

直後に風穴が空いた怪物は石になり崩れ去った

だがそんなことはどうでもいい

真っ先に愛華と来奈と悠二は側へ駆け寄る

いじめ三人組も側に駆け寄るもその斬劇にその表情はひきつってしまっていた

「隼人！！クツソガアアアア！！」

【FINAL ATTACK RIDE】  
【KU-KU-KU-KUUGA】

ダイヤモンドは隼人がやられたのを見てノーマルフォームへと戻り怒り任せに残っていた怪物に強烈な飛び蹴り「マイティキック」をお見舞いした

「ゲアアアアア！！」

間もなく吹き飛ばされさつき同様石になって消滅

ダイヤモンドはそんなことに気を止めることなく変身を解除し隼人へと駆け寄る

隼人は頭から信じられないくらいの血の量を流していた

「なにしてんだ！！早く救急車呼べ！！」

「今連絡した！隼人！！しっかりしろ！」

抱え込むみんなの手が隼人の血で溢れる  
服にまでも

「お…兄ちゃん…」

「隼人！？まだ意識があるんだな！？もうじき救急車が来るからな  
！！それまで頑張れ！！」

「そん…な…こと…して…もム…ダだよ…」

「勝手に諦めてんじゃねえ！！お前は必ず助かる！！必ずな！！」

「ウソ…はいけ…ないよ…ボク…には…ワか…る…んだ…」

「嘘じゃねえ！！助かるつつつたら助かるんだよ！！」

「ねえ…お兄…ちゃん…」

「もういい…！喋んな！」

ところが警告を無視し隼人は話すのは止めない

必死にマナト達と話をしようとした

「ボク…ね…ユ…メがあ…った…んだ…」

「夢…？」

「う…ん…ガッコ…ウの…ミン…ナとトモ…ダ…チに…なる…って  
…ユメ…」

\*\*\*\*\*

『 やゝい弱虫！悔しかったらここまでおいで！ 』

小学校に入学してからというもの僕は本当に苛められてばかりだったんだ

弱気な僕はクラスの誰とも仲良くなれなかった

それどころかおもちゃみたいに弄ばれて酷いときには殴る蹴るでそれはどんどんエスカレートしていった

これじゃ皆と友達になる夢を叶えられるどころか人間そのものの関係が無くなっていく一方だったよ

でもそんな日々の中にな

『うえ〜ん！！パパあ！！ママあ！！！！』

『酷い怪我です…ハンカチどうぞです！それで涙を吹いて一緒に保健室に行くです！』

その日、小さな夢が叶ったんだ

小さくても叶えられた喜びはとっても大きかった

夢は大きいほどいいってよくいうけど僕はその小さな夢で十分すぎるほど満足したんだ



愛華ちゃんと友達になって・・・

『よし！隼人！俺達と友達になろう！』

『え？』

『友達あんまりいないんだろ？だったら作ればいい！…俺達が友達にな！』

また小さな夢が叶ったんだ

お兄ちゃん達と出会って・・・

今まで苛められてばかりだったから夢を何度も挫折しかけてた

でも『小さな夢』が僕を後押ししてくれたんだ

こんな僕でも友達作れるんだと思うと嬉しくて・・・嬉しくて・・・

せっかくだからどーんとでっかい夢が良いよね

うん、夢はでっかくっていうのはもしかしたら言い出した人が僕と  
同じこつということが起きたから言えたからかもしれない

ただの想像だけだね

それでね夢っていうのはね・・・

世界中の人と友達になる事！！

無茶なのは流石の僕でも分かるよ

でも今の僕にはそれくらいの勢いがあるってことだよ！

その時から僕の将来はとっても明るく見えたんだ

\*\*\*\*\*

「けど…ケツ…キョク…は…ダメ…なんだ…」

「「「・・・」」」

マナト達は黙々と隼人の話を聞いていた

警告しても無駄だと気づいたのは隼人の夢の凄まじさに圧倒されたからだ

誰も隼人の夢を阻む権利なんてない

苛めに遭おうがなんだろうが彼は猪突猛進でその夢を本気で叶えようとしていたのだ

「隼人…俺…」

いじめ三人組の内の一人がこの緊迫した空気の中、口を開いたそれについてくるように他の二人も切ない目で隼人と向き合う

「隼人…ごめん！」

一人が代表して頭を下げた  
いや三人とも下げたな

「いい…よ…ベツ…にアヤマ…らな…くても…」

「けど俺達はお前に今まで酷いことを…」

「じゃあ…ボク…と…トモ…ダチにな…って…」

「え…?」

「ボクの…ユメ…にキョウ…リョク…してく…れる…なら…ユ…ル  
し…てあ…げる…」

「…うん、する！協力する！」

「ヤクソ…クだ…よ…」

「高倉君・・・」

「アイカ…ちゃん…ありがとう…とね…ト…モダ…チになってくれて…」

「私…どうしたらいいか分からないです…」

「アイカ…ちゃん…はその…まま…でいいよ…」

「でも・・・でも・・・!」

「ほら…ナカ…ないの…マッタ…く…これじゃ…ギャ…クだよ…」

「だって…だって…!」

「アイカ…ちゃん…んは…ワラって…こそ…のアイカ…ちゃん…んだ…そんなヨワ…キじゃない…け…よ…」

「うん……うん……！そうだよね……！こんなときこそ笑え  
だよね……！」

「お兄……ちゃん……タチも……ありが……とね……」

「「「……」」」

「まる……で……パパ……とママ……マと……アソ……んで……るみた……いだ……った  
よ……」

「パパ……ママ……そうかお前にも両親がいたのか」

「うん……イマは……おソラ……から……ミ……てるけ……どね……」

「……そうか……」

「けど…サミシ…くなん…かな…いよ…」

「それは友達がいるから・・・？」

「それも…そうだ…けど…お兄ちゃ…んたち…にはイチ…バン…ハ  
ゲま…された…からね…お兄…ちゃんたち…が…パパと…マ…マに  
…ミえ…たよ…」

「・・・」

「」「」「」



「おい……隼人？隼人！？隼人おおおおお！！！」

隼人は皆が自分の名前を叫ぶ中、口を閉ざしてしまい目もまたゆっくりと閉じていく

自分の体が徐々に弱まっていくのが身に染みるほど伝わっていくのであった

その後救急車が来て大急ぎで病院へと運ばれていったが病院に着く前に完全に意識を失っていた

そしてもう二度と隼人が目を覚ますことはなかった

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

パパ！ママ！

今日もね、すっごく楽しいことがあったんだよ！

なんとね！苛めてた三人と友達になれたんだ！

すごいでしょ！！

褒めて！褒めて！

それでね、僕も今からパパとママの所に行くから頭撫で撫でてね！

これからずっと一緒だよ

\*\*\*\*\*

高倉隼人没後から数日後

マナト達四人は墓参りに来ていた

あのいじめツ子三人組の事だが葬式にも来てたし墓参りにもマナト達よりも早くに来ていてあの日を境にめっきり苛めをしなくなったという

どうやら隼人だけじゃなく同じような気弱な少年を苛め回っていたようだ

だがそれも今じゃすっかりない

あの時隼人が夢を語ってくれたおかげだ

あいつらはそれで改心したんだ

アイツは『小さな夢』を持ちながらも周りにはこれだけ大きな影響を与える奴だったなんてな

しかも医者曰く頭にどでかい致命傷を負ったにも関わらず数分間、喋れるほど意識があったのは奇跡中の奇跡だったという

俺にはアイツが必死になって伝えようとしたのを感じたけどな

つまりあれは奇跡ではなく隼人の根性なんだと思う

必死に伝えようかね

「（隼人、お前は本当にすごい奴だよ、

お前の友達はいいい奴ばかりだ、その上、悪い奴もいい奴に変えてしまう程にな・・・天国でもたくさん友達作って夢をいつか叶えろよ！）」

\*\*\*\*\*

墓参りしているマナト達を影・・・

「なるほどね、ディアンドの変身者は坂白マナトっていうんだ・  
・これは本当に面白くなってきたよ・・・！この先がすごい楽し  
みー！」



## #6 友達（後書き）

555みたいな鬱展開を繰り広げたかったんだけどやっぱり難しいなあ・・・

自分で読んでみてもところどころで内容が漠然としてる・・・

本当にプロの方はすごいよ・・・

いやこうやって私の実力とプロの実力を肩比べること自体が異常であり失礼だな

さて気になる方もいらっしゃるのではないのでしょうか？（いたら嬉しー！）

本文中に出てきた「アタックフォームライド」というものですが原作「ディケイドでいう「フォームライド」です

設定上ディアンドには他のライダーに変身する力は持っていません  
ディケイド激情態と同じく直接アタックライドで技を発動します

ではその場合「フォームライド」はどうなるのか？

そこで出てくるのが「アタックフォームライド」です！

「アタックフォームライド」とは「フォームライド」と違い「カメ  
ンライド」せずそのライダーの特殊形態へと移行するものです

え？ディケイドでも直接ファイズアクセルとかになったことがある  
だって？

そうなんですけどもただ名前に差があるわけではありません  
本文中に「ディアンド タイタンフォーム」という表記がありまし  
たね？

実はこれ「Dクウガ タイタンフォーム」とは姿が全く違います！

どういう事かというとディケイドの場合ベルト以外全て原作と同じ  
姿になるのに対し、ディアンドの「アタックフォームライド」はデ  
イアンドの姿を保ったままそのライダーの姿に近づくということです  
もうちょっと分かりやすくいうとクウガのタイタンフォームだとデ  
イアンド風のタイタンフォームになるということですつまり全く新  
しい形態になるんです

・・・私の文での表現能力はこれが限界なんです  
許してください（泣）

あとクウガの能力設定はちゃんと把握してるつもりです

皆さんのご存じ通り、クウガは超変身しても周囲に変換できる武器  
がないと武器が使えません

しかしこの作品では何もない空間からタイタンソードを出したりド  
ラゴンロッドを出したりしています

これは私が独自に作った設定なのでご了承ください

あとディアンドライバーは常時装備です

その為専用の武器を持つフォームは自然と二刀流となります

ただし、響鬼の音撃棒やオーズのトラクロー、カマキリソードのように両手持ちの武器などは例外でディアンドライバーを懐にしまつてあるいは何らかの形で手放して扱うということになります

後書きなのに長文になってしまいました！

#7 バイクとコンピと狂戦士(前書き)

『SHOUT SHOUT』

歌：坂白マナト

#7 バイクとコンピと狂戦士

【FINAL ATTACK RIDE】  
【DI-DI-DI-DIAND】

「ああああ！でいやああああ！！！」

「グルガアアア！！！」

\*\*\*\*\*

・・・今ので五体ほど倒したか

最近になってから本当に怪物が出てくるようになったと思う

まあ、俺自身から探しに出てるって事もあるけどもう三日もやって五体も出てきた

こんなにもわんさかいるもんなんだな

「午前3時か・・・そろそろ帰らないと明日学校も部活も休みだけど父さん達に見つかるといけないし・・・ふわぁ、眠たいし・・・」

\*\*\*\*\*

翌日

マナトはベットから体を起こし眠たい目を擦りながらリビングへと降りる

「ふわぁ・・・あ、おはよう」

「あ、おはよう・・・じゃなくてマナト君！もう10時回ってるよ！いくら休みだからって生活リズム崩したら駄目じゃない！さてはまた夜更かししてゲームしてたの!？」

「いやぁ、あまりにも楽しくて・・・」

嘘だ、夜更かししたのは本当だがゲームはやっていない

しかし本当の事、怪物退治に出かけてましたなんて言えないよなあ  
危ない夜中の上に一人でさらに危険な事してる訳だから知られたら  
いくら託されたからといっても無茶させないために気遣ってディア  
ンドライバーを取り上げられるだろう

そうしたら俺はアイツに・・・隼人に顔向けできなくなる

夢は諦めなくても守ってやれなかったアイツに・・・

そもそも夜に怪物退治に出かけてるのは隼人みたいな犠牲者を出さないためにも特訓を兼ねての事だ

そして人もいないからだ

そうする事で昼間よりは戦いやすいし正体を知られにくい

あの時俺がもっとしつかり戦っておけば隼人は死なずにすんだかもしれない・・・今となっては後悔と反省しか残っていない訳だが・・・

本当にすまなかった・・・

家には家事をしている来奈しかいなかった



この日は朝早くから父さんと母さんは仕事に出てるし愛華は友達の家遊びに行くと言ってたからな

それで俺と来奈は留守番を頼まれてたんだ

眠たげな俺とは対称的に来奈はテキパキと洗濯たたみをこなしているしっかりしてるなあ

そうそう、愛華にはもうディアンドの事とか話しておいた

あの事件で変身してるところ見られてたわけだしそれで隠し通すのも無理だからな、でもまだ父さんと母さんには内緒だ

できるだけ秘密にはしておきたい

例え家族でも心配かけさせないために黙っておくことも大切だからだ

だがいつかはばれてしまう

そうなる前に事を早く片付けなければ

「マナト君？大丈夫？さっきから上の空になってるけど…」

「へ？あ、なんともないぜ！」

嘘はついても体は正直だな

寝る間を惜しんでやってるから体が疲れてついてこれてないんだ

こっちの嘘もバレないようにしないな

あまり良くないけど仕方ないな

【KAMEN  
RIDE】  
【DIAND】

今ので変身したな！？って思った方ごめんなさい

これ携帯電話の着信音なんだ

なんかこの音声、カッコいいと思ってわざわざ録音しました

さて、相手は・・・悠二からか、なんだろう？

受話ボタンを押して電話に出してみる

「もしもし、どうした悠二？」

悠二が電話してくるのはそんなに珍しいことではない  
大体が遊びに誘うくらいだ  
たぶんこの電話もその類いだろ

『マナトお前、夜中に出歩いでるだろ？』

ブツリ、プーップーッ

あれ？俺耳おかしくなったかな？

「どうしたの？悠二君から？」

「あ、ああ…：そうなんだけど手が滑って切っちゃった」

「え？でも今思いつきり意図的に」「ごめん来奈！俺用事思い出した！ちよつと出かけてくる！」「」

と、とりあえず来奈にバレないように外に出よう！

念のため…念のため…

「あ！？ちよつ！？マナト君！？」

「出かけてくるだけだから！すぐ戻ってくる！いつてきます！」「」

マナトは猛ダッシュで玄関で靴を履き神速如く速さで外出していった

「?・・・なんだっただろう?」

\*\*\*\*\*

よし、ここまでくれば流石に怪しまれまい!  
携帯電話を取り出してピッポッパッ、

『おい！なんでいきなり切るんだよ！』

「ごめん、でも来奈達には内緒にしときたくって・・・ってかなんでお前がその事知ってたんだ！？」

『それが知りたかったら俺の家に来い、今は家に俺だけしかいないから気楽に来れるだろ、待ってるからな』

「ちよっ！？まてって！」

悠二はマナトの静止も聞かず電話を強制的に切ってしまった

それにしてもわざわざマナトを家に招くほどのことなのか？

いや悠二の事だ、外にいらんといつても誰かが聞いてるかもしれないことを危惧してるのかもしれない

マナトは自分流に納得してそそくさに悠二の家へと向かった

\*\*\*\*\*

「で、どうなんだ？」

「ちよつと待ってるよ・・・」

あれから数分くらいかけて悠二の家に行った

そして悠二の言う通り彼しか誰もいなかった

マナトはここに来るのはそう少くはない

親友故にだ

躊躇なく上がり早速さっきの事について疑問にしていたことを口にすると何やら彼はパソコンのキーボードを打ち始めた

「『闇夜通り』・・・?」

マナトが悠二が入れたインターネット検索の単語を復唱する

「裏サイトって奴、管理者とか存在しない掲示板サイトだから治安は悪いけどニュースでもやってないような大きなスクープがここにあつたりするんだよ、まあ別に騒ぎ立てなきゃ目を付けられることないけど・・・」

そついいながら悠二はパソコン画面の右端にあるバーを下げていき画面をスクロールさせていく

「あつたあつた、これだよ」

「こゝ、これって!?!?」

なんと画面に映っていたのは異形の怪物相手に圧倒するディアンドの写真があつたではないか

さらに写真の横にはズラーツとその写真に対しての説明文やコメントが書かれてあつた



謎の仮面、怪物、超現象などなどの単語がよく目立って見える

「一体どうなって・・・!？」

「ここに映ってるのマナト、お前だよな？」

これを突きつけられると流石に否定は出来なくなった

なんてたつてダイヤモンドはマナトだけしかいないんだから

「もしかして・・・隼人の事か？」

「え?・・・うん」

流石は親友ってところか

お見通しって訳だな

隼人は俺の大事な友達の人なんだ

それをあいつらが・・・怪物が死なせたんだ、だったらもうそんな人がでないようにして・・・

「マナト、何焦ってんだよ」

「え？」

「いいか？隼人の夢は世界中の人間と友達になることだ、そして俺も来奈も愛華ちゃんも…そしてお前もその夢の一端なんだぞ？それでもしお前が無茶して死んでしまったらアイツどう思うだろうな？」

・・・そこまで言われるとマナトは反論が出来なかった

そんな事わかりきってるからだ

ただわかりすぎていて注目すべき点が曖昧だったとしたら彼は彼自身の命を軽視し隼人の夢に重視しすぎていたのかもしれない

いやきつとそうだ

マナトは隼人が死んだのは自分の責任だと感じている

今でもあの時、しっかりしていればと思うと胸が苦しくなってくる

・・・だが隼人を想うあまり重視しすぎて彼の真意が見えていなかったのだ

隼人の事を想って良かれと思ってやったことは彼は望んでいない  
きつとマナトには自分の夢の希望としてまだまだ生きていてほしい  
のだ

「・・・そうだよ、忘れてたかもしれない・・・アイツは、隼人は  
こんな暴力的なことを望んじゃいなかったはずだ・・・なに考えて  
たんだ俺は・・・」

「隼人はきつと恐れてる、俺達が死ぬことを・・・特にマナトは立  
場上一番死にやすい立場に立ってたんだ、もっと自分に気を遣え！」

「そう・・・だよな、でも来奈との約束もあるんだ、死ぬ気なんて  
さらさらないな！」

「まあ要するにあれだマナト、無茶はするなって事、分かった!？」

「ああ！なんか色々ごめんな！・・・でもありがとう」

「水くさいこと言うなよ、俺達親友じゃないか！それに来奈と約束

したのは俺もだろ？約束した時俺も力になるって言っただろ？」

「そうだったな、なんか俺一人で抱え込んだのかもな・・・」

そしてマナト達は解散し彼は家へと帰っていった

来奈にすぐに戻るって言ったけど一時間以上もたっちゃったなあ・・・

まあ許してはくれるとは思っけど

\*\*\*\*\*

「遅い！昼ごはん冷めちゃうよー！」

俺の考えは甘かったか・・・

まさか昼ごはんをプッシュしてくるとは思い付かなかった

因みに現在時刻一時直前、学校でなら四時間目終わったらこの時間ぐらいに弁当食べるんだが今日は家だから12時に食べるのが当たり前前だ

「い、ごめん！つい時間忘れちゃってさ・・・」

「もう・・・仕方ないね」

軽い説教を受け昼ごはんを済ませたマナトと来奈

どうみても夫h(ry

「あ、そういえば、マナト君宛に手紙来てたよ」

「俺にか？」

手紙だと？

俺の知り合いにそんな古くさい伝達方法する奴いたっけ……？

いや、来奈が俺宛の専門学校とかのパンフレットを手紙と勘違いしているだけかもしれない

悪いが俺は進学する気はさらさらない

そういうお便りものは中身は確認せずにゴミ箱にシュートするのがオチなんだけど、でももしかしたらの事もあるかもだし一応目には通しておこう

「因みに誰からだ？」

「それが差出人の名前がないの」

「何？」

マナトはほんの一瞬硬直した感じに陥った

差出人不明だと……新たな架空請求の手口か？

でも内容が気になるし見るだけならなんともないだろ

金渡せぬこと書かれてたなら無視すればいいだけの話だし

そう解釈して来奈から渡された封筒を開けるとその中には一枚の質素な文章が書かれた便箋があった

『ダイヤモンドへ、今日の午後4時指定した場所へと来てください』

「「!?!?」」

あの・・・今日は何度も驚かないといけない日なのでしょうっか？

書かれていたのは明らかにマナト宛のものだったのだが、まさかの

ダイヤモンドの名指しできたのだ

「おい、どうなってんだよ!？」

「ダイヤモンドを知る人なんて・・・そんなにいないはずなのに・・・」

「あ・・・」

そっだ・・・心当たりがあるではないか

さっき悠二に見せられた『闇夜通り』だ

もしかするとあのサイトの中にダイヤモンドがマナトという事実を裏付ける情報があったのかもしれない

「どうしたの?もしかして何か心当たりがあるんじゃない?」

「え?い、いや!心当たりなんか無いぞ」



ちょっと動揺してしまったがバレてないな

もしバレたら夜中に出かけて怪物を倒し回っていたこともバレてしまっただけである

もう悠二とやらない約束を結んだがにバレるのは流石に避けたい

「でも気になるよ、ダイヤモンドって名前も知ってるならもしかして・・・ダイヤモンドライバー開発に携わった研究員とかかも・・・」

それもそうだが、マナトがダイヤモンドと知っているというのも気になるが差出人がダイヤモンドという名前を知っているというのも気になる

「うーん・・・どうしよう」

「気になるならいけばいいじゃないか？」

それがいいかもだけどなんか危ない匂いがすんだよなあ・・・ってあれ？今喋ったの・・・

「……って、悠二君!？」

「よっ! ちょっとつけさせてもらっただぜ」

「ちょいまで! ついてくるなら普通に訪ねてこい!」

「いやあそれだと面白味が欠けるだろ?」

「そんなに別に面白さ追求しなくてもいいから!

「ってそんな行動にどんな面白味があるんだよ!？」

「まあまあ、それよりもその手紙、気になるんだろ?」

「まあ、それはそうだけど……」

うん、でも危なっかしいからなあ・・・

「行くべきです！」

もう驚かないぞ・・・

今度はいつの間にか友達の家から帰ってきた愛華が催促してきたでもなんで愛華がそんな必死に行くのを薦めてくるんだ？

「来奈姉さんのいう通りダイヤモンドライバーの연구원なら私達よりもこの事件の事情が詳しいはずですよ、ですからもしかしたら怪物の事も何か知ってるかもですよ」

あ、それ言ってるかも

確かにその연구원だったら敵対する怪物の研究だっしてしているはずだ

さすが我が妹、冴えてるなあ

一応これでも小学2年生の8才児なんです

「これは、行く価値がますます上がったんじゃないか？」

「敵を知ることによって効率よく戦えるようになるとも言つし、そいつから聞き出せるかもしれない・・・怪しいけど怪物の事知れるなら・・・よし、行ってみよう！」

\*\*\*\*\*

ここはどこある港、

周りにはそれっぽいコンテナとか置いてあった

ドラマとかでよく見る麻薬の取引の場所みたいな感じだけど本当にここなのか？

手紙に付属していた地図を入念に見たがどこからどう見てもここに来るように矢印が描かれてあったな

描く場所間違えたとかだったら洒落にならねえぞ

「ってなんで来奈達もついできたんだ・・・」

あの手紙には『ダイヤモンドへ』へと書かれていたはずだ  
つまり来るように指定されたのはマナトのみ

なのに何故か来奈たちまでいる

「あの時の約束忘れちゃったの？私もマナト君にダイヤモンドライブ  
」を託した責任があるんだからね」

「俺もついさっきその事を確認したんだけどなあ・・・」

「だからってなあ……ってなんで愛華まで……」

「私だけ仲間はずれなんてズルいです！」

「いやでもな……」

自分の妹だからよく分かることだが愛華は結構頑固だ

今まで口で愛華をひれ伏せさせたことができた記憶はこれと  
いってない

自分のできが悪いのかはたまた愛華が利口すぎるのかどちらか  
だろ？

たぶん日頃から考えると前者だとは思っ

……がある意味後者も当てはまると思っ

さっきの推測論だっ普通のお8才児が考えつくようなものじゃ  
ないし

「分かった！分かったから！けどいいか？危なくなったらすぐ逃  
げるよ！もし戦闘みたいなお展開になったら俺が時間稼ぐからな、それ  
だけは守ってくれ」

そしてそれから待つこと5分

現在時刻は3時55分、もうすぐ約束の時間となる

すると今いる向こうから人影が一人こちらに歩み寄ってくるではないか

もしかしてあの人が呼んだのか？

遠くからでも分かるがその人物はスーツで全身が真っ白だ

風格がありとても落ち着いた感じであるがサングラスをかけていて顔全体は分からないのにそんな印象に持たされる

「坂白マナト様でございましょうか？」

「あ、はい」

うわ！？すごい丁寧な話し方だな！？  
こっちもつい敬語になっちゃったよ！

この白スーツ男・・・相当な手練と見た  
というわけで早速本題へ

「もしかして手紙を出したのは・・・あなたですか？」

「はい、正確には我が『アグメントメディア』代表取締役からの通  
達となっています、そして私はその使者として参りました」

「「「な、なんだとおおお（なんですすつてえええ）！？」「」



今日一番の驚くべき事だった

来奈を除きマナト達はあんぐりと閉じない口を保ったまま静止してしまう

スーツ男はその中のマナトに名刺を渡した

確かに『株式会社アグメントメディア』と書いてある  
偽物ではなさそうだ

「み、みんな！？どうしたの！？」

一方の来奈はマナト達が驚いた事に驚いていた（驚きの連鎖）

どうやらスーツ男が発した『アグメントメディア』という言葉に何かあるのだろうが・・・

「もしかして来奈アグメントメディアを知らないのか！？」

「え、うん」

「まじかよ！？アグメントメディア知らない奴なんてこの世にいたのかよ！」

なんか悠二君に酷いこと言われてるような気もするけど・・・とりあえずそのアグメントメディアってなんなのか聞いてみようかな

「アグメントメディアは様々なジャンルの企業に携わっていて子会社も数多く持つ世界的に超有名な大手会社です！世界のほとんどはアグメントメディアが形成したといっても過言じゃないです！」

愛華が来奈を見上げて必死に熱弁してきた

来奈はもしかしたら最近までは皆とは違う環境で生きてきたんだから知らないだと納得した  
テレビなんて全く見なかったし

「つまり、そのアグメントメディアの代表取締役・・・社長さんからマナト君個人宛に手紙が来たから驚いているって事なの？」

「そうだよ！そんな世界を揺るがす大手会社の社長から会ったこともない俺に直々に手紙出すなんてあり得ないだろ？だから驚いてるんだよ」

わかりやすくいうと有名な芸能人から個人宛に手紙をもらった時と同じ感覚だろうか

「そろそろよろしいでしょうか？」

「あ、ごめんなさい」

やべっ！話盛り上がっててアグムントメディアのスーツ男の事忘れてた！

話を聞かなければ

でもその前に

「なんでディアンドって事を知ってるんですか？それもそれがマトだって」

まず一番に浮かび上がった疑問を問いかけてみた  
話はそれからだ

「ダイヤモンドライバーは我がアグメントメディアの秘密開発部が開発したからです」

・・・あれ？なんか今の違和感があるぞ・・・？

そうだ！矛盾してんだよ！来奈の話では確かダイヤモンドライバーは来奈の両親の勤めていた研究所で作られたって聞いたぞ！

話ちがうじゃねえか？

「来奈、研究所ってどこの所属のか分かるか？」

「ううん、研究所には連れて行ってもらった記憶はあるけどそれは幼い時だしお父さんもお母さんも詳しくは話してくれなかったから分からないよ」

「え？じゃあといついつとは？」

ここで一つの仮説を作ることができる  
もしその研究所がアグメントメディアの配下ならば・・・

とスーツ男が何かピンときたかのように聞いてきた

「まさか・・・あなたは賢月氏の娘では・・・」

「え？」

「数年前のアグメントメディア秘密開発部に賢月という夫婦の研究員が所属していたんです、その研究員は時折まだ小さいお子様を研究室へ連れ込んでいたと聞いた事があります」

「わ、私の名前は賢月来奈です！じゃあその賢月の夫婦って・・・」

スーツ男の証言、来奈の話それぞれつじつまが合うように組み合わせるとやはり先ほど仮説を立てた通り・・・

「来奈姉さんの両親がアグメントメディアの研究者・・・だったってことですか・・・？」

「そうだったんだ・・・お父さん達がそこで・・・」

「内部では大変優秀な科学者だと称されてました、だからディアンドライバーの開発責任者に抜擢されたのでしょう」

けど来奈の両親は怪物の襲撃で殺された  
その黒歴史さえなければきっと来奈は・・・

「話、続けてください」

来奈は次の話題へ行くようにそそのかした

あまりこの話に漬け込んで欲しくなさそうだ

状況も状況でその場にいた全員もそう悟り自重する

「マナト様がダイヤモンドだという事実に関してはこちらで総力を挙げて調査させてもらいました、なにしろ手掛かりが全くと言っていいほどなかったので一週間以上かかりましたが・・・」

手掛かりがない状態で突き止めたのか！？

あの『闇夜通り』って裏サイトにすら書かれてなかったのに

一体アグムントメディアの情報網はどんだけすごいんだよ！

「そして呼び出したのはあの怪物に関しての情報を教えるためです、より効率よく戦ってもらえばと思います」

キターーーー！

やはり来て正解だったな

「といつてもまだ不可解な点が多すぎるのでまだよく解明されていません、とりあえず我々はあの怪物を『イルズ』と称することにしました、イルズは人間の身体能力を遥かに超えた戦闘種族でその存在は幾重にも渡り、鳥、虫、魚など様々な生物を連想させた者が存在します」

確かに今まで戦ってきたのは猫っぽいのだったりサメっぽいのだった  
必ず俺らが知る生物が出てくる

なにか関係あるのか？

「そのところはまだ解明中です、申し訳ありません」

期待した回答は得られず・・・か

けども一つひとつ気になることがある

「そのイルズって奴を教えるためだけに呼び寄せたのか？わざわざこんな物騒なところに呼んだのはなにかあるからじゃないか？」



こんなもう人のいない見渡すばかりのコンテナ、コンテナ、コンテナ、コンテナ、コンテナ・・・この港に一体何があるっていうんだ

「その事については後ほど説明させてもらいます、その前に・・・マナト様、ディアンドの力は強大なのですが一人で戦っていてはなにかと不便が多いのではないのでしょうか？」

「・・・確かに」

一人で戦ってきたマナトだがいくら強くても人数がいなければイルズが複数出てきた際に手が回らない事がある、確かに一緒に戦ってくれる人は欲しい、欲しいのだが相手はとも人間が敵う相手ではないのだ

対抗できるディアンドライバーだって一つしかないわけだし

「実はアグムントメディアにはそういった戦いを専門とする極秘に特殊訓練を受けたSPがいます・・・今日はそのSPの一人を連れてきました」

SP?

一体誰だ？

つてか今一瞬スーツ男の人すっごい切なそうな顔したけど気のせい  
か？

「出てきなさい」

スーツ男の人が後ろを振り向きその人物を呼んだ

敬語ではないところを推測するとスーツ男より地位が低いというこ  
とが・・・

「じゃじゃ〜ん！利央参上！〜！」

あれ？スーツ男さん、SPさんどこから出てくるんですか？

「おーい！ボクを無視するなあ！！こっちを見る！！」

コンテナの影から無駄に勢いよく無駄に活発に無駄に華麗に無駄にエレガントに出てきたのは長髪の青髪で中学2・3年生っぽい女子だった

「いつちよまえに左右両方の腰に銃が収まったホルダーなんかぶら下げてるけどまさか・・・」

「彼女はアグメントメディア所属のSP・・・」

急にテンションガタ落ちで紹介始めたスーツ男だった

なにか知らないが彼女こそイルズに生身で対抗できるという

「僕に紹介させてよ！僕は『利央』！短いから『伊上利央』様って呼んだくれていいぞ！！」

「なんでわざわざ長く呼ぶようにしかも様付けしなくちゃならないんだ!?!?!じゃなくてこんな小さいのがSP!?!しかもイルズと張り合えるほどの!?!」

「小さいゆうな!!僕はお前より年上の20歳だぞ!ほら胸だってこんなに豊かなのに!」

そういつて本当にその形整った胸をゆったりと小さく揺さぶり小さい発言した悠二へと迫る

「確かに大きい……って違う違う!俺が言いたいのはそうじゃない!ってかマジで20歳!?!」

「申し訳ありません……このような性格で」

だからスーツ男の人はため息ついてたのか

確かに絡むの大変そうな性格だな

「でもなんだか活発でいいじゃない?」

「私も悪いとは思わないですよ?」

来奈と愛華は利央を弁護した

確かにネガティブなのよりは苦勞しなさそうだけど

「外見はこれですが実力は本物です、彼女は訓練生の中でも群を抜いて優秀な成績を修めていますから」

スーツ男の人がそこまでいうのなら本物なんだろうけど・・・戦ってる姿が全然想像つかない

「ではあとの事は社長から彼女に一任させてあるので私はこれで失礼させていただきます」

「え？ちよ！？」

マナトの静止も聞かずスーツ男は逃げるように一目散に去っていった  
もしかしたらあの人外側だけしっかりしてて内側は怠け者なのか？

それとも利央がそんなに嫌なのか？

てか利央が来るならあの人来る必要あったのか？

まあどちらにせよ彼女からあとの事を聞いてみるしかないか

「利央さん・・・だっけ、ここに呼んだのはなんでですか？」

来奈は恐る恐る敬語を交えて聞いてみた

さっきの話が本当なら一応この中で最年長ということになるので

「その前にお前らの名前聞かせてもらっからな！あと敬語は気持ち悪いからタメ口で頼んだぞ！」

それもそうか

名前教えてなかったな

(自己紹介会終了)

「分かった！井上に森に村井に沢城だな！」

は？この人、耳はついてるよな？

「いやだから俺の名前はマナ」お前は井上だろ！どうだ！そうだと  
「！」

この人、いやコイツは人の名前さえ覚えられないのか

はたまた覚える気がないのか

何度言っても聞かなさそうだしもうそのままでもいいや・・・  
言動から見て俺は井上、来奈は森、悠二は村井、愛華は沢城となっ  
ている

「それでなんでここに？」

「それなんだけどなんかあるものを渡してくれなんて言っちゃって

さ、このコンテナのどこかにそれがあるんだって!」

「それってなんだ?」

「それは見てのお楽しみだ」

もったいぶりやがって・・・

でもその仕草が可愛く見えたのは内緒にしよう

そついうと利央は懐から鍵と数字が書かれた紙を取り出した

「コンテナには鍵がかかっているからこれで開けちゃうぞ!」

一応盗まれないようにはしてるんだな

数字が書かれてる紙はどうやらコンテナに書かれる数字と関係ある  
みたいだ、その証拠に利央は紙に書かれてる数字とコンテナに書か  
れた数字を一つ一つ見比べ該当するコンテナを探している

きつとそのコンテナの中にマナトに渡すものがあるんだろう



「！」

突然利央が足を止めた、見つけたのかな？  
だが彼女の次にとつた行動はマナト達が思ったものと違ったのだ

「ごめん、渡すのもう少し待ってくれる？」

「え？」

なにを言い出すかと思えば利央は瞬間的にホルダーの銃を取り出し  
悠二に向けたのだ

「物騒なもんこつち向けるな!？」

「お前じゃない!どいて!」

悠二は強制的に払い除けられた

銃を彼に向けたわけではない

その後ろだ

「出てきたらどう？いるのバレバレだよ？」

「お前なに言ってる……」

マナトが不思議そうに尋ねようとしたその瞬間

「へえ、すごいね……僕の気配を感じとるなんて」

「」「！」「？」

利央を除く全員が戸惑い出す

そしてこの場にいるはずのない声に耳と目を傾けた

そこにはいかにも中学生という感じの少年が両手に大きな装飾銃を携え立っていた

「お前、誰？ここは井上達が入ったあと『甘アメディア』の権限で立ち入り禁止になっていて警備されてたはずだけど？」

「それをいうなら『アグムントメディア』だ」

コイツは人の名前だけでなく固有の名称さえ覚えられないのかとすかさず悠二が突っ込みにかかる

「ってかここ立ち入り禁止になってたのか  
通りで人がいないはずだ」

「警備？・・・ああ、あの棒人形みたいなね、あまりにも『的』の役割に適してたから僕の練習に付き合ってもらったよ・・・みんな頭に穴を開けておいた、簡単だったね」

こいつなに言ってるんだ・・・

「ということは20人近くいた警備兵は全滅って事ね」

利央もなにかブツブツと呟いている

来奈も相手の言動に考え、そして

「まさか・・・人を殺したの!？」

「そんなに驚くことなの? たかが『的』ごときにやられる僕じゃないよ」

「『的』・・・だと!?! 人の命をなんだと思ってる!」

「『的』的だよ、でも君達は違う、僕を心の底から楽しませてよ・・・」

「

【KAMEN RIDE】

すると少年は両手に持った銃同士をスキャンさせた

・・・あの濁った電子音はまさか!?

少年は右手の銃口ををゆっくりと天へと向ける

「いくよ、変身」

【VALONZ】

銃の引き金を引いた少年の体は周りに発せられた虚像と一体化していき姿を変え銃口から放たれた何枚もの半透明のプレートが頭に突き刺さっていった

まるでマナトがダイヤモンドに変身したかのように

「な、なんですか！あれ！？兄さんみたいに変身したです！？」

当然マナト達は驚きを隠せない、しかも利央まで同じリアクションをとっている

「『ダイヤモンドライバー』は一つしか存在しないはずなのにどうして！？」

たぶんダイヤモンドライバーって言うおとしたみたいけど今はどうでもいい

「それとは違うものだよ、この銃は『ヴァロンドライバー』、そして僕は『皇 杏斗』、またの名を……『ヴァロンド』!」

目の前の紫で歪んだオーラを出している禍々しい姿をした仮面はそう言った

姿は確かにダイヤモンドに似ているのだが感じるオーラは正反対だった

「井上! さっそくだけでも変身しろ! 援護は僕に任せて!」

「分かった! 来奈達もそこらへんに隠れてろ! 変身!」

【KAMEN  
RIDE】

【DIAND】

いつの間にか巻いた ブツカーからマークを取り出しカードをデイ  
アンドライバーへと投げ入れ変身完了！

さて、これで準備はできた、だけど敵は今までと全く違うタイプ

その状況で無駄に元気なSP、伊上利央との初の共同戦線な訳だが  
彼女に一体どれだけ期待できるのだろうか

「さあて、楽しもうか」

マナトが変身したのを見ていたのにも関わらず動揺はせず

なるほど、ということは以前から見えていたって訳だ

「お前の道楽に付き合うつもりはない！」

「奴はきつと殺人行為を娯楽にしている質の悪い快樂殺人者だよ！  
気を付ける！」

利央がマナトにそう警告した



そんなこと言われなくてもヴァロンドを見れば嫌でも分かるが確かにヤバイな

「それぞれそれぞれ!」

先に手を出したのはヴァロンドだった

彼は銃をダイヤモンドを標的に乱射しながら迫ってくる

対してダイヤモンドはダイヤモンドライバーでその銃弾を全て叩き切り迫ってくるヴァロンドを待ち構える

「!」つちもあるよ!」

そして利央はダイヤモンドの側面から銃撃を始めた

「はやっ!」

だが彼女が発砲する射撃速度が半端なものではない

マシンガンまでとはいかないが普通のハンドガンで一秒間に10発を超える連射速度で放っている

二丁の銃を巧みに使い手首を踊らせるような感じで撃つことでそれを実現させているのだ

マガジンのリロードも器用に手を滑らせ瞬間的に完了させている  
その連射の中に一切の隙などなかった

だがそれ以上にヴァロンドが凄かった

「あはははははは！二人がかりかい！？いいよ！最高だね！！」

右手のドライバーでダイヤモンドを牽制し、左手のドライバーで利央の銃弾を銃弾で撃ち落としていたのだ

迫り来るのを阻止したもののこちらが劣勢なのは変わらない

「くっ！なんなんだよこいつは！？」

「僕の連射をこつちも容易く!?!」

ダイヤモンドも利央も打つ手がないか・・・と思いきや

「調子に乗るなよ!」

【ATTACK FORM RIDE】  
【ORZ TAKAKIRITAR】

ダイヤモンドが一瞬の隙をついてカードを装填した

するとダイヤモンドの周りを三つの丸いメダルのような虚像が浮遊しそれが消えたかと思うと頭、胴体、脚部分がそれぞれタカ、カマキリ、チーターを模した装飾品が装着されていく

「利央！これ持つてる！」

『ディアンド タカキリター』となりまず、利央にディアンドライバーを投げ預け、その脚力で疾風のごとく雨のような銃弾を潜り抜けていきヴァロンドへと接近していく

「！？」

さすがにこれはヴァロンドも予想外だった

「はっ！せいや！」

「ぐっ！ぐわあ！？」

接近したら次は腕に沿って伸びた刃、カマキリソードで彼を斬りつける

しかしこれでヴァロンドが引き下がるわけがない

「いいね！面白いよ！君がそつくるなら僕も自己流にやらせてもらおうじゃないか！」

【KAMEN RIDE】

【KAIXA】

【DRAKE】

ヴァロンドが変身した時と同じようにスキャンさせこちらに銃口を向けてトリガーを引くとなんとその先から二体の人影が現れたではないか

否、人ではない、この二体もまたダイヤモンドとヴァロンドのように全身が硬そうな鎧とスーツで覆われていたのだ

「邪魔なんだよ、俺が思い通りにならないものはすべて！」

「風は気まぐれ、ただ好きなように吹き抜けるだけです」

それだけいうと二体はカイザは利央、ドレイクはダイヤモンドへと走り出した

「くっ！どうなってんだよこれ！？」

必死に応戦する二人

「驚いた？彼らは別次元の所から来たのさ・・・呼び寄せたって言った方がいいかな？」

「こいつらイルズより強い！？」

ダイヤモンドから預かったダイヤモンドライバーでカイザと応戦していた利央だがやはり生身でまともに戦うと人間が負けてしまう

どんどんカイザに押されていく一方で全然攻撃できる隙が伺えない

「まずい！利央！これをそいつに入れる！」

ダイヤモンドの方は幸いにも善戦だったため利央に気をかける余裕があった

そして蹴りでドレイクを払いその隙に ブッカーからカードを取り出し利央へと投げた

攻撃を防ぎながらもなんとかカードのキャッチに成功し剣閃が止まるつばぜり合いになった瞬間を狙いカードを入れる

【ATTACK FORM RIDE】

【ORZ SYAUTA】

すると今度は青い丸い虚像が浮遊してダイヤモンドの体の色もほぼ青っぽく変わっていき頭はシャチ、胴体はウナギ、脚はタコを模した姿となった

変化を遂げた『ディアンド シャウタコンボ』は一刻も早く腕に装備されているウナギウィップをカイザへと巻き付けた

「ぬおりゃー!!」

そしてそのまま巻き付けたカイザを自分が戦っていたドレイクへ思いつきりぶつけたのだ

「井上!!」

「おう!サンキュー!!」

預けていたディアンドライバーを返してもらい早速次のカードをディアンドライバーに装填した

【FINAL ATTACK RIDE】  
【O-O-O-ORNZ】



その後さらに二体まとめて縛り動けなくしてダイヤモンドは天空へと飛び上がっていく

頂点まで達するとタコののように足を絡ませドリルみたくに突進していく

「よいしょ！ああああ！！セイヤー！ー！ー！！」

動けない二人は当然避けることもできず「オクトバニッシュ」が決められ決り飛ばされた

その衝撃に耐えられなかったようで消滅してしまう

「消えたか・・・なんだったんだあれは？」

「あ！！」

倒して安息に浸るディАндは利央の閃きにビクツとなる

「ど、どうしたんだよ!？」

「『スルメアンコ』がいない!逃げられた!」

あ、本当だ!

あの『皇 杏斗』とかいうやつどっか行きやがった!

早々に退いたところを見るとディАнд達の力量を計っていたようだ

快樂殺人者にしては慎重きまわりない

あいつから仕掛けてきたくせに・・・

\*\*\*\*\*

「そういえば遅くなったけど渡したいものって何なんだろう?」

とりあえずマナト達は杏斗を深追いすることは危険と判断し隠れていた来奈達と合流して目的のコンテナを見つけ出し鍵を開ける直前までに至っていた

目の前のコンテナの扉には頑丈そうな南京錠が付けられておりなにか価値の高そうな物が入っていそうな気がしてならない

内心ちょっとわくわく

「開けるぞ!」

利央が南京錠の鍵穴に挿しぐると一捻り、ガチャリと快感いい音をたて皆はその余韻に浸ることなくコンテナの重々しい扉を開いていった

そしてその中に入ったものとは

「バイク・・・？これが渡したいもの・・・？」

なんと中にあつたのは重量感あるバイクだった

しかもこのバイク、ベースカラーが黒でところどころにバランスよく色のラインが駆け巡ったデザインとなっておりまるでディアンドの変身体を連想させるようなものだったのだ

「うん？座席になにか置いてあるです？」

愛華が真っ先に気づいたのを皆もそれに視線をあわす

座席には『マシンディアンダーマニュアル』と書かれた少し厚みのある本が置いてあつた

「これが井上の戦闘兵器になる『魔神ディアライト』だ！見た目は

デザインが凝ったバイクだけどギミックはもの凄いな！」

「名前が違っただろ、説明書には『マシンディアンダー』って書いてあるぞ」

せめて何か一つまともに覚えられるものはないのかコイツは！

「それと今日はごめん・・・」

「？」

あれ？俺利央に謝られるようなことしたっけ？

「お前と組んで初めての戦闘だったのに僕が足引っ張ってしまって・・・」

ああ、それか

確かにあの黄色い奴にやられかけはしていたけど

「お前がいなきゃまともに来奈達の安全確保も出来なかったと思うし、三対一なんて圧倒的に不利で戦いになんてならなかったし、こっちこそありがとだよ」

「そ、そう？一応役にはたっただな・・・」

大まかに見れば確かに足引っ張ってはいたがあんなすごい銃さばきを見て文句なんか言えるはずがなかった

その点で言えば明らかに俺なんかの方が技術的に劣っているし弱い  
ダイヤモンドの力を借りなければ何もできないただの人間だ

「次、期待してるぜ！」

「次、期待された！」

こうして今ここにコンビが結成されたのであった

\*\*\*\*\*

「そついえば俺、バイク貰われても免許ないから乗れないぞ？」

よくよく考えてみればそうだ

今まで学校に行くのに乗り物使うような距離じゃなかったし一人で遠出する趣味もないからバイクは必要なかったんだ

「その点なら大丈夫だ！中身を調べられてもバレない偽装免許証を発行したからこれ使え」

そついつて利央はその偽装された免許証を……ってちよいまで！！

「おい！それ犯罪だろ！？大体なんだよ、調べられてもバレない免許証って！？しかも俺教習とか受けてないんだぞ！？」

「それ言ったら井上が使ってるディレイライバーだって僕が使ってる銃だって銃銃牛肉違反に反するぞ」

「ディアンドライバーと銃刀法違反な、それは確かにそうだけど・・・」

こればかりは利央が正論だった

法とかどうこう言う前にもうマナトは既にディアンドライバーという人を殺しかねない凶器を振り回している

だが法に縛られ振り回さなかったらイルズと戦えなくなってしまっ  
そして皆を守れなくなってしまっ

「綺麗事や理屈並べたって結局やってることは野蛮には違いないんだ、時にはこうやって犯罪に手を染めないといけないときだってある、例えば他人から非難されようが突っ走らなきゃならないんだ、この戦いに一筋の光もない、あるのは醜い現実と生き残りたいっていう願望だけ」



染々と利央のその言葉が心に突き刺さった

確かにマナトはこれまでに何体もイルズと戦っては倒してきた

だがそれでは繰り返すばかりでこの戦いの終わりが見えてこず解決するなんて保証はどこにもないんだ

いや見ようさえしていなかったんだ

ただガムシヤラに戦っていればいつかは終わるだろう、なんて安易な考え方を無意識にしていただけだ

本当にこの戦いを舐めてるとしか思えない自分が情けなく思った

それでいざ解決しようだなんて法で縛られたやり方で解決しようなどざそれこそ手で星を掴むようなものであり虫の良すぎる話だ

この戦いに善とか悪とか関係ない

ただ生き残りたい事に必死なんだ

「そうか・・・なら俺は覚悟を決める、それで守ってみせる、だからついてきてくれないか？皆を失わないように」

マナトは利央に手を差し伸べた

来奈達もディアンダーを眺めるのをやめてこのやり取りを静観していた

「僕はこの戦いを始めた頃からもうとっくに覚悟は決めてる、あとは気持ちの問題だ、井上達が覚悟を決めたならこの免許証を取れ・  
・もう後戻りは出来なくなるだろうけど」

「・・・」

「・・・」

それでも・・・後戻り出来なくても、ディアンドが俺だというなら・  
・やるだけだ！

マナトは意を決して免許証を奪うように取った

これが正しい選択なのかは分からない、もしかしたら正しいことなんてないかもしれないけど……

けど……これが俺の選択なんだ！

「……いいんだな？」

「もう取ったんだ、聞くまでもないだろ」

その日はそれで一応解散となった  
皆がそれぞれ家へと帰り利央もアグメントメディアに戻ることを伝え去っていった

ディアンダーの事だが以前からマナトの両親は好きなように免許はとってほしいということになってるので別に隠す必要はなく家のガレージの余ったスペースに置いてもらうことになった

しかも通っている赤ヶ龍高等学校も通学方法が自由なため免許を持つていて交通ルールさえきちんと守っていればバイクなどの乗り物でも構わないということなのでこれからの通学はバイクとなった

実際そういう生徒も少なくはないから不思議がられことはないけどデザインが一際目立つ（大丈夫だ、問題ない）

それと説明書によるとディアンダーはセミオート機能がついているらしく時速400km範囲内で安全装置が働き絶対に事故は起こらないという初心者に親切な設計がなされていた

ていうか最高時速500kmとかこのバイク凄すぎだろ・・・

\*\*\*\*\*

翌日

午前7時30分

学校へいく平日のこの日、マナトはいつも決まってこの時間に体を起こす

パジャマのままリビングへと降り立ち「おはよう」といって朝食を摂るためそのまま食卓に着く

マナトが一番遅く起きているのは毎度の事なのでいつもこんな感じだ  
父さんも毎度毎度忙しらしく朝早くから出張で出かけておりいない

ということどこにいるのは来奈と愛華と母さんと俺の5人だ

え？それだと4人じゃないかって？

そんな馬鹿な、だってマナトの目にはちゃんと5人写っているではないか

ただ父さんの席に昨日一緒に戦った・・・え？

「井上！おはようさーい！」

り・・・お・・・？

「俺はまだ寝ぼけているのか」

「なに言ってるんだよ！」

マナトは激しく目を擦り見開いてみる

やはりそこは何度見ても

「ウエ！？利央！？なんでここに！？」

「いやあ、それがさ」

訳が分からず利央が説明したそうとすると

「買い物に行ってたらね、道端で利央ちゃんが泣きわめいていたのよ、聞いてみたら寝床が見つからないからって・・・だから、」

「ちょっとまで、お前はアグメントメディアに帰ったんじゃないの  
たのか」

「それが・・・帰ってる途中に本社から電話があつて井上のパート  
ナーとして息が合うように側近してお前の家に住まわせてもらえな  
んていう上からの命令があつたんだ」

母の口ずさみと利央が説明した

「もうこの事は森や沢城に言つて村井にもメールで伝えた、いやだ  
つたか？」

「そういう訳じゃないけど唐突だったから・・・」

「そうか、それならいいだ・・・森、沢城、母上、そして井上、こ  
れから迷惑かけるかもしれないが僕も精一杯手伝うからよろしく頼  
む！」

「あ、うん、よろしく」

流れるに了解しちゃったけどよかった……んだよね？

また一人増えたけど別に支障はないし……ま、いつか

日常からどんどんかけ離れていくがこれも後戻りは出来ないということか

うん、これは想定してたよ



覚悟もしたしな

## #7 バイクとコンビと狂戦士（後書き）

というわけで新キャラの「伊上利央」でした！

物語内では元気で陽気な彼女ですが最初の設定では性格がクールでツンデレキャラという真逆の設定にしていたのです

しかしこの設定は没になりこのようになりました

なぜ没になったかというと物語上そのようなキャラは発展させにくいんです

人によってはうまく活かす人もいますが私は無理でした  
申し訳ありません！

でも彼女は私の完全オリジナルではありません

来奈と同じようにモデルがいます

といっても来奈のように現実の人間ではなく二次元のキャラを参考にしました

お気づきの方もいらっしゃると思いますがこれは『ニードレス』という原作が漫画の「イヴ・ノイシュヴァンシュタイン」というキャラクターです

それに従って名前をちゃんと言わず略してしまう彼女ですがマナト達の呼び名にもちゃんとした由来がありこの小説の原作である「仮

面ライダー「ディケイド」のキャスト様の役者名を由来とさせていた  
いただきました

マナト…門矢士役・「井上」正大さん

来奈…光夏美役・「森」カナナさん

悠二…小野寺ユウスケ役・「村井」良太さん

愛華…キバーラ役・「沢城」みゆきさん

そして最後にサブタイトルの事なんですけど「バイクとコンピと狂戦  
士」ということでこの回にはオーズ系にアタックフォームライドし  
ました

この前の回も「友達」という二字熟語なのでクウガだったわけですが  
他の回もこんな風に使い回していきたいと思っっているんですが龍騎  
やカブトのようにタイトルリングが特徴的でないものは自己流にや  
らせてもらいます

タトバとか出なかったのは狙ってです  
他の回に出す予定もあるのでご安心を

最後に前書きに書いてあることなのですがあれは私の気分です

「小説に歌かきこまれてもw」と馬鹿にする人がいればどうぞ作者  
を馬鹿にしくさって結構！

実際にダイヤモンドがシャウタになった瞬間から脳内再生をしてくれればそれらしくなるとは思っているので

それではまた今度！

#8 生きたい(前書き)

『覚醒』

歌：坂白マナト

## # 8 生きたい

「あと二周だよ！」

「ま、まっしてくれ〜！」

利央が我が家に住み着き早くも数日がたった

今日はなんていい天気なんだろう！

つてことで俺はいきなり利央に強制的に連れられマラソンに付き合  
わされていた

彼女曰く「体力なきや戦いなんて務まらないぞ！」といったのでそ  
のためだと思うが

「きつすぎる・・・」

両足に一個3kgする重りをつけ一周2kmある住宅街を10周す  
るといふ過酷以外の何者でもなかった

しかもこれが準備運動だという

これを三時間で走り終えたのだが利央は全く疲れた表情を見せずマナトはグダグダのフラフラであった

「まったく！準備運動でへばってどうすんだよ」

「本当に準備運動か・・・これ・・・」

「僕が訓練していた時は毎日欠かさずしていたぞ！」

「マジかよ・・・」

アグムントメディアさんよ・・・

ちよいとやりすぎではないですか・・・？

こんなの続けてたら死んじゃまう

ただど生き残るためだ

このくらい耐えられないと生きてはいけない

それぐらい今マナトが置かれている状況は厳しいということだ

「むう……でも確かに初日にこれはやり過ぎかも、僕も最初はおもひなしだったし」

「20km近く走り込むのは違うのか……」

とりあえず二人は家へと帰りこの日の鍛練は利央のちよつとした判断ミスで準備運動だけになってしまった

マナトにとっては一日……いや、数日分の体力を使ったような感覚に陥ったことだろう

\*\*\*\*\*

「あ、おかえりなさい」



「兄さん、利央姉さん、おかえりです！」

家に帰ると来奈と愛華が快く出迎えてくれた

家で留守番しているのはこの四人だ

今日も父さんも母さんも仕事でいない

「に、兄さん？大丈夫ですか？」

「ああ・・・なんとか・・・」

正直に言えば大丈夫と大丈夫じゃない境目の上に立っている感じだ  
今にも倒れそうで怖い

え？それは大丈夫じゃないだって？

「冷たいアイス用意してるから食べてね、それとちゃんと手を洗うように！」

リビングに利央に支えられながらもフラフラして入って目に飛び込んだのは食卓に置かれている今欲しいNo.1の物・・・アイスだった

マナトはそれを確認した瞬間、食卓にしがみつくように椅子へと飛び込み座りした

早速頂きま・・・

「兄さん！今の来奈姉さんの話聞いてなかったですか！？ちゃんと手を洗うです」

・・・は！俺とした事が！

なぜ・・・なぜ数秒前に言われたことを忘れてるんだ！

疲労しているせいか！？

そうなんだろ！？

どうなんだ！？

「よっしゃ！アイスだ！」

「くら！利央もだよ！」

利央は涼しそうな顔でガッツポーズを決める

っていうかこのはしゃぎよう見ていると幼女が元気にはしゃいでいるような感じでとても20歳には見えない  
年齢詐称の疑いがある  
留意しておこうかな

「うっ、お前はなぜそんなにも元気なんだ・・・」

「鍛えてるから」

それって納得していいのか・・・？

とりあえず俺は無い気力を振り絞り利央は涼しい顔で手を洗いアイ  
スへとしゃぶりついた

「あゝ！美味しい！生き返る〜！」

今の時季は夏ではないが疲れた今は冷たいものは美味しい

甘いものは疲れに良いって言うし

「あ、そうだ」

食べていると利央が何か思い付いたようで懐から携帯電話のような物を取り出し操作する

「それ、携帯電話ですか？何か形が変わってます」

「これは携帯電話じゃない、『アントムデイ』内で使われてるレポートを書き留める物だよ、まあ携帯電話以上の機能を取り込まれるけど」

「アグムントメディアでしょ」

来奈、もう利央の間違いは恒例なんだから  
いちいちつつこんでいたらキリ無いぞ

「前に戦ったあの狂った奴覚えてるか？」

「『皇 杏斗』だったっけ？」

「気になって調べてみたんだけどさ、あいつが持っていた銃、井上の似たようなシステムウェポンだったからすぐ調べがついたよ」

「え？ということはまさかディアンドライバーと同じアグムントメディアが作った武器だったって事？」

「森の言う通りだよ、あの銃は本社でディレイライバーとは別で極秘に開発された・・・えーと」

そこで口を止めてしまい操作していたレポートに目をやった

「ヴァ・・・ヴァロン・・・ド？」

なんか利央が凄く目を凝らして見てるけどそんなに読みにくい名前なのか？

隣に座っていた愛華が覗きこんでみる

「もしかしてこの『ヴァロンド』って言おうとしたんじゃないですか？」

「あっ！それぞれ！さすが沢城！」

・・・コイツが名前覚えられない理由がわかったかもしれない

『ヴァロンド』ってそこまで読むの難しくないだろ

むしろかなり簡単に読める部類に入ると思う

でも気にしたら負けだ

気にしたら負けだ

大事なことだから2回言ったおく

「でも分からないことがある、どうして奴がシステムウェポンを持っているのが分からないんだ、もしあいつが試運転者だったとしても人を殺すような事は絶対してはいけないことなのに・・・へらへら笑ってた」

それを言いながら利央の顔が少しずつ強張っていった

忘れかけていたが彼女はアグムントメディアのSPだ

人を守るといふ立場だからこそ皇杏斗がした行為が許せないのだろう

いや、利央だけじゃない、誰だって許さない

人を殺す事はその人の全てを奪うことになるんだからな

そう、絶対にやってはいけないこと・・・

「絶対に捕まえてやるんだから・・・！」

アイスのあと一口を大きくかぶりつき食べ終わると利央は立ち上がり、

「じいちゃんさま！ちょっと調べに出かけてくる」

早々と家を出ていくが

「まで、利央」

マナトが利央を呼び止めた

「奴は・・・」

「分かってるよ、僕一人で出来ない事くらい、勝てない戦いに闇雲に突っ込むほど私も馬鹿じゃない、死にたくもないし」

「ならいい、俺達も手伝ってやるからな」

「うん、ありがとう」

そのやり取りを終えると利央は玄関から出ていった

\*\*\*\*\*



「このままでいいのか・・・一般人の井上達を巻き込むなんて・・・」

\*\*\*\*\*

利央が出掛けてから30分がたった  
来奈と愛華は今日なにもすることはないがマナトは午後から部活がある

もうすぐ時間なのでその支度を始めた

「いてて・・・今朝走ったのが響くな」

「そんな疲れで大丈夫？」

「大丈夫だ、問題ない、アイス食べて元気出てきたぜ！じゃ行つてきます！」

「「いってらっしゃい（いってらっしゃいです）」！」

そうして二人目も家を出ていった  
残ったのは、

「さて今日は何しようか？」

「ゲームするです！今回はマ オパーティするです！」

「うん、いいよ」

「今回のハンデは15ターン制のスター80です！頑張るです！」

「それじゃ準備しようね」

「はいです！」

早速二人はテレビの下に格納していたゲーム機を取り出し愛華は手慣れた手つきでコードを次々と挿していった

来奈もなにもしてないわけではなくコントローラーをゲーム機に挿すことにした

だが

「!?!」

突然右手に一瞬の激痛がはしり来奈は思わずコントローラーを落と  
してしまい反対の左手で痛みを押さえ込んでしまう

「はぐう!?!くう!」

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!

手が・・・千切れる!?

「ど、どうしたんですか！？しっかりして下さい！」

愛華もそれに気がつき来奈の安否に気をかける

しかしそれが合図だったのか痛みは嘘の様にたちまち消えていった

「大丈夫・・・ちょっと痺れただけ・・・何ともないよ」

「痺れただけって凄く痛そうでしたよ・・・？」

「今はもう引いたから、本当に大丈夫だよ！」

「ならいいですけど・・・」

とりあえずその場は気にせずゲームに手をつけ時間を潰した

一体今のは何だったんだろう

まあ多分大丈夫でしょう

因みに勝ったのは『試合中』にスターをカンストするほど獲得し圧倒的な差の愛華でした

\*\*\*\*\*

「本当にこのままでいいの？あいつらは普通の一般人なのに・・・」

『今はそんな事言ってもらえないのはお前だってわかってるだろう？それともお前だけでやっていけるのか？』

「それは・・・」

『それにディアンドにあの偽装免許証を渡したのも利央、お前じゃないのか？助けがほしいから承諾したんだろ？』

「うん・・・だけどこんな・・・」

『つたく・・・シャキツとしろ！そいつらの輪の中じゃお前が最年長なのに逆に足引っ張ってしまっぞ？けど大丈夫、お前ならやれる！なにせ俺が見込んだ女なんだからな！』

「うん、ありがと・・・」

『まあまだ不安定なところもあるだろうから無理せずによれよ、じやあな』

利央は坂白家の比較的近い公園のベンチに座りさつき使っていた携帯で誰かと連絡をとっていた

そして話は終わったのでそれを懐へとしまった

「はあ・・・」

みんなに調べに行ってくるって言って来たけど正直にいうとイルズが出てこない今利央一人では何もできない

あの時ちよつと感情的になって空気が気まずくなつたから口実を言つて飛び出しただけである

しまいには自分の上司に弱音を吐いてしまった

「なにやってるんだろ、僕・・・」

ベンチの背もたれに身をゆだねたそがれていると、

「利央、どうしたんだ？こんなところで？」

「ん？うわあ！？井上！？今日部活だったんじゃない！？」

井上、もといマナトが自分の目の前に立っていた

彼は本来なら部活に言っているはずなのに

「今日は早退させてもらったんだよ、今朝のマラソンで足痛めたのが顧問にバテてさ、休めだって、お前は？何か調べものしてたんじ

「や？」

「……何も掴めなかった」

調べることさえしなかったがここはごまかす  
たぶん気まずくなるし

「そうか」

とマナトは利央の隣に座った

「なんか遠くから見ても落ち込んでるのが分かったんだけど何も  
掴めなかったのがそんなにも落ち込むことなのか？」

「いや、そうじゃないけど」

「だったら何があったんだ？話ぐらいいは聞かせてくれよ」



あ、しまった、せつかくごまかしたのに自分で流れを変えてしまった！

けど利央には一般人のマナトに聞いておきたいことがあった  
これを機に聞いてみるのも悪くない

「井上は・・・なんで戦うんだ？」

この答えが聞きたかった

「一緒に初めて戦ったとき言わなかったっけ？ただ生き残りたいって？」

「そうじゃない、それだけでお前が戦ってるようには見えないんだ」

「なに言ってるんだよ、俺は・・・」

「じゃあなんで夜中に抜け出してまでイルズと戦ってたんだ？」

それを聞いた瞬間、マナトの体はビクツとなった

だってそれは裏サイトぐらいでしか知ることができないはずなのに

「なんでそれを・・・？」

「僕を舐めてるの？このくらい調べあげるのは造作もないぞ」

「・・・そうか、アグメントメディアの情報網は侮れないな」

「で、なんでなの？わざわざ敵に向かっていくなんて、お前は生き残る他にも理由があるんじゃないか？」

それを聞かれると同時にあの光景達が脳裏に蘇ってくる

一つ目は来奈と戦い抜いて見せると約束を契ったこと  
そして二つ目は夢を叶えてただ幸せになろうと願っていただけなの  
に死んだ隼人の血まみれの姿、

「そうだな・・・生き残りたいっていうのは本当だ、けどもう一つある」

「それはなに・・・？」

利央が不思議がってそれを聞き出そうとした

その時

「うわわあああ!!!?!?」

「な、なんだ!?!」

「悲鳴!?!向こうから!?!」

男性と思われる悲鳴が聴こえたのだ

もしやと思い二人はその方向へと駆け出す

\*\*\*\*\*

「た、助けてええ!!」

そこには今にもイルズに襲われそうな男性が!

「グルガア!!」

「危ない!!」

今にもイルズが男性に手をかけようとしたところにギリギリで利央がハンドガンでよろけさせた

「早く逃げる!!」

「あ、あ、うわぁぁ！！」

その男性はマナト達に振り向きもせず必死に逃げていった  
よほど窮地に立たされたんだろう

「変身！」

【KAMEN  
RIDE  
DIAND】

いつものようにダイヤモンドに変身を遂げたただただイルズへと突っ走  
っていく

戦っているときでも思っ

さっきの利央の質問、俺は生き残りたい以外に何に戦いに臨んでるんだろうつて

さっき聞かれたとき実はまだ自分の中で整理がついてなかったんだ  
来奈との約束だつてある、隼人の夢のことだつてある

ただそれを一言に口にするのが容易じゃないんだ

まとめることができたならそれは整理がついたつて意味だ

言っちゃ悪いけどこのタイミングにイルズが現れたのは助かったか  
もしれない

もちろん倒すけどな！

「だあ！」

「ゲルア！？」

【ATTACK FORM RIDE】  
【BLADE JACK】

イルズを尻ぎ払いカードを差し込むと今回は胸の装甲と頭部が金色に変色してさらに背中には「オリハルコンウイング」という巨大な翼、左手には「ディアマンテ・エッジ」式の「醒剣ブレイラウザー」が装備された「ディアンド ジャックフォーム」へと変貌した

「はっ！」

そしてすぐさまイルズの頭上へと飛行する

今のディアンドは足に痛みが残っているため満足に動かせない

なので足に負担をかけないように空中戦に持ち込もうとしたのだ

「はっ！っおりゃー！」

「ゲルっ……！」

空中を飛び回り二本の剣でヒット&アウェイで翻弄する

さらに地上にいた利央も黙って見ているだけではなくそこからハン  
ドガンでイルズを蜂の巣にしていた

この状況でイルズが逃げられるのは到底無理だ

だから仕方なくと言う風にあがいて滑空しているダイヤモンドに向け  
て体内から極太の針を放出した

だがそれも虚しく

【ATTACK RIDE】  
【METAL】

体が光りメタル化したダイヤモンドには痛くも痒くもなかった

しかしいくら優勢でもこのまま長引かせるのは良くない

早々に勝負をつけるべきだ



【ATTACK RIDE】  
【MACH】

マツハの如くダイヤモンドはイルズへ超特急していく

【FINAL ATTACK RIDE】  
【B-B-B-BLADE】

「ウエエエイ!!」

ダイヤモンドドライバーとブレイラウザーに電撃を纏わせ、そしてそのまま、

.

「イキタイ」

「!？」

一瞬手が止まったような感覚に陥ったが実際は止めることが出来ずにそのまま斬りつけた

「ライトニングスラッシュ」を受けたイルズは耐えられるはずもなく石になりそして崩れ去っていく

「・・・」

いつもなら倒し危機が去った事を喜びたいのだが今日はなぜかそんな気分になれない

まさか今のとどめ際の声は・・・

とりあえずディアンドは変身を解いた

「やったな、井上」

「あ、ああ・・・」

「・・・どうした？なんかあまり嬉しくなさそうだけど・・・」

「え？あ、いや、そんな事はないぜ！こうして怪我なく倒せたんだからな！」

取り繕い喜びの表情を見せたがそれは心の底からではなかった

疑問が浮かんできて素直に喜べないんだ

あの声のせいで・・・

\*\*\*\*\*

「そつえば井上、さっきの質問答えてなかったよな？」

「あ、あああれか、内緒だ」

「内緒って・・・そんな曖昧な感じで戦われたら困るんだけど」

「大丈夫、迷いなく戦うからさ」

あんなのは幻聴だ

そうだ、そうに決まっている  
イルズがまさかな・・・

この時、俺は意志がぐらつき始めたのが自分自身でも分からなかった

## #8 生きたい(後書き)

今回は様々な伏線を張らせていただきました  
回収しきれるか心配です

だったら張るなよって話ですけど(笑)

でもこれくらい謎めておかないと面白くないかなあっと思ってこ  
うしました

まだ自分の中では超序盤です

完結する最後まで読んでいただけると非常に嬉しい限りです!

これからも「仮面ライダーディアンド」をよろしく願います!

## 登場人物紹介その1（前書き）

今更なからですがキャラクター紹介回を用意しました

飛ばしても結構ですがキャラクターに興味のある方はどうぞ

## 登場人物紹介その1

坂白マナト（17）

一人称：俺

本作の主人公

イルズが引き起こした殺人事件で来奈と出会い彼女からダイヤモンドライダーを託されダイヤモンドの変身者となった

高校2年生だが勉強が極端に苦手なためギリギリで進学している（特に数学が酷い）

喧嘩があまり得意ではなく少々ヘタレ気味なところもあるが友達付き合いはよく特に親友の悠二とは学校での行動を常に一緒にするくらい仲が良い

妹からは度々不足なところを指摘され説教を受けている

ボケとツッコミ両方のスキルを持ち合わせている

仮面ライダーダイヤモンド

マナトがダイヤモンドライダーと ブッカーを用いて変身した姿

基本カラーは黒で体のあちこちに色のラインが巡っている

全ての平成ライダーの酷似した姿に変えられ力が使えるというチート極まりない存在で喧嘩が弱いマナトが使っても銃火器を使っても倒せないイルズを瞬殺したほどである

ただし適合者でなければ変身は出来てもアタックライドやアタックフォームライドは使えない

この状態の姿は色のラインが白で統一された単純なものとなっている



ダイヤモンドライバー

ダイヤモンドの変身ツール

剣の形をしておりどんなことでも絶対に刃こぼれしない金属で出来ている

ダイヤモンドカードを差し込み口に装填してトリガーを引くことによって変身できるがその先は適合者でなければアタックライドもアタックフォームライドも使えないし使おうとすれば変身者の体に強烈な電流が流れる

殺人事件で来奈から適合者のマナトへと託された

ブツカー

変身時に左腰に付けられるノート型のカード収納ホルダー

中身は「クラインの壺」という無限空間に繋がっており何枚でもカードの収納が可能である

取り出すときは頭に思い浮かべたカードが自動的に一番上に来るのでいちいち探す必要はない

マシンダイヤモンド

ダイヤモンド専用のバイク型戦闘マシン

普通のバイクにはない戦闘機能が盛り込まれていてダイヤモンドが搭乗時、ダイヤモンドライバーに特定のアタックライドのカードを装填

することで発動が可能である

賢月来奈（16）一人称：私  
綺麗な盛

本作のヒロイン

両親から送られ元々のディアンドライバー所有者ではあったが自分自身は不適合者だった

合意をもらいマナトへと託す

両親はアグメントメディアの研究施設でディアンドライバーの開発の最高責任者に携わっていた優秀な研究員だったがイルズの研究施設襲撃により他界した

現在坂白家にお世話になっている

学校中の男子から告白・ナンパされるほど容姿が優れており頭脳もズバ抜けていて家事や料理も何でもやってのけるといふまさに絵に描いた完璧超人である

またマナトの母とも意気投合しておりその頃から若干お母さんらしくなってきた

神岡悠二（17）

一人称：俺

主人公マナトの一番の親友

学校での成績はそこそこのものでマナトとは違い生活は安定しているしかも結構なイケメンでモテたりするので親友からはちょっとした嫉妬を持たれていたりする

坂白愛華（8）

一人称：私

貧

主人公マナトの9歳年下にあたる妹

小学2年生だがそれに似合わない持論とゲームセンスを持ち合わせている

特にゲームでならジャンル問わず彼女に勝てるものはいない

自分を大事に想ってくれる兄が大好きでよく気にかける

悪く言えばブラコ（ry

伊上利央（20）

一人称：僕

大盛

ボクっ娘

容姿がどう見ても幼女にしか見えない（一部を除く）一応年齢は詐称ではなく本人もその事を強く主張している

アグメントメディア直属のSPでその鍛えられた戦闘力は非常に高く生身でイルズと渡り合えるほど強い

それでもディアンドトには遠く及ばず主に彼のサポートに回っている  
また年齢の割に子供っぽい時があり人の名前や特定の名称がどうしても覚えられないため自分で適当に付けて読んでいる

両腰のホルダーにハンドガンを携えているがこれはただのハンドガ

ンではなく威力の一発一発がロケットランチャー以上に高い特殊な銃である  
当然反動もとてつもないほど大きいが利央はそれをマシンガンに近い連射速度で撃てる

皇杏斗（14）

一人称：僕

正体不明の中坊殺人者

何から何まで謎な少年でありその一つに何故かディアンドライダーとは別に極秘開発されていたというヴァロンドライダーを持っている  
また相当質の悪い快樂殺人者で殺人行為を遊び感覚で行っている  
杏斗自身の戦闘力とヴァロンドの戦闘力によりディアンド達を圧倒した

339

仮面ライダーヴァロンド

クレイジーフォーム

杏斗がヴァロンドライダーを用いて変身した姿

基本カラーは紫でそのオーラは見るだけで敵を怯えらせるほど  
ディアンドと違う点は自身が姿を変えるのではなく別次元から歴代ライダーを召喚し戦う（最大同時召喚は3体）

ヴァロンドライダー

ヴァロンドに変身するのに必要なツール  
二丁の銃でお互いをスキャンアクションさせトリガーを引くことで  
変身できる  
召喚能力以外の能力や変身適合条件など存在するかどうかも不明だ  
が見た目は完全にダイヤモンドと対照的になっている

## イルズ

正体不明の怪物  
定期的に人を襲っているが目的は不明  
丈夫な皮膚で覆われており生半可な武器では傷をつけることすらか  
なわない  
サメや鳥など人間がよく知る生物を連想させる姿が多種多様に存在  
する

## 登場人物紹介その1（後書き）

サブタイトルに「その1」と書かれているのでお分かりだと思いますが新キャラクターが登場したり物語の核心をついた場合に何度か追記・書き直しという形でその2その3と投稿していきたいと思えます

来奈、愛華、利央に余分な項目があると気づいた方はそれはどんな項目なのかご想像にお任せします

#9 敵の代弁者(前書き)

『LORD OF THE SPEED』

歌：神岡悠二

## #9 敵の代弁者

気温は日につれ段々と暑くなっていき夏という季節が近づいてきた  
そしてここマナト達の赤ヶ龍高等学校では

「さあみなさん！文化祭のシーズンがやってきました！」

二年一組の委員長がこのHRを機に教卓に立って高らかに宣言した

「」「」「おおおおおおお！！！！」「」「」

それに応えるクラスも半端な気合いものではない

それもそのはず、この高校の文化祭の規模はとんでもなく広いのだ  
どのくらいかというところ一つの町を占拠し模擬店やら遊技場などを生徒達が出店する大々的に行われるものだ  
その規模の大きさに魅せられ男女問わずその熱気は異常なまでのものだった



実際に世界中の高校探してもこんな大掛かりな祭を行っている所なんて滅多に無いだろう

いや、たぶんここしかないと思う

「うわあ、すごいね！文化祭って始まってないのにもうこんなにも盛り上がるんだね！」

「あれ？来奈は文化祭初めてだったっけ？」

「まあね・・・色々あつて余裕なかったし」

そうだった、忘れてたわけではないが本人は学校に行っていたって言うだけ彼女の事情を考えてみればそんなに学校と関係を持っていなかったのかもしれない

文化祭を楽しみがる様子が来奈の事情と相まってそう考えさせてくる

悠二はそう頭の中で解釈するのであった

「皆さん！今年の二年一組の出し物は劇となっています、今から本番まで一ヶ月間の間練習を行います、では早速役を決めましょう」

ようやく本題に入り来奈達は事前に配られた台本に手にとる

台本の表紙には「愛・・・行く果てに」とタイトルがデカデカと書かれた

初めて目にした時は凄く宝塚みたいな題名だなあと思ったが劇の定番と言えばこんな風なのかもしれない

劇の内容は簡単にまとめると生き別れた二人の男女が互いを求め色々あつて最終的に仲良く暮らすというものだ

劇でよくある話だな

良い言い方で言うところも定番

しかし異常なのがウチのクラスの脚本が張り切りすぎて物凄くボリュームが詰まった内容になってしまったらしく例年だったら学校の体育館で披露されるのだが今年はそのボリュームに合わせようと約1000人も入れる武道館を貸し切るのだという

町を占拠しーの、大きな武道館を貸し切りーの、この学校の予算は一体どれだけ恵まれてるんだ・・・？

「（それにしてもマナト君大丈夫かな・・・？）」

文化祭も気になるけどいつもなら隣の席にいるはずの彼の事も心配

だった

\*\*\*\*\*

彼は真っ白な空間に佇んでいた

「(1111)・・・どっだ?」

本当に何も無い

水平線すら無い

何も描かれていない白い画用紙のように

だがしばらくすると

「（なんだ・・・あれは？）」

うつすらと一体の人影が見えてきたのだ

さっきまで何もなかっただけにその出現に釘付けなる

次第にその人影は濃くなって形が鮮明になっていく

ただ形だけで全身がほぼシルエットで誰なのかはさっぱりだ

でもそれが持っている物でわかった気がする

「ディアンドライバー？・・・あれは俺・・・なのか？」

それが持っていた剣と腰に巻かれたノートだけはクッキリと見えていたのだ





聞いてるととても不安に、とても苦しく、とても不快な気持ちにな  
ってくる！

【LOST KAMEN RIDE】  
【DIAND】

ようやく鳴り止んだかと思うとそこにいた人影は虚像に包まれ一  
体化していきただのシルエットから全く別の姿になっていた

でもまだよく見えない

影が少し晴れたくらいでまだはつきりとまではいかなかった

「あれはディアンド・・・?」

はつきり見えないのに分かることが一つだけある

あれを見ているととっても嫌な気分になってくる





「  
」

ところがすぐに目が覚めた

しかし今度は違和感がない、見慣れた光景がそこに広がっていたのだ  
仰向けになってベッドに寝て天井しか見てないが分かる

ここは自分の部屋だ

「お、目が覚めたか？」

「利央・・・？」

ゆっくりと横を見るとベットの横の椅子に座った利央がいた

「あれ？俺どうして・・・」

「39度の熱だ、今日は寝て休め」

熱？

確かに熱いし体がだるいし頭痛もする

ふと時計を見ると既に昼の12時を回っていた

そうか、俺・・・

「お腹空いてるだろ？お粥作ってたぞ」

利央はそう言つて机に置いてあつたお粥が入つた鍋とレンゲが添え  
である取り皿をトレイ越しに膝の上に置きレンゲで取り皿にお粥を  
盛つてそれをマナトへ差し出してくれた

マナトは上半身だけを起こし無言で受け取り間を開けることなくレ  
ンゲですくつて一口パクリ

「熱っ！」

だが内心焦っていたのかレンゲが全部覆つてしまふほど口に入れて  
しまい口の中が痛いほどの熱さを感じる

「一気に頬張りすぎだぞ、無くなつたりなんかしないからゆっくり  
食べる」

「これ・・・お前が作つたのか？」

「そつだぞ！美味しいか？」

正直にいうとんでもなく薄くて美味しくない  
まるでお湯をそのまま飲んでいるかのようだ  
母さんが作ったやつならもうちょい塩味がついていたのだが

「うん、美味しい」

美味しくないはずのこのお粥が美味しく感じた

断じてお世辞などではない

本当に美味しく感じたのだ

「そっか！良かった！たくさんあるからじゃんじゃん食べるよ！」

「うん、ありがとう」

そして全部とはいかないが満足になるほどお粥を頂くと再び上半身を寝かした

「なあ、利央はなんでSPになったんだ？」

「え？いきなりどうしたんだ？」

「ちょっと気になってな……20才でSPやってるってちょっと不思議なことかもしれないし」

「そつえば利央がこの戦いに臨む理由を聞いたことがない」

「今までSPだからという理由で納得していたがそれだったらなんでSPになったんだろう？」

『僕はこの戦いを始めた頃からもうとっくに覚悟は決めてる』

初めて一緒に戦ったときにそう言ってたのを思い出した

その覚悟ってどんな覚悟なんだろう……

「……僕にはお前と同じように妹がいるんだ」

「妹？」

「そう、一つ下のな・・・なんでも簡単にこなす奴でさ」

「それとお前がSPになったことに何か関係あるのか？」

すると利央の表情が若干暗くなった

一瞬だが認識できるほどの間も空く

そしてその重々しい口を開けた

「今から4年前、僕達の両親は死んだんだ」

「あ・・・」

しまった・・・いけないこと聞いてしまったな

「気を使わなくて大丈夫だよ、死んだ原因はイルズ、4年前は今ほど活発には動いてなくてそいつによる殺人なんて少なかったけど僕達の家族は運が悪かったんだ」

「・・・」

「その時の僕達は当然イルズを恨んだ、正直に言つと自分が死ぬより辛かった、だから僕は仇を討つために強くなろうとSP業が最も盛んだつて言われてた『アングルムント』に入って必死に頑張ったんだ」

「・・・」

「でも、妹がお父さん達と同じ目に遭うつて言つてそれを良しとはしなかったんだ、両親を討つことに必死だった僕は引き止めようとしてくれた妹を振り切つて家を出たんだよ」

「え、じゃあ妹さんは？」

「家を出たつきり連絡一つも交わしてない、もちろん会つてすらいない、本当は今すぐにでもヨリを戻して妹を一人ぼっちにしてしまった事を謝りたいんだ・・・でもなんて言つたら分からなくて・・・」

まさか利央にそんな事があつたとは・・・普段の明るい雰囲気の彼女からはとても想像できない

利央にはこうして看病してくれたみたいに関わってこれまでに何度か世話になつてきた

だからできれば力になつてはやりたいが・・・

「井上が気にする事じゃないよ、これは家族の問題だし」

「でも・・・いや、そうか」

話を聞いた程度で所詮『他人』のマナトには何も出来ないのは自分でもよく分かつていた

でも心の中では祈ろう

家族が生き別れになるなんてそんな悲しいことないから・・・

それに家を飛び出してまでイルズと戦うことを覚悟した彼女に余計なこと吹き込みたくはない



「じゃあそろそろ僕は仕事があるから行く、早く治せよ」

利央はそう言って部屋から出ようとした

しかしドアノブに手をかけると何を思ったのか一旦静止してしまう

「井上、森達にはこの事は内緒にしてほしいんだ、あいつらの事だからきつと・・・だから頼む」

「分かった」

それだけ言つと利央は再度部屋を出ようと・・・

「利央」

「何？」

「俺達は今『家族』なんだ、俺でも来奈でも誰でもいいから困っ

たことがあったら言うてくれよ、出来ることはするからな」

「・・・うん、ありがとう」

\*\*\*\*\*

「とこういうことでこの配役に異論がある人は？」

一方、学校では

数十分間に及んだ討論の末、配役がたった今決まった

「よ、よし！頑張らなきゃ！」

来奈の役は出番がワンカットだけで台詞も一切ない貴族のメイドBである

最初彼女はその美貌で主役の姫役に多くのクラスメイトに推薦されたが来奈はこれをどうしてもやりたくないとは拒否

来奈曰く、自分に注目が集まるのが恥ずかしくて演技にならないそう  
うだ

「ここが見せ場だな」

悠二の役は主人公の親友役である

脇役であるものの来奈とは違い出番が多く、台詞の量もかなりある  
彼は推薦ではなく立候補でこの役を獲得したが特に反論されはしなかった

それでは本日欠席のマナトは、

「賢月さん、坂白君に役割伝えておいてください、確か家近かったですよね？」

委員長が教卓を降り来奈の席の前に立ってそう頼み込んだ

でも家近いつていうか同居してるんですけどね

「分かりました」

もちろん断ることなく引き受ける

でも彼の役はちょっと伝えづらいかも・・・

「坂白君には悪いけど舞台の裏方・・・かな、もうそこしかなくて・・・」

まあ実際、マナト自身はこの劇に対してどんな意気込みを持っていたのか不明だが影が薄そうなイメージがある舞台裏の作業係となった本人の承諾なしに決まってしまうたが仕方ないんだ

仕方ないんだ・・・

\*\*\*\*\*

「はぁあっ!!」

人気のないところ、利央は思いつきり体を動かしていた

利央にすればこれは来るべきイルズに迎え撃つための特訓だ

今でも十分な戦闘力を持つてはいるのだがマナトの足を引っ張りたくはない

人を守る立場にいる以上、失敗は許されないんだ

「せりゃあぁー！！」

体を宙に浮かせそれと同時に全身を捻らせその捻りの反動を利用して協力的な二段蹴りを繰り出す

人間を相手にこれを炸裂させれば気絶に追い込むことができる  
だがイルズには蚊に刺された程度の痛みだろう

いやそれ以下だな

そもそも人間の筋力でイルズに決定的なダメージを追わせる事は限界があるのかもしれない

利央はイルズにも有効なハンドガンを所有している  
だがこれはあくまで遠距離戦の場合だ、接近戦に持ち込まれたら相手の攻撃をある程度防がなくてはいけない  
だがあの攻撃は生身で受け止められるものではなくそういった意味で接近戦になるともうこっちの負けがほぼ決まってしまう

「接近戦になったら積極的に避けて一瞬の隙を狙って撃つっていうのもありか・・・でもたまたましていてもやられるだけだし・・・」

一旦動くのを止め、腕をくみ考えるポーズをとってみた

そんなことで思い付いたら苦勞はしないが

「・・・なんであの事話しちゃったんだろ・・・」

思い付かずに無意識に昼時のマナトとのやり取りを思い出す  
今思えばあの事は出来るだけ伏せておきたかった  
あまり自身の事情に関わってほしくないからだ

マナトから聞いてきたというのもあるがあの時、なぜ誤魔化せなかったのか

『俺達はもう「家族」なんだ』

「（・・・もしかして僕は『他人』のあいつらに助けを求めちゃってるのかな）」

関わってほしくない、でも自分一人では難しいから助けてほしいと

いうのも本音なのかもしれない

「なんかわがままだな・・・僕」

矛盾した考えに自身を険悪し始める利央

それと同時に一体どちらが正しい選択なのか迷い始めました

分からない

しかしそれを考えさせてくれるのは今までだけ

「グルル・・・」

「!？」

考えている内にいつの間にか異形の怪物が自分の目の前に立っていたのだ



突然の事に驚きはしたもののすぐに取り繕い冷静になって腰のハン  
ドガンに手をかける

「最近よく遭うな、どうして？」

「ゲルル・・・！」

「聞いても分かるわけないか・・・」

\*\*\*\*\*

「そうか・・・俺は舞台裏か・・・」

「じめんね・・・」

学校からの帰宅、来奈の口からマナトへと伝えられた

それを聞いたマナトは少々落胆しながら納得はしていた

本当は表舞台に立ちたかったという思いがその言葉から滲み出ているのが丸分かりでありそう悟った来奈は申し訳なさそうな顔する

「ま、まあ仕方なかったんだ、体調崩した俺が悪いんだし」

「・・・」

正直、マナトへかける声が見つからない

「あああ・・・どうしよう・・・なんか気まずいよ・・・」

こんな時、なんて言ったら良いんだろう？

ここで「頑張ろうよ！」なんて声をかけてもマナトにとっては嫌味にしか聞こえないはず

だって自分にはエキストラ的でモブキャラのような存在でもちゃんと舞台に立てるための役を持っているのだ

来奈自身は裏方の方が良かったので自分の役と変わってやりたいところだがメイドということと女でしかなれず男であるマナトには無理だ

「（えーと・・・そうだ！）・・・そ、そういえば利央は？」

とりあえず彼は風邪をひいているので落ち着かせようと来奈が別の話題に切り替える

この時間に利央がないのもちょっとおかしいと思ったのも事実だが

「利央なら出かけた、なんか仕事あるからって」

「そう・・・」

・・・しばらくの間沈黙が続いた

キャラクターが喋らないのでナレーションも何を言っているかわからない（ナレーション殺し）

「・・・そろそろ寝るか」

「そ、そうだね、早くよくならないと！」

沈黙を破ったのはマナトだった

話をするのがないからそれなら寝るしかない  
来奈だって困ってたしいタイピングで言えたと思う

「じゃあお休み」

「おう・・・」

来奈が部屋から出ると彼は布団にしがみついた

「はぁ・・・なんか後味悪いな・・・」

先ほどのやり取り

どうやら来奈と同じ心境だったみたいだ

彼だって気まづかったはずだ

熱っぽさであまり来奈にはそれを伝えられずにすんだが辛いものは  
ものは辛い

だいたい気まづい空気を好き好む人などいるのだろうか

客観的に見る事を好む人はいるとは思うけど自らがその立場に立つ  
と同じことは言えない

言ってる人見たことないし

「（考えるのやめやめ！さっさと寝て早く治そ！）」

(ブーン)

「うん・・・？」

寝ようとするとなにか音があった

その音は自分の机から・・・というよりもそれに置かれている  
ブツカーから音がなった気がした

しかし依然としてそれは放置されてある

「(ハエが飛んでんのか?)」

だがハエなんて見当たらない

きつと外の風の音だろう

マナトは特に気にせず再び眠りにつくことにした

だが彼は気づいていなかった

一枚のカードが部屋の窓の僅かな隙間からまるで意思があるかのよう  
うに飛んでいったのを

\*\*\*\*\*

「……」

一方利央はイルズに対し苦戦を強いられていた

攻撃が仕掛けられず防戦一方でまだイルズにダメージを与えられていない

しかもイルズの攻撃をかわし続けているものの全てが避けられたわけではなく要所要所、体のあちこちに擦り傷ができてしまった

さらに追い討ちをかけるかのように避け続けたせいか息切れを起し段々と動きが鈍っていた

幸いまだ致命的な怪我は負ってはいない

現在両者は間合いをとっている状況だ

「このっ！！」

間合いがあるということとは遠距離戦に持ち込める

すかさずハンドガンでイルズを蜂の巣にしようとするが

「ムンッ！！」



イルズはそれに対して左腕を細胞変化させ盾のようにした

そしてその盾となった腕を前へ突き出し利央の弾丸を全て防ぎきる

両者一步も退かない状況が続くが

「!?!?そんな!?!?」

無情にも彼女のハンドガンからカチカチと音が鳴り出した

つまりは弾切れだ

今日は特訓だけでここに来たので余分なマガジンは持ち合わせていない

裏目に出ってしまったのだ

それに気がついたイルズもこの状況を利用する以外に手はない盾を構えたまま利央にタックルをかける

「ぐうあああつ!!?」

有効な手段が尽きたうえ、体力があまりにも多く消耗し動きが鈍くなっていた利央は避けようにもどうしても間に合わずモロに受けてしまう

「はぁ・・・はぁ・・・ぐっ・・・!」

しかし運が良かった

勢いでぶっ飛んでその先はゴミ捨て場だったのだ

大量に捨てられたゴミがクッションとなり大怪我をせずに済んだ

でもそれで状況が一変するわけでもない

こっちが不利なのは変わらないんだ

利央、どうする・・・?

「（まずい・・・肉弾戦でなんて勝ち目ないし退くつにも逃げられる状況じゃない・・・）」

なんとかゴミ捨て場から起き上がりこちらへ一歩一歩近づいてくるイルズを見据える

それでどうにかなるもんじゃないけど今はこの状況をどうにかするのを考えるんだ・・・

考える・・・！考える・・・！

だがイルズは利央の予想外の行動をとる

「・・・」

「・・・？」

なんとあるう事が、イルズは左腕を元の手の形に戻して利央にソッポを向いたのだ

それを示したのは戦意喪失・・・

しかも続けざまに利央はとんでもないことを目にしてしまう

いや、『耳』にしてしまった

「ニンゲン、ナゼコロソウトスル？」

「しゃ、喋った!？」

なんと目の前のイルズが人間にも理解できる言葉で喋り始めたのだ  
今まで知るイルズは獣のような雄叫びしか発してなかったのに

「モウイチドトウ、ナゼワレラヲコロソウトスル？」

なんだかきこちないしゃべり方でイルズは利央に質問した

利央もとりあえずは冷静になりその言葉を素直に受け取り且つ率直に答える

「なんで殺すかだって・・・あんたが・・・あんた達みたいないな化物が人間を殺そうとするからに決まってるだろ！！死にたくないからに決まってるからだろ！！」

イルズという面目を恐れずかなりの怒声でイルズに訴えかけた

なんで殺すかだと・・・！

散々人間を殺した分際によくもそんな口が利けたものだなああ！！！！

「シニタクナイダト？」

「そうだよ！あんた達が大人しくしていれば死なずに済んだ人間が大勢いたのに・・・僕のパパとママだって・・・！！」

涙目になりながらもイルズに怒声を浴びせ続ける利央

ついには目から頬を伝って大粒の涙が流れ出す

利央がイルズを憎んでいるというのは理由を知らなくても彼女の表情、雰囲気、そして必死さ、それを見れば誰もが思い伝わってくる  
両親を葬った存在がある、それだけで彼女を激怒させるのは十分な  
ものだった

だがイルズは

「コムスメガ・・・」

「な、なんだと・・・？」

「オマエノヨウナコムスメガシツタフウナクチヲキクナ！！！」

先ほどまで落ち着いて喋っていたイルズの態度が一変したのだ

「シニタクナイダト！？ワレラガバケモノダト！？カツテナコトヲ  
又カシオツテ！」

だが利央も人間として退くわけにはいかない

「生きていることの何が悪いっていうの！！僕だって・・・僕だっ  
てパパとママをあんた達に殺されて辛い思いした・・・この気持ち  
が分かってたまるかああ！！！」

とうとう利央は自分らしくもない、何も考えずにただ怒り任せにイ  
ルズに殴りかかった

でも力の差は歴然だった

「くっ！こんのおお！！」

軽く受け止められ合気道みたいに力を利用され逆に吹っ飛ばされる

今度はさっきみたいなきみみたいなクッションなんてない

コンクリートに直撃だった

「ぐっ！！うっ！！」

激痛が利央の全身を襲う

人生今までに味わったトップクラスの痛みだった

「モウイイ・・・ワレガケントウチガイヲシタダケダ」

イルズは利央に歩み寄りながら右腕を鋭い刃に変化させる



間違いない、今度こそ本気で殺す気だ

「くそ・・・！」

「ニンゲン、ワレラガクルシミ・・・アジワウガイイ！」

もうだめだ

そう諦めかけた瞬間

「おらぁっ！ー！」

「！ー？」「！」

いきなり横からイルズの後頭部めがけ大きなコンクリートの塊を飛んでぶつかってきたのだ

「ムウ・・・ダレダ！」

唐突な事だったので思わず利央を放置しその方向へと顔を向ける

「女の子を苛めるのはほどほどにしとけよ」

現れたのは学生服を着ていて紛れもなく利央が知っている人物・・・悠二だった

「村井！？なんでお前がここに！？」

「下校中だったんだがお前の怒鳴り声が公道まで聞こえてきたから

な  
」

「ニンゲン！コノコムスメノナカマカ！ナラバフタリマトメテコロ  
スダケダ！」

イルズが悠二をキツと睨めつける

対して悠二も同じだ

「冗談じゃねえよ！俺の友人を傷つけやがって・・・！」

「ウルサイ！シネ！ニンゲン！」

イルズは標的を利央から悠二に変え走り出す

「村井！逃げる！お前が敵う相手じゃない！」

だが悠二は利央のということが耳に入っていない

立ちすくんでいたのだ

「村井!!」

「ウオオオオオオ!!」

イルズの刃が悠二に届きそうになった、その時だった

「グワア!?!」

再びイルズの横から何がぶつかってきたのだ

いや、切り刻まれたと言った方が正しいか

「え！？あれって!？」

なんと一枚のカードがどこからともなく現れそれがイルズを翻弄するようになんども刻み続けたのだ

しかもそのカードは

「あれは『デイデイド』の!?!?どうして!?!？」

そう、いつもダイヤモンドが使っているカードの柄だったのだ

しかも悠二はそれを驚きもせずただ見据えている

まるでカードが来るのを知っていたように

「又ワアツ!!」

カードはある程度イルズを切りつけると悠二の目の前まで行きそこで浮遊しながらも静止した

「む、村井！？一体何するんだ！？」

「お前を救い出す、ただそれだけだ」

それだけ言うと悠二はそのカードに向けて腕を伸ばした

「マナト・・・お前の力借りるぞ！」

するとそれを合図にカードが光を放っていく

そしてその光からはカードではなく銀の色をしたベルトと赤い機械的なカブトムシが出現したのだ

ベルトは悠二の腰に勝手に巻かれカブトムシは同じく彼の手中に収まった

一体何を・・・

利央が不思議そうなそしてどことなく心配そうな目で見守る

「変身！」

《HENSHIN》

彼はベルトに『カプトゼクター』を合体させると全身がヒビイロノカネという金属に包まれていった

「・・・！？」

利央といえど驚きを隠せなかった

そしてすぐに冷静になることも出来ない

なぜなら彼が、悠二が、一般人であるはずの彼が何の躊躇いもなくマナト同様に変身したからだ

「ムウ・・・！」

イルズもこの事は予想外だった

だが一度殺ると決めたからには退くわけにはいかない

イルズはがむしゃらに変身を遂げた『カブト』に向かっていく

「ふん！」

だがカブトはそれを軽く受け流しイルズは思いっきり空ぶってしまったので大きく仰け反る

「これでももらつときな！」

もちろんイルズが大きく隙を作ったのを見逃さず、専用武器『クナイガン』を取り出しガンモードで追い討ちをかける



「グワアアッ!！」

さっきとは状況が一変

イルズがいつの間にか追い込まれる形になっているではないか

「グウウ・・・!ワレハ・・・ワレハマケン!」

「!」

「!?!」

しかしイルズがあがき続ける

なんと敵が目の前から消えてしまったのだ

「ぐっ!がはっ!クロックアップか!」

実際には消えたのではなく目で認識できないほどの速さでカブトをあらゆる方向から痛ぶっているのだ

「ワレハイキル！ワレハシナヌ！」

さすがにカブトもこれにはお手上げか？

「自分だけが、とか思ったら大間違いだぞ」

「ナニ！？」

彼は討って出るのか先ほどベルトに合体させたカブトゼクターのホーンに手をかけ少し弾く

すると全身に覆われていた鎧が要所要所で浮かび上がってきたのだ  
そして一気にホーンを倒す

「キャストオフ！」

《CAST OFF》

浮かび上がっていた鎧が勢いよく飛び散っていき中からは赤いフォームのカブトが現れた

最後の仕上げに頭部のホーンが天に向かって持ち上がっていく

《CHANGE BEETLE》

「クロックアップー!」

《CLOCK UP》

息もつく間もなくベルトの右腰を弾くように押した

「き、消えた!？」

すると彼もまたイルズ同様に消えたのだ

と思ったら

「うわっど!？」

周囲のコンクリートや物がひとりでに壊れていくではないか  
とりあえず利央は素早く安全そうな所へと潜り込んだ

\*\*\*\*\*

今から起こることはほんの一瞬の出来事である

カプトとイルズはコンクリートの瓦礫や物が宙に浮いた、そして全体が白くくすんでいるような異様と言わざるを得ない空間で戦いを繰り広げていた

一心の攻防戦がしばらく続くが・・・いや、それも長くはない

「はあっ！」

「グアアッ！」

カプトが思い切りイルズの腹に蹴りを入れると綺麗な放物線を描いて吹っ飛ぶ

「ワレハ・・・！ワレハワワワワ！！」

体制を立て直し最早狂気染みたイルズがこちらに向かってきた

カブトはそれに慌てず背を向けカブトゼクターのボタンを順番に押してホーンをある程度にまで戻す

《ONE TWO THREE》

「ライダーキック・・・！」

《RIDER KICK》

仕上げに戻っていたホーンを再び力強く倒して足に電撃を纏わせる

「ウワァァァー!!」

「はあぁっ!!」

イルズを直前まで引き付け絶妙なタイミングで後ろ回し蹴りを炸裂させる

「\*?!」

そしてイルズはその衝撃で地面にひれ伏し言葉にならない悲鳴を上げて石になり砕け散って逝った

《CLOCK OVER》

それと同時にあの異様な空間もなくなり元の世界へと帰ってくる

その瞬間宙に浮いていた塊や物は一斉に重力に従って落ちていった

「村井……」

「俺は……」

……



## #9 敵の代弁者（後書き）

今回の話は結構色んな意味ではっちゃけてますね

そういえば皆さん、皆さんの学校での文化祭は楽しめますか？  
僕のところは全然ですね！

まず名前から違いますから仕方ないことだと思います（文化祭ではなく文化発表会）

僕のクラスはお化け屋敷だったんですが使う材料を限定されたりなかなか手に入らないということであまり怖いお化け作れなかったということですよ

しかしこれらは良い思いだと悪い思いですよ

ポジティブにしきましょう！  
ポジティブ思考は大事ですよ！

# 10 僕と俺の意地(前書き)

挿入歌なし

#10 僕と俺の意地

《ONE TWO THREE》

「ライダーキック・・・！」

《RIDER KICK》

「はあぁっ！..！」

\*\*\*\*\*

「・・・」

「・・・」

イルズを倒し互いがなんと行っていいか分からないでいるとカブトのベルトからカブトゼクターがひとりでに離れ変身解除させられるカブトゼクターと悠二から勝手に外れたベルトが宙を舞い二つが空中で集まるとまた光だして最初のカードになつてしまった

そしてそれはどこかへと飛んでいつてしまった

変身を解き悠二の顔が現れた時はなんだか深刻そうな表情をしていた  
やってしまった、そんな表情だ

「村井・・・あれはなんなの・・・どうして井上のカードが・・・」

!？」

当然利央は黙っていなかった

つい最近ほどこの戦いの事情を知ったはずの彼がなぜ力を駆使し戦えたのか、気になりすぎて居ても立ってもいられない

だが悠二から発せられた言葉はあまりにも非情なものだった

「利央、今見たことを全部忘れる」

「なっ!？」

予想外の回答に戸惑う

少なくとも彼女が知っている悠二ならばこんな否定的で非協力的な事は言わないのに・・・

「ど、どうしてだよ!？そんなの見過ぎすことなんかできるわけないだろ!」

「どうしてもだ！それとこの事はみんなには絶対に言つな！いいな！」

だんだんと理由を説明してくれない悠二に腹が立ってきた

自分も戦っている身なのに教えてくれないなんて・・・そんなの理不尽だよ！

「まっつて！」

逃げるようにそそくさと歩き出した悠二を利央は即座に引き止めようとする

「俺に構うな！」

悠二はそれに対して煮えを切らしたように振り返りその勢いを殺さず利央を叩こうとした

だが

「!?!」

「教えてもらうまで帰さないんだからな！」

さすがは利央

難なく悠二の手を防ぎ逆に利央が悠二の手を掴んで逃げないよう力強くその腕を握りしめる

「・・・!」

力だけじゃなく彼女の全身からは覇気が出ていた

聞き出したいのも分かる

でもその覇気の中からは自分の力強さをアピールしているようにも感じた

恐らく先ほどのイルズとの戦闘で足を引っ張ってしまったのが彼女にとってとても悔しかったのだろう

でも自分は強いんだ、自分は役に立つんだ、だから教えてくれ！  
と言わんばかりな雰囲気だ

そうだよ、そんなの・・・利央は頼れる存在だってことは悠二だっ

てこれまでに思い知らされた

でもこれは・・・！

「俺はお前に戦ってほしくなんかない！」

「え・・・」

それを聞いた瞬間、利央の悠二の手を掴む力が急に弱まった

その隙に悠二は捕まれた手を振りほどく

利央も利央で再び捕まえようとはしなかった

今まで戦って守って生き残る事だけしか考えてなかったのに・・・

彼女は頭の中で軽く混乱していた

その理由は推測ではあるが恐らくこうだろう

利央は真正銘のアグメントメディアのSPだ

鍛えられ非常に恵まれた能力を頼られ命令一つで危険を顧みず全力に任務にあたる

マナトと一緒に戦っている時もそれは同じ

彼は利央を戦うのを止めさせようとはしない



・・・だが悠二はどうだろう、彼だけが利央自身の安否を第一に思ったかのように彼女が戦うのを拒んだのだ

つまり悠二だけが利央を危険なイルズ退治から遠ざけようとしたのだ

その真意とは・・・

「その・・・つまりだな・・・」

悠二はまたやってしまった的な顔をし、さらに＋で頬がほんのりと赤くなった

「・・・」

利央は赤面になった悠二から視線を外し真下を向く

「利央・・・？」

顔が下に向いてしまつて表情が見えない  
やばい・・・悟られたか？  
と思ひ覗き込もうとする

「そうか・・・僕つてそんなに頼りにならないんだな・・・」

彼女らしからぬ低いトーンでその言葉が発せられた  
すなわちとても落ち込んでいるときの声量だ

「ち、違う！俺はそんなこと・・・！」

必死に弁解しようとした  
でもあれだけ否定的な態度をとってしまった今の悠二には利央を誤  
解から解くような説得力は持つているだろうか

「僕が力不足なんだ・・・井上や村井みたいに变身しなくて生身で  
突っ込むなんてバカな事だよね・・・」

「……！そういつつもりで言った訳じゃ……！」

さらにダメ元で弁解しようとしたがあえなく、

「もういいよ……」

その一言だけ言うと利央は回れ右をして悠二が来た方向とは逆にトポトポと歩いてそこから立ち去っていく

悠二は手を伸ばし止めようとした

……が何を思ったのかその行動を止めてしまう

「く……！」

自分には彼女を止める資格がなかったのだ  
彼女を落ち込ませたのは他の誰でもない、自分だ

そんな奴が止められるとは思えない

「・・・」

だが彼だつて落ち込ませてくたつたんじゃない

それでも仕方ないとは言え利央の立場から考えてみれば自分が放つた発言に自分自身で腹が立っている

自分の情けなさとおどけなさ、そして無力さが彼を支配した

「（ごめんな、利央・・・本当は話してやりたいんだ・・・けどそれじゃあお前が・・・）」

悠二は複雑な表情をしながらその場を後にした

\*\*\*\*\*

その夜、利央は坂白家に帰宅していた

とりあえず誰もいないリビングに入りソファーに座って目の前の机にホルダーからハンドガンを取り出し置く

「はぁ・・・なんで礼の一つも言えなかったんだろう・・・」

冷静になって考えてみればあの時助けてもらったのに「ありがとう」と礼の一つも言っていなかった

いや、言えなかったのだ

あまりの急展開に頭が混乱し悠二が何を考えてるのか、それを聞いて頭の中を整理しようといっぱいはいだった

つい興奮して礼を言わなければなんて事が浮かんでこなかったのだ

「・・・」

悠二のあの叫びのような一言が頭の中を過る

『俺はお前に戦ってほしくなんかない!』

この言葉も今になってよく考えてみれば悠二は自分を決して蔑んで  
なんかいない

それだったら「足手まといだ」とか言ってくれてもいいはずなのに・  
・

だとしたらあの言葉の意味は、

「まさか僕を守ろうとして・・・?」

そう思うと情けない気持ちの上に申し訳ない気持ちまで乗っかって  
きた

彼は自分を守ろうとしただけ

ならば自分が悠二に対し発言したことは、

「謝らなきゃ・・・！」

彼女はハンドガンの手入れを終了させ席を立つ

「利央・・・？」

「・・・！？」

だがここである一人の人物が現れる

それは額に冷えピタを貼ってパジャマ姿だった

つまりは

「井上か・・・風邪引いてるのになんで降りてきたんだ？」

「ちよいと小腹が空いてな、熱っぽさもだいぶ引いたみたいだし」

マナトがリビングへと降り立ち食べ物求めに来た

若干フラついてはいるものの昼時の時よりはだいぶマシになっていた様子で心配しなくてすみそうだ

マナトにあの事を話そうか・・・

そうしたら少しは気が紛れるだろう

いや、でもそれだと・・・

「なあ、利央」



「な、なに!？」

考えに漬け込んでいるとマナトから話を切り開かれた

深く考えていたので少し驚き気味で反応してしまう

「突然な事で聞くけど利央は・・・俺がディアドになったことどう思ってる?」

「ど、どうした急に?」

本当に突然な質問だ

なぜ今更になってそんな事を聞くのか

「いやだって、お前が一般人である俺がディアドだってことどう思ってるのかなあって、戦いに未熟な奴が重要な役割背負っちゃまって不満持たれてねえのかなあなんて・・・」

「・・・」

正直に言つと利央の中では半分正解であつた

マナトが言うように彼は一般人でありながら命を落としかねない戦いに挑んでいる

常識的にあり得ないことだ

ダイヤモンドの力があるにせよ何の訓練も受けてない一般人が本当にこのまま戦いに赴かせたままでいいのだろうか？

しかしそう考える反面、マナトには戦つてほしいとも思っていたのだ  
それはなぜか、

彼が適合者である故にダイヤモンドに相応しいからだ

彼と戦っていると心強く感じる

というかいなければ自分とはとくに死んでいただろう

そういつた申し訳ない気持ちと頼りたい願望の矛盾な思わせが利央を悩ませた

「僕は……」

ダメ・・・答えが定まらない

言葉が見つからない・・・

だって僕は・・・僕は・・・！

「・・・僕だって未熟だよ・・・」

ここで答えを出せない時点で自分も未熟だと確信できた

きっぱりとマナトを切り捨てる、といえは言い方が悪いか

頼らないようにする事をいうのが筋というものだ

けど今の利央にはそれが言えない

「え・・・？」

マナトは利央の予想外というべきの返答に思わずマヌケな声を漏らしてしまった

「僕だって・・・弱くて分からず屋で自分勝手なんだよ・・・なん  
でそんな事僕に聞くの・・・!」

後半の喋りが徐々に怒りを覚えていったのが疑問に思いながらもじ  
わじわと伝わってきた

しかしマナトは怯まず励まそうとする

「お前は弱くなんかないだろ、しっかりイルズを見据えて俺のサポ  
ートをしてくれるお前が」

「そんなのじゃない!!」

「!?!」

彼女のいきなりの怒声にマナトはビクッと体を跳ねつかせた

「そんなことじゃ……ないんだよ……!」

そう言うと彼女はホルダーに入ったハンドガンを握りしめ外へと駆け出した

「あ!おい!?!」

すぐさま追いかけてようと試みるが

「はぁ……はぁ……ぐっ……!」

まだ完全に引いてない熱が彼の邪魔をする

「一体……どうしちゃったんだ……?」

\*\*\*\*\*

「無意味な力の使い方は止めてくれ、正体を知られたらどうするつもりだ」

「仕方ないだろ、アイツを死なせる気なんてサラサラないからな」

某所・・・そこではそれなりに威厳があるオフィスチェアに座っていた男と・・・悠二が対談していた

「そんなにアイツが好きか？お前強情な奴だな、それでいて哀れな

奴だ・・・」

それを聞いた瞬間、部屋全体にやかましいくらいの騒音が一瞬に  
てなつた

悠二が机を殴つたのだ

「どういう意味だよそれ・・・!!」

怒り・・・というより最早激怒レベルにまで達しているのが感じ取  
れた

自分が物凄く好意を抱いているものをバカにされたときと同じように

「まあ抑えろつて、アイツは俺の直属の部下だ、優秀なのは認めて  
いるさ・・・だが・・・マヌケだな」

「貴様!!」

ついには胸ぐらに掴むまでに達しもう悠二の沸点は限界寸前だった

「までまで、別に蔑んでいってる訳じゃないさ、それがアイツらしいって事だよ」

「・・・チツ、気に食わねえ」

悠二はなんとか抑え込み胸ぐらを放す

「あの周辺にはエネルギー探知はお前ら以外に反応がなかった、幸いにも部下が見てただけで良かったよ」

「・・・」

悠二はそれを黙って聞く

いや、嫌な奴の話など聞きたくない、そんな感じの態度にも見えた



「それで、なんの力を使った？」

「……『カブト』……『カブト』を使った」

口も動かしたくもない

「なるほど、超速の戦士をか……」

「聞きたいことはそれだけか？」

「まあね」

「フン、だったらさっさとここから出させてもらっせ」

そう言って悠二はそそくさに立ち上がり何の躊躇いもなくその部屋から退室した

残った男はアゴに手を当て真剣な顔になり何かを呟いた

「坂白マナトに神岡悠二……こいつらには何と少しでも生き残ってもらわないとな……」

\*\*\*\*\*

ああもう！またやってしまった！

いい年して感情的になるなんて僕らしくない！

また謝らなければならない事が増えた

悠二への非礼の謝罪

マナトへの意味不明な怒り感情の謝罪

二つの事柄が彼女の頭を悩ませていた

「はあ・・・」

物凄く深いため息をつきたまたま通りすがった公園のベンチに八工の音すらもしない静かな動きで腰かけた

「・・・」

それからの利央は無言だった

目の前で子供が無邪気に遊んでいようがカップルがイチャついていようが彼女の目にはそれが入り込んでこない

今利央の中では二人の事でどう対処しようかで頭がいっぱいだったのだ

そしてそのまま時間が過ぎ、夕暮れの時間になってきた

それでもなお、利央は微動だにもせず座り続けている

時間が過ぎていくだけで解決はしない

何も変わらない

僕はあいつらになんて言えばいいんだろう・・・

そもそも二人は逃げ出したも同然な僕に耳を傾けてくれるのだろうか？

もしそうだったら・・・

怖くて行けるはずがない

このまま本社に戻ろうか・・・

「利央！」

「利央姉さん！」

だがそう思う通りにはいかずにすんだ

なにやら真剣な表情でこちらに向かってくる者がいる

来奈と愛華だった

「森……沢城……どうして……」

汗水まで流して二人は利央を心配そうな目で見ていた

その様子からもしかすると・・・

「僕を探しに来たの・・・？」

「そうだよ、マナトが利央を探してきてくれて言われたの！」

「兄さん凄く利央姉さんの事心配してたです・・・なにか喧嘩したんですか？」

喧嘩・・・？

いやあれは・・・

「喧嘩じゃない・・・僕が一方的に怒っただけだよ」

「「??？」」

利央はこの二人なら気楽に話せるだろうと思いき先ほどのやり取りを話した

だが悠二の事に関しては混乱するので話さないでおく

理不尽に怒った理由もそこにあるわけだが戦いにストレスを感じていたというあながち嘘ではない事を話しうまくごまかした

「なるほど、そんな事が・・・」

「ホント・・・僕は勝手過ぎるよ・・・勝手すぎて・・・」

自分が嫌いになりそう

直感的にそう思えさえもできた

一番の年長者は僕のはずなのになんで衝動的になるんだろ・・・

ホント、嫌いになるよ

それでもって・・・自己嫌悪になるのが重ねて嫌だ

そしてそんな自分もつんざり

そうした悪循環がどんどん自分を陥れていく

本当に……本当に……!!

「そんなことないです!」

だがここで否定された  
愛華が叫ぶのに比例して利央もまたゆっくりと顔を上げる

「そんなこと……ないです!」

「沢城……?」

愛華は利央を見据える



なんとも少女らしからぬ瞳で

「確かに兄さんに比べれば無謀かもしれませんが、でも利央姉さんだって頑張って生き残ろうとしてるじゃないですか！」

「！」

「愛華ちゃんの言う通りだよ、死のうとせずに生きることから逃げないのは立派な事だと思う！」

いきなり二人にそんなことを言われた

生きることから逃げてない？

僕が？

どうだか・・・だったら戦うなんて選択なんて・・・

「！」

二人の言われた事を脳内で否定しようとした瞬間あることを思い出した

『わざわざ敵に向かっていくなんて、お前は生き残る他にも理由があるんじゃないか？』

それは自分がマナトに戦う理由を問おうとしたとき

あの時はマナトからは答えは得られなかったが・・・

もしかするとこれは自分自身にも向けられているのでは？

「そつだよ・・・僕は生きていたい、いつまでも・・・でもなんでSPになってまで戦うことを選んだか・・・生きるだけならわざわざ戦う必要なんかないのに・・・」

「「？」」

秘密にしておきたかった

僕の家族の事

でも今無性に話したくて仕方ない

なんで？

利央は分からない気持ちに躊躇いながらもマナトに話した自分の家族の事を来奈達にぶちまけた

話の後半、吹っ切れたみたいだった

「それが利央姉さんの戦う理由……？」

「そっだ……」

なんで話しちゃったんだろ

触れて欲しくないことなのに

でもこれだけは分かる

話さないと苦しかったって・・・

「でも私達も『家族』だよね」

え？

「同じ屋根の下に住んでますし、仲いいですしそうですよね」

え？え？

「な、何をバカな！僕達は所詮『他人』・・・だ・・・ろ・・・」

利央は言っている内に自分の発言が失礼に思えてきた気がした

それと同時に『アイツ』に言われたことも思い出した

『俺達はもう『家族』なんだ』

一緒に戦ってくれる心強い奴の言葉

今になってその言葉が重くのしかかった

でも嫌じゃない

むしろとてもその言葉に嬉しく感じ助けしてくれる期待もできるような気がする

「少なくとも私達はもう『他人』じゃないよ、そう・・・『家族』  
という名の『仲間』って言ったところじゃないかな？」

「仲間・・・？」

「そうです！仲間です！利央姉さんは私達の心強い人間です！」

心強い？

僕が・・・？

「そうだよ、利央、お前は決して弱い人間なんかじゃない」

その時だった

来奈達の後ろから誰かが便乗するよつに話に乗っかってきたのだ

それはもう平気そうに立っていたマナトがそこにいた

「マナト！？ダメじゃない！家で大人しくしてなきゃ！」

「大丈夫だよ、もうほとんど治ったから」

来奈に念を押しマナトは利央にさらに近づいていく

「井上……僕は……」

「いいか？簡単に言っぞ？」

息を深く吸い今にも何かを吐き出しそうな体制を取ると

「俺達は『家族』！！以上！」

利央は多少驚くがそれを遥かに上回るほどに

「あ……ありがとう……！」

嬉しかった

なぜだかは未だに分からないけど嬉しかった

そして懐かしくも思う

SPになる前の以前の家族と過ごしていた時間と照らし合わせて・

・

そして利央にはもうひとつ言うべき事があった

「それと・・・ごめんな・・・勝手に怒ったりして」

「もういいんだ、お前が家を飛び出したあと何となくその事に悩んでいるんじゃないかって予測はしてたから」

「うう・・・井上・・・！それに森も沢城もありがとな！」

半涙目になるなんて・・・



この年になってまで恥ずかしいや・・・

利央はマナト達に気づかれないうさりげなく目を擦り涙をぬぐんだ  
全然隠せなかったが

「そういえば」

「？」

と突然来奈が話題を変えてきた

利央を立ち直れたのをタイミングで合わせただけだろうか

「利央、悠二見なかった？」

「え……?」

そうだ……村井にも謝らなきゃ……!

「今日昼前に早退したの、先生にも理由を話さずに学校を出ていったらしいんだけど……」

村井が……

じゃああの時利央の前に現れたのは……!

「(僕がイルズに襲われてるのを知っていた!?)」

いや考えすぎか……

たまたま通りすぎただけっていう可能性もあるわけだし……

それに一番疑問なことが……

「利央？知ってるのか？」

利央の肯定も否定もしない曖昧な反応にマナトが感づいた

「あ！いや、それは……」

利央も焦ったかすぐに言葉が見つからずごまかすことで必死になつてしまう

そして三人はそんな態度の仕方を見て確信した

コイツ、何か知ってるな……と

もう隠せまい、吐いてもらおう

マナト達が遠慮なく問いただそうとした時だった

「お前ら・・・」

「「「「！？」」」」」

その場にいた全員がその言葉に反応しその方向に目を向ける

「悠二!？」

そこにいたのは唾然とした顔をした悠二だった

「お前らどうして・・・?」

彼の様子を見る限りマナト達に会いにきたつもりではないらしい  
偶然のようだ

「ちょうどいい、本人から聞き出せばいいんだ」

「悠二、なんで今日誰にも何も言わず早退したの?文化祭の劇の練習だつてあるのに・・・せめて言ってくれれば」

来奈は少しいきすぎるぐらいに悠二に突っかった

つまり少なからず怒っているということだ

劇のメインキャストを演じる者が何も言わず突然の不在

同じクラスとして、マナトと来奈はあまり居心地が良くない

「・・・」

だが彼は黙秘権を使った

なんか苦々しい表情しているように見えるのだが・・・

理由はどうあれ、黙っているのは良くない

無理矢理にでも聞き出す！

「悠二！なんで黙ってるの！？」

・・・でももしかしたら何か訳があるのか

「なんか言えない訳でもあるのか？」

「・・・」

悠二はこれに対しても無言だった

固く、硬く、堅く、口を開こうとしない

一体どうしたんだ・・・？

「・・・！」

誰も喋らない中、利央が黙って悠二の前に立つ





悠二はそれを教えられさらに苦い表情になり声を出してまで止めようとした

三人も一般人である悠二がそんなことないと思いながらも脳内で軽い混乱を起こす

「今は素直に口にしたいたいほど感謝してる、でもその前に教えてほしいんだ・・・お前が何者なのかを・・・!」

「俺の・・・正体」

問い詰められた彼は顔を伏せてしまった

おそらく言うか言わないか悩んでいるんじゃないかと思うが・・・

「『アイツ』に逆らっても面白いものか・・・」

悠二は小さく何か呟き顔を上げる

言う気になったか？

「いいぜ、教えてやる」

さっきの苦々しい表情とは違いいきり立ち明るい……一言でいうなら吹っ切れた表情をしていた

「ただし」

「「？」」

「ただし」というと彼はゆっくりと右手をマナト達に差し向けた

……といつより『マナト』に差し向けられた気が……

「俺を倒せ！」

「なっ!?!」

その悠二の言葉に驚いた

・・・そうじゃない、それ以前に驚くべきことが起こったのだ

なんとマナトが持っていた ブッカーからひとりでにカードが飛び出し手を差し向けた悠二の目の前で静止したのだ

「兄さんのカードが!?!」

「悠二！お前！？」

「黙って・・・俺と戦え！」

カードが光だしその光の中からスコープやデジカメラらしい物が装着されたベルトと の黄色いメモリーが付いた携帯電話が出てきた

ベルトはそのまま悠二の腰に巻き付けられ携帯電話『ファイズフォン』は手に収められる

「悠二、俺達親友だよな・・・？なんで戦うなんて・・・？」

「言っただろ？」

言葉を交わしながらファイズフォンを開き『5』を三回テンポよく押していく

「知りたきゃ倒せつてなあ！」

《STANDING BY》

仕上げに「ENTER」を力強く押して勢いよくディスプレイを閉じる

452

「変身・・・！」

《COMPLETE》

ファイズフォンを胸の辺りで握りしめそのままベルトに流し込むようにセツトして倒す

紅く光るフォトンブラッドが体全体を包んでいき悠二の姿は完全に無くなった

そしてそこにいたのは・・・

「マナト・・・もう俺達は以前のような関係には戻れないかもしれない・・・先に謝っておくぞ」

特殊スーツに包まれて黄色の複眼を光らせファイズはそこに仁王立ちに近い形の立ち方をしていた

「それどういう意味だよ!?!」

「いつか分かる、『アイツ』に流されなきゃな」

「『アイツ』・・・?」

今彼の言葉が軽く引つ掛かったが悠二はそれを考えさせてはくれない

「さあ、マナトも変身しろ、知りたいんだろ・・・？」

ああ、知りたいよ

でも戦う相手はイルズじゃない、これじゃあ人間同士の殺しあいじゃねえか！

「そうだ、俺達は今から互いに本気で殺しにかかるんだ、だから以前の関係には戻れないのかもしれないって言ったんだよ」

「そんなの・・・そんなの・・・！」

マナトはもちろん来奈達もどうしていいか分からずにいた

親友があんなことを言ってる、頭の中の混乱はまだ収まらない  
いやそれどころか余計に悪化したと言ってもいいだろう

だがそんな中ただ一人

(ジャキ)

ホルダーからハンドガンを取り出しその銃口をファイズに向けている者がいた

「倒したら聞かせてくれるんだな？」



殺意さえも感じられる利央がやる気満々で構えていたのだ

「ちょっと利央！？悠二の挑発に乗るの！？」

「僕は挑発に乗ろうが乗るまいが知りたいたんだ、村井が何者なのか、それでなんでこんな手荒な真似で挑発してまで戦わせようとするのか・・・そのためなら僕はどんな手を使ってでも知らなくちゃいけないんだよ！」

「どうしてです？なんでそこまで・・・」

どうしてか・・・

僕はムキになってる

それは自分でも分かってるぞ

でも村井の事知らないとか村井にちゃんと言えないんだ

「ありがとじって」

.

「僕は村井を殺さない、礼を言うために！」

彼女の意地が今爆発する

#10 僕と俺の意地（後書き）

まず言うことありますよね・・・

申し訳ありませんでした！！！！

約1ヶ月振りの投稿となります

実は投稿遅れたのには訳があつて・・・

先月発売されたゲームにハマり過ぎていて小説に全然手をつけていませんでした

おかげで久しぶりにこのサイトに来たときショック受けました

貴重なお気に入り件数が減っていた事に・・・！！

自業自得なのは重々承知しています

でも分かっているけどショックなのはショックです……（泣）

しかしこうやって投稿できるくらいに落ち着いてきたので大丈夫なはずなのですがまだ受験という壁が残っていて以前のような投稿速度は無理っばいですね

そのところはご了承ください！

そして相変わらずの駄文……

空けてた分余計に酷くなった気がする……

今になって言うことじゃないですが小説って書くの難しいですね

早すぎず遅すぎずテンポよい展開を繰り広げるといのは……

話変わりますが来奈が男性陣の名前を呼ぶときに君付けから呼び捨てになりました

間違いじゃないですよ

いつまでも君付けだとなんか違和感があるので

最後に一言

お気に入りにしてきた人カムバック〜!・・・

#11 S(ストライカー)(前書き)

『The people with no name』

歌：神岡悠二



# 11 S (ストライカー)

\*\*\*\*\*

「お前はやる気なんだな・・・」

「そつだよ・・・全部吐かせてやるからな！」

利央はハンドガンを握る手をさらに力強く握りしめる

「マナト、いいのか？利央だけに戦わせて？」

「なに！？」

「一部といえども俺はお前の力、ダイヤモンドの力を使っているんだぞ？もし生身の利央と戦えば・・・どうなるかわかるよな？」

「悠二てめえ・・・！」

マナトはファイズに対して段々と腹が立ってきて仕方がなかった

今日の前にいるのが親友だと思いたくないほどに

「井上！」

ファイズを睨み続けていると利央がこちらに向かって叫んだ

彼はハッとして利央に見向きする

「知りたいんだ、アイツの事・・・だから力を貸してくれないか？」

「利央・・・」

まさか利央から力を貸すような事を言うなんてな

アグムントメディアの事もあるかもしれないが今のは彼女の本心の  
ように感じた

多分ここで断っても引き返せはしない

だったらいつそ！

「分かった・・・手伝う、来奈と愛華は隠れてろ」

マナトは何かを思い ブツカーを腰に装着させる

ダイヤモンドライバーを右手に携え、左手にカードを構えた

「変身」

【KAMEN RIDE】

「く・・・！」

了承しても体は戸惑ったままだ

でも・・・やるしかない！

【DIAND】

戸惑う中、それを振り切り思い切ってトリガーを引いた

苦悩の末、ダイヤモンドへと変身する！

「それでいい！」

ダイヤモンドが変身を終えた事を確認するとファイズはいち早く彼へと向かってきた

「おらあっ！やああ！」

「ぐっ！ぐふぁ！」

初っぱなからファイズは強烈なスイングアッパーを噛ましてきた

それも何発も

腹部に集中し直撃ばかりだったので吐きそうな感覚に陥った

だがダイヤモンドもただやられる訳ではない

「こ……野郎お！！！」

ダイヤモンドライバーを邪魔そうに手放しずっと腹にパンチをしてくるファイズをなんとか突き放してマジな右ストレートをぶちかまそうとした

だが

「甘い！」

突き放したまでは良かったが肝心な右ストレートが顔面スレスレで避けられ逆に隙だらけになったダイヤモンドの背中を裏拳で簡単に跳ねのけられてしまった

「っ……っ！」

「お前は昔から喧嘩が弱いな、ただガムシヤラに向かっていくってのは能無しの奴がやる無謀行為だ」

「くそ……なんだよ……っ！」

前のコイツならこんなにも皮肉が籠ったことが言えただろうか  
なんだか余りにも以前との性格の差がありすぎて別人に見えてきた  
声も、容姿も、見慣れたアイツなのに全然違って見えてくる

「村井！」

横から呼び掛けられファイズは倒れているダイヤモンドからその方向  
へと落ち着いた感じで見据え直す

そして利央は何の躊躇いもなくハンドガンを何発も発砲した

しかしファイズは避けようとはしない

《BATTLE MODE》

「「!？」」

なぜなら銃弾がファイズに到達する前に何かが立ち塞がりそれを防いだからだ

ファイズを守るように立っていたのは銀色で長身の自立型ロボット  
『オートバジン』

執事であるような立ち振舞いをし次の行動をご主人であるファイズから指示を貰うのを待っていた

「お前は待機しとけ」



指示を聞くとオートバジンの目辺りの電子光がピロピロと光りファイズの指示通りその場で動きを止めた

一方ファイズはファイズフォンからミッションメモリーを抜き取り

《READY》

オートバジンのハンドル部分に挿し直し『ファイズエッジ』としてオートバジンから抜き取る

ディアンドも剣には剣、といわんばかりさつき放り捨てて置いたディアンドライバーを拾い上げさらにブッカーからカードを取り出す

【ATTACK FORM RIDE】  
【DEN-O SWORD】

カードを入れるとダイヤモンドの装甲に赤みが掛かった鎧が肩と胸に装着されさらに頭部には同じ色の桃の形をした装飾品が施されそれがパツクリと割れた

仕上げに左手に『デンガツシャー ソードモード』が装備されて「ダイヤモンド ソードフォーム」へと形態移行が完了した

「俺、参上！いくぜ、いくぜ、いくぜ！！」

いきなり強気になったダイヤモンドが二本の剣を携えファイズへと突進していく

「お前はやっぱり・・・馬鹿な奴だよ！」

ファイズエッジを構え向かってきたダイヤモンドと激しい剣のぶつか

り合いが繰り広げられる

しかもそれだけではない

別方向から利央の連射射撃が襲ってきたのだ

だがそれで怯むファイズでもなかった

激しい剣閃の中、ダイヤモンドの一瞬の隙をついて僅かに間合いを取ると利央の向きを修正してファイズエッジで銃弾を叩き落とした

それも全弾

利央がマガジンの交換を行い出すと再びダイヤモンドの向き直りまた激しいぶつかり合いを繰り広げる

そんな繰り返しがしばらく続いて

ダイヤモンドの剣閃、利央の銃弾が同時に来たときは大きな一降りでそれをやり過ごした

しかしこのまま押しきられるのでは意味がない

ファイズはそれを解決すべくファイズエッジを振り回しながらも左手でファイズドライバーからファイズフォンを外しディスプレイを開いて『1・0・6 ENTER』と入力してディスプレイ部分を約30度に傾けた

## 《BURST MODE》

フォンブラスターに可動させそれでまず撃ってくる2丁のハンドガンを利央に傷ひとつつけることなく撃ち落とす

「うわぁっ!?!」

さらにディアンドには強制的につばぜり合いにさせ動きが止まったところを狙い腹部に定めて何発もフォンブラスターを浴びせた

「ぐわぁぁあ!?!?!」

「はぁ、はぁ、」

ファイズは少し息を切らせていたが何の問題もなく後ろで待機させていたオートバジンの胸部にあるスイッチを押した

《VEHICLE MODE》

するとオートバジンは人型の形態からみるみる内に・・・というか一瞬でバイクへと変形した

ファイズはそれに跨がりエンジンを吹かせいきなり最高速度でディアドに突進をかける

「うおっ！？あぶなっ！？」

なんとか紙一重で避けられたもののこのままでは勝ち目は薄い

そこで

「ディアンダー！」

ノーマルフォームへと戻り自身のバイクのマシンディアンダーを呼び寄せる

ディアンダーは留まることはなかったがディアドがタイミングよく飛び乗りディアドドライバーをディアンダーにセットされている

収納鞘へ納め準備完了したところで通り過ぎ去ったファイズを追う

\*\*\*\*\*

「このー！うらめー！」

二人は町の大道路を闊歩しながら車体をぶつけ合う

車体の大きさではダイヤモンドの方が一回り大きいのでダイヤモンドが有利だった

ファイズも苦し紛れにフオンブラスターを撃つてあがいてみせるが何分ぶつけられる度に照準がぶれるのでなかなか当たらない

そこにさらにダイヤモンドが強襲を強める

【ATTACK FORM RIDE】

【ORZ RATORARTER】

【ATTACK RIDE】

【TORIDEBENDER】

二枚のカードを連続に入れ発動させるとダイヤモンドは頭がライオン、胴体がトラ、脚がチーターに模した姿「ダイヤモンド ラトラーターコンボ」へと変貌しマシンダイヤモンドもトラのような雄叫びを上げる『トライドベンダー』に変わった

「さっきの仕打ちはこれでキャラな！」

ダイヤモンドはファイズの後ろ辺りにピッタリとつくように走行しも



う一枚カードを取り出す

「!？」

【FINAL ATTACK RIDE】  
【O-O-O-ORZ】

ダイヤモンドとファイズの間黄色に輝くリングが発生するとダイヤモンドライバーをしまってバイクの上に立ち腕のトラクローを展開させる

そしてそれらを掻い潜っていき

「はああああ！セイヤー……！……！」

「うおわああああ……！」

展開させたトラクローでクロス状に引っ掻き「ガツシユクロス」を決めるとオートバジンは大破、ファイズも慣性の法則に従って走行していた方向に何十メートルも転がり込む

「っ……まだ終わってねえぞ！」

だがファイズは苦し紛れにも立ってみせ左腕に装着されているデジタル腕時計型『ファイズアクセル』からアクセルメモリーを抜き取りそれをいつの間にかミッションメモリーを抜いたファイズフォンへ差し込む

## 《COMPIETE》

ディАндロが形態移行を行ったようにファイズもまた形態移行していく

赤かったフォトンブラッドは銀色に変色し黄色の複眼も真っ赤にな  
って胸部分の装甲が開いて肩に収まった

「ファイズ アクセルフォーム」

音をも超えるファイズの超加速形態だ

息をつく間なくファイズアクセルのスタータースイッチをプッシュ  
する

《START UP》

周りに轟音を撒き散らしながら腰を低くして構えたかと思うと一瞬  
にしてファイズが消えてしまったではないか

「!？」

ダイヤモンドも唐突な事でファイズを探そうとキョロキョロと慌て始める

だがそれはしばらくも続かない

「マナト!!動くなよ!!」

ダイヤモンドの周りに5つの赤い円錐状のポインターが一点に集中して浮かび上がったのだ

「はあ!でやや!だあ!はあ!うらあ!」

ポインターはダイヤモンドの体をドリルのように抉り食らわせる

「アクセルクリムゾンスマッシュ」を浴びせられダイヤモンドの全身にはそれはそれは激痛では済まないほどの痛みが流れた

《THREE》

《TWO》

《ONE》

《TIME OUT》

《REFORMATION》

「!...」

自動的に胸部が閉まりノーマルフォームに戻る

それに続きファイズはゆっくりとファイズフォンを抜き取りボタンを押して変身解除する

ダイヤモンドもダメージが相当なもので強制的に変身解除された

そこにはあまりに傷が多い気絶したマナトの姿が...

「……ちっ」

悠二はそんなマナトへ近づいていくと

「っ!」

なんとそのマナトを力強く蹴飛ばしたのだ

なんという……今の光景を見て誰が彼らを親友と認めようか

「ムカつくんだよ……!のうのと戦いに自分から巻き込まれやがって!」

彼は幾度となくマナトを蹴る

気絶していた彼は当然痛がる様子はなかったわけだがそれが余計に悠二を苛立たせた

「くそ！くそ！なんだよ！俺なんか！俺なんかなあ！！」

蹴る度に力が強まっっていく

だがここで

「止めて！！」

「ぐはぁ！？」

ようやく追い付いてきた来奈達

その一人の内の来奈が悠二を突き飛ばして止めた

「この！！何しやがる！！」

「それはこっちの台詞です！！兄さんをこんなにして・・・許しま

せん！」

滅多に怒らない愛華も今までにないくらい激怒していた

兄があんな目に遭わされては当然だと思う

「・・・俺だつてそいつが憎いよ・・・何の考えもなしに戦いに身を投げ込んだそいつが！！」

「あつ！こら待て！」

悠二は来奈達に理解できない怒りを見せると巻いていたファイズギアを地面に叩き付けるように捨て誰にも追いつけないような逃げ足で去っていった

そしてそのファイズギアは光りに包まれてカードとなると ブツカ  
ーへと舞い戻っていた

利央の静止も虚しく届かず仕舞いに終わる



「兄さん！兄さん！！目を開けて下さい！」

憎い相手がいなくなって愛華にとってはもう兄の事しか頭になかった

声が枯れるほど兄を呼び意識を覚醒させようと努めてはみるもの  
まるで効果なし・・・

一向に起きる気配はなかった

「大丈夫・・・まだ息があるな、急いで病院に運ぼう」

\*\*\*\*\*

そこは真っ白な色で支配された水平線も見えない空間

ここどこだ……？

いや、前に見たようなの？

俺は確か……

そつだ……！悠二の野郎にやられて！

生きてんのかな俺……

静寂すぎるその場でマナトはたそがれる

ただポーツとしていた

もう考えることすら面倒になってきた・・・

なんか何もかもがどうでもいいような・・・

『破壊したいか？』

なにもしないでいると耳元にそんな声がした

でもマナトは驚かない

何故ならその声は

・・・

「前にも会ったな」

この真っ白な空間、そして今後ろに立っていた人影・・・いや言い直さなければならぬ

『ダイヤモンド』だ

自分とは違う見たただけで邪悪なオーラを醸し出し姿まで酷似した『ダイヤモンド』はそこに立っていた

『もう一度聞く、その「力」で破壊したくないか?』

破壊・・・?

「・・・破壊してどうなるんだよ?」

そもそも俺が何を破壊したいのかもはっきりしていないのにそんなこと聞かれても困る

『どうしてもよくなったのだろうか?だったらいっそ「全てを破壊」したくないか?』

「全てを破壊!?!」

『そうだ、日常も関係も人も！・・・そうすれば天地がひっくり返ったみたいに気持ちになる、この馬鹿みたいな戦いからも抜け出せる』

ちよ、ちよっと待ってっ！

確かにどうでもよくとは思いかけたけど別にそれを破壊したいとはこれっぽっちも思わねえよ

皆に迷惑かけるレベルじゃすまされないっ！

『本当にそうか？』

「え？」

『なにかもが壊れてなくなればお前を邪魔するものはいなくなり自由になれる、だから迷惑も何も無い』

なんだよ・・・それ

『どうでもいいと思いはじめたのはお前の方からだ、俺はただそれに

乗っかって最良の提案をしたに過ぎない』

それが最良の案？

なにもかも壊してなくしてしまうことが？

『なにも無くなるって事はだ・・・不安な要素も全部吹き飛ぶんだよ、悲しみも憎しみも・・・都合が悪いことは全部消えてなくなるってことだ！分かるか？嫌な事全て忘れた時の快感・・・堪らないぞ？』

悲しみも憎しみも消える・・・？

『喜びも楽しい事も消えるがな』

喜びも楽しい事も・・・

『だが、そんな事は快感で忘れる事ができる、損なんてない・・・

お前のその苦しい気持ちを一瞬で擦じ伏せれるんだぞ？どうだ？破壊したくなっただか？』

破壊・・・破壊・・・

このもどかしい感じ

楽でも苦しくもないこの感じ

何もかもがどうでもよくなってくる感じ

幾多の感覚がマナトの自我を支配していき蝕んでいく

いや、これは蝕んでいると行っていいのだろうか？

むしろ気持ちが楽になっていくこの感じ・・・

とても蝕まれてるとは思えない

だったらコイツの言う通り・・・



『.~.-』

違じ.....!

.

違う・・・ロイツの言う通りにしていけない

そんなことすれば父さんも母さんも利央も愛華も来奈も・・・悠二も消えてしまう

そんなの出来るわけねえじゃねえか・・・！

でもなんでそんなこと乗っかろうとしたんだ俺・・・

なんでどうでもいいなんて・・・

『いいのか？お前は苦しいままだぞ？』

「苦しいも何もねえよ、生きてりゃ楽しい事がある、当然辛い思いもする、そんな当たり前の事から目なんか背けられねえよ」「

『お前は楽になるつもりはないのか？』

「くぐりー！ー！」

『！？』

マナトは叫ぶと同時にダイヤモンドライバーをダイヤモンドに突きつけた

その状態のまま彼は述べ続ける

「いいか？この世にはな、生涯苦しい思いしかなければ天国のような楽園で遊んでいる奴もいる、大体後者は滅多な事で悲惨な目に遭わないから浮かれてる奴がごまんといえるんだ、俺はそういう軽くて薄っぺらい人間になりたくねえよ」

『ふん、それがお前の言い分か、哀れな選択だな』

そしてダイヤモンドもダイヤモンドライバーらしきものを構えた

「そついや前は何も抵抗できずにやられたみたいだったけど今回はそうはいかねえぞ・・・お前が何なのか化けの皮剥がしてやるぜ！変身ー！」

【KAMEN  
RIDE】

【DIAND】

『俺の考えを否定するということは俺の存在を否定したも同然・・・俺を認められないというのなら・・・破壊してやる！この手で！』

「言ってる！俺は屈したりなんかしない！」

「『ウオオオオオオ！！』」

二体のダイヤモンドがぶつかり合った

互いの言い分を揃えて・・・

\*\*\*\*\*

くそ・・・！くそ！！

なんでこんな事しなけりゃいけねえんだ!?

なんで戦わなきゃいけねえんだ!!

「くそ!!」

悠二はいても立ってもいられず腹が立ち側にあつた破損しかかつているビルケースを蹴り飛ばして八つ当たりした

その後も悠二のイライラは止まらず頭をクシャクシャにもがきだす

だがそれも長くは続けない

手の動きがピタリと止まり今度は力が抜けたかのようにへナへナと地面に座り込んだ

「俺が何したってんだよお・・・」

彼はもう泣きそうになっていた

単に悲しいという感情だけでなく色々なものが悠二の中で循環していきそれが彼を良くない方向へと震い出させる

「俺は普通に暮らしたいだけなんだ・・・生きたいだけなんだよ・・・」

ついには腕の中に顔を埋め込ませてしまった

その光景はまるで苛められた後の子供が孤独で堪えているような

そんな感じである

そんな悠二の前に一人の人物が現れた

悠二はその人物に気づき顔を上げる

「こんなところで何してますの？」

現れたのは日傘を開いて持ったスカートが長めで頭にはインテリ  
アな小さい帽子が乗っておりスラリとしたスレンダーな体系をもった  
女性だった

一言で言つと優雅なお嬢様のような雰囲気である

「『B』<sup>バラン</sup>風情が・・・なにしにきた・・・」

「まあ怖いですわね、貴方との通信が繋がらないと報告が出ていた  
ので『SS』<sup>サードステージ</sup>様から直々に命じられてこうして出迎えたというのに  
・・・もう少しレディに優しく接してくれませんか？」

「はっ！あのクソ親父が？冗談じゃない、俺は帰らない！」

悠二は頑固として座ったままその場を動かないようにした

引っ張れられてもびくともしないほどに



「困りますわ・・・SS様も、もちろん私自身も心配しているので  
すよ」

「嘘つけ、お前は前に権利目当てで俺を暗殺しようとしてたじゃね  
えか」

「あら、心外ですわね、何度も言ってるようにあの時からワタクシ  
は変わりましたわ、いい加減に見直してくださいまし」

「お前からの口だと何もかもが信用できねえんだよ！それともう一  
回言うけど絶っつ対帰らないからな、アイツは俺自身の心配じゃな  
くて俺の『戦闘兵器』としての心配してんだからよ」

悠二の言葉にBと呼ばれた女性は少し顔をしかめた

「まあ！？なんて酷い！実の親になんてこと・・・」

「うつせえ！！あんな奴親でもなんでもねえ！！お前も俺の目の前  
から消え失せろ！でないとぶっ飛ばすぞ！」

悠二はスクツと開き直ったように立ち上がり「Bバラ」と呼んだ女性を  
錯乱気味に罵声を浴びせる

その対応としてBは

「・・・分かりました、今日は帰らせてもらいます、ですがいいで  
すこと？貴方の居場所はあそこしかないという事を忘れてはなりま  
せん」

「もういいからとっとと帰れ！黙って帰れ！！」

「・・・」

彼女はそれだけ言うと悠二に言われた通り振り返って来た道を帰っ  
ていく

悠二はそれを当然の如く見送りもせずまた力ぬけで座り込んだ

「俺に居場所なんてあるわけないだろ・・・」

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

【FINAL ATTACK RIDE】  
【FINAL ATTACK RIDE】

ダイヤモンド達はカードを入れる

一方の音声は何も思わないけどもう一方は苦しく濁ったらしい音声・

聞いただけでも不吉な事が起こりそうだった

「ぶっばなす前に聞きたいことがある」

『?』

構えに入ろうとしていた偽ダイヤモンドがダイヤモンドのその言葉に動きを止めた

『なんだ?』

「どうして否定しただけで俺を殺そうとするんだ?お前は俺のなんだ?」

それを聞いた偽ディАндはハツと鼻で笑ってみせた

つまらない質問するな、そんな感じだ

『今更聞いてどうする？聞いても何も変わらないぞ、それと言っておくが俺はどう言われようがお前を破壊する、言葉を交えるなど・  
・今の俺には無意味だ！』

【DI・DI・DI・DIAND】

「・・・そうか、でも俺だってやられるわけにはいかねんだ・・・  
死にたくないからよ！」

【DI・DI・DI・DIAND】

勢いつけてあのダイヤモンドに全力でぶつかっていった

「っ！」

\*\*\*\*\*

『はああっっ！』

「っ！っ！っ！」

でもなんだ？

全然手応えが感じられない

それにしても・・・

「どこどこだ？」

さっきの白い空間ではなくマナトは病院らしき個室におり完備されているベッドに横たわっていた

「アイツは・・・」

あのディアンドもない

まさかまた夢だったのか？

自分の体を見てみると変身は解けており腕には包帯、頬にはガーゼが施されていた

だとすればあれはやっぱり夢だったのか

この傷も悠二に・・・

あれこそ夢であってほしい

親友が自分を殴るなんて・・・

「兄さん!!」

「うおっ!?!愛華!?!」

悠二の事を考えていると来奈、愛華、利央が部屋に入ってきた

その内の愛華はマナトを見るやいなや泣きながらマナトに抱きついてきた



「兄さん！兄さんが起きてるです！！」

「おいおい！愛華ちょっと！？痛いって！」

「あー！ごめんなさいです！」

マナトは愛華以外にも二人に顔を向ける

来奈も利央もホツと安堵の息を漏らしたかのような顔をしていた

この様子だとだいぶ心配かけたみたいだな

「俺どうなったんだ？」

「悠二に相当痛め付けられたからね、数日間眠りっぱなしだったの」

「そうだったのか、アイツは・・・っているわけないよな」

『自分が知っているアイツ』ならこういうのは必ずいるはずなんだがな……でもあの後だと……ね

「私はあの人を許さないです！兄さんをこんなにして！」

珍しく妹が本気で怒ってる

うん、愛華の気持ちも分かる

俺の場合は何も教えてもらえなかったことだがそれでも悠二に怒りの矛先を向けているのは同じだ

来奈も利央もそれは同じはずだ

「悠二はあの後どうしたんだ？」

「それが……」

利央の顔が一瞬曇った表情をしたように見えた

来奈も困った様子だし愛華にいたってはまだ怒っている

そんな中、一番口が切り開きやすかった来奈が言った

「悠二は・・・行方不明になったよ」

「行方不明!？」

行方不明

それは言い換えれば失踪とも言える

「学校でもあの日以来、ずっと欠席で気になって家に行っても本人はおるか、親もいなかったの、まるでもぬけの殻になって・・・」

それを聞くと悠二が何者なのかがますます怪しくなった

いや、でも彼は高校だけでなく小学校からずっと一緒だ

今までそんな素性を見せる素振りさえなかった

・・・待てよ、

よく考えて振り返ってみれば悠二の親に会うことがあっただろうか？

515

彼とは長い付き合いだ、でも違和感が一つだけあり遊びとかで悠二の家によく行くことあったけどアイツの両親には一度も会った事になかった

さらにマナトは悠二のあの言葉も思い出した

『「アイツ」に逆らうのも面白いものか・・・』

『アイツ』って一体誰の事言ってたんだろう？

それに逆らうって・・・

「まさか悠二はイルズ以外にも敵対してる相手がいるのか・・・？」

真っ先にそれが思い付いてしまった

他にも事情がある気はするが悠二の発言からしてこれが可能性であるならば一番高いはず

けどまだわからないことがある

「村井も相当井上を恨んでるみたいだったな、あれなんでだ？」

そう、心の隅に置いていた一番の疑問点がそれだ

「去り際に兄さんが憎いとは言ってたです、でもその理由は・・・」

「意味深だね、『何も考えずに戦いに身を投げ込んだ』って言うたね」

「え・・・？」

悠二がこの発言をしたのはマナトを気絶させた後の事だった

彼にその言葉の意味は読み取れない

「（悠二・・・お前の考えが全然見えねえよ、せめて事情だけでも聞かせてくれりゃ・・・）」

しばらく四人の間に沈黙が続いた

だが

「！」

利央のポケットにしまつてあつたイルズ専用のリーダーが静かになつた、それすなわち

「こんな時にイルズ!? しかもこの場所って……」

「どうしたの利央!?!」

利央がイルズが出没したことを伝えようとしたとき

「うわあああ!?!?!」

「きゃあああ!?!?!」

どこか遠い所から男性と女性が入れ混ざった悲鳴が聞こえてくる

しかもこの悲鳴、一人や二人という規模ではなくかなりの大人数の悲鳴だ

「おい利央！場所はどこだって！？」

マナトが突っかかるようにいい迫り利央はそれに冷静に答えた

「学校だよ、井上達が通ってる『赤ヶ龍高等学校』だ」

「！」「！」「！」

マナトはそれを聞くと棚の中に戻ってしまったディアンドライバーとブッカーを持ち出し部屋から飛び出そうとした

「ちょっとまってマナト！怪我治ってないよ！そんな体で戦いに行ったら！」



「どいてくれ来奈！無理するのは承知だ！けどこのまま大人しくしてられねえ！」

「ここは警察に任せた方がいいです！」

「警察に任せられねえだろ！？イルズがなんなのか分かっていつてるのか！？」

「それは・・・」

マナトが怒鳴るように叫ぶと二人は黙ってしまい、また言うことが出来なかった

マナトは気を取り直して部屋から出ようとする

「さて井上！」

「・・・何言っても行くからな」

「そうじゃない、僕も行く、僕とお前はコンビだからな」

「サンキュー、助かる」

そうして二人は外に待機させてあったディアンダーにマナトは通常座席、利央は後部座席っぽい所に跨がりエンジンを吹かして全速力で赤ヶ龍高等学校へと向かった

#11 S(ストライカー)(後書き)

ついにお気に入りに入り件数が0/(。。( ) /

になりました！

いやあここまでなると清々しいですね(泣)

まあ多分原因は更新が遅れたからだと思います

ストーリーが安直というのもありますが自分はリミットブレイクで  
きずです(この構成が限界ということですよ)

でもまだ序章にしか過ぎませんからまだまだ書きますよ！

強化フォームや最強フォームだって出てないのに・・・

うん、いつか人気でると信じて頑張ろう

それしかない！

せんとお……！

（オ……！……！）

………

#12 生・存・願・望（前書き）

『Giant Step』

歌：伊上利央×坂白マナト

#12 生・存・願・望

ものの三分ほどで赤ヶ龍高等学校につくとそこにはあまりにも悲惨な光景になっていた

生徒の大勢は校舎から我が先にと必死に逃げ惑っており、その校舎からは部分的にはあったが半壊して黒煙が立ち上っている

「もうこんなに被害が・・・!？」

「行こう井上、まだイルズが校舎内にいるかもしれない・・・っと忘れるところだった、これを渡しておく」

「これは？」

利央から小型の電子機器を受け取った

ポケベルのような形をしている

「簡易式通信機だ、手分けしてイルズを探して発見したら連絡して

くれ、ひとりで倒そうとはせずにできるだけ牽制するんだぞ」

「分かった、ありがとな」

「礼は終わってからだろ？」

やり取りを終えるとマナトは逃げていく生徒の反対方向に走って北側の玄関から校舎へと入り、利央は外を回り込んで網目のフェンスを飛び越え南側の裏口から校舎へと入っていった

\*\*\*\*\*

「誰か！誰かいないか！いたら返事してくれ！」

イルズを見つけ出す前にまずは人がいないか確認せねばなるまい

まだ逃げ遅れた生徒がいるかもしれない

マナトは大声で叫びながら半壊した校舎内を進んでいく

「誰か！いないのか！？」

だが一向に返事がない

もしかしたらもう全員逃げ切ったのか

それが一番いいのだが



「ん？」

探しているとかすかな物音が聞こえた

少し立ち止まり耳を澄ましてみるとその音がより鮮明に聞こえてくる  
なんか鉄筋同士を叩きつけているような感じの悪い音だ

「！？誰かそこにいるのか！？」

物音がしたのは少し離れてあったところの「第二科学室」とプレートの記された部屋からだった

マナトが近づくとつれだんだんその音は鈍くなって聞こえてくる

さっきとは違いグシャ、グシャと生々しい音に聞こえてきた

想像はしたくないが・・・

もしかすると人ではなくイルズの可能性もある

マナトはあらかじめ ブッカーを腰に巻きいつでも変身できるようにする

「あれ？」

準備を終えた途端音が止んでしまった

なんだろう・・・あまりに静かすぎて体が震えてきた

その震える体を抑えつつマナトは恐る恐る扉の窓から科学室の中を覗いてみた

そこには

「!?!?!?」

あまりにも悲惨なものを目にしてしまった

それを見るに耐えられずマナトはすぐに顔を引っ込めてしまう

「ぐっ!っ・・・!?!?」

思わず吐きそうにもなり口を瞬時に抑えた

「そんな・・・あんなやり方あるかよ・・・!」

とりあえず一旦落ち着き辺りを再度見渡してみる

あんな殺し方、イルズ以外あり得ない



イルズが現れた

しかも出てくる予想位置は見事に外れてしまってる

イルズはなんと天井を突き破りマナトの頭上から襲撃してきたのだ

しかしマナトはイルズの攻撃をコンマ一秒もないくらい素早い反応で横っ飛び回避したのだ

「やっぱりコイツが殺ったのか」

イルズの右腕を見てみると真っ赤な液体がべっとりとついていた

あれは紛れもなく血だ

あの血は恐らく科学室の・・・

「集中しねえと・・・変身！」

【KAMEN RIDE】

【DIAND】

なんとかかいつもの調子になったところでディアンドに変身しイルズに迎え撃つ

でも無理は禁物だ

ディアンドはさっき利央から渡された通信機を取り出しマイクをオンにする

「イルズ見つけたぞ、それもかなり凶悪な奴だ」

『分かった、僕も校舎から逃げ遅れた人を見つけたから誘導してからそっちに向かう、無理はするな』

「おう、分かってるぜ、言われた通りにやってみせる」

ダイヤモンドは通信機のマイクを切りそれを懐にしまつとダイヤモンドライバーを構えた

言われたとおりの牽制だ

「じゃあ！行くぜ！」

「グルガアア！！！」

\*\*\*\*\*

「くっ……！なんでこんな事に！」

時間はある程度遡って

裏口から侵入した利央はまずイルズがいないか気配で模索した

邪険な気配は感じられない

この一帯にイルズは潜伏してないようだ

念のためレーダーで確認しても反応は薄い方だし



利央は逃げ遅れた人間を保護するのを優先事項に動き始めた

死角となる曲がり角があれば直前の壁に張り付きイルズがいないか  
確認しながら進んでいく

・・・現在の位置はF3

未だにイルズの気配がない

だがなんだ？

物音がする

かすかではあるがこれは何かを擦っているような音だな

かなり小さめで神経を研ぎ澄ませないと聞き逃すところだった

とりあえず利央は物音がするほうへと慎重且つ素早い忍び足で音一  
つたてることなく向かっていく

物音は・・・この「2年1組」とプレートに書かれた教室から聞こえていた

「（ここは確か・・・井上と森と村井のクラスだったな）」

窓から確認して誰もいないことを確認するとイルズに備えハンドガンを手に握りしめておき教室の中へとゆっくり入った

物音は教室の後ろのロッカーと掃除用具入れから聞こえてくる

逃げ遅れた人間か、それとも敵であるイルズか、どちらしかない

「（まずは開きやすそうなあれからだな）」

利央が目につけたのは比較的開けやすそうな掃除用具入れだった

それにハンドガンを構えながらゆっくりと接近していき目の前に立つと片方のハンドガンをホルダーにしまいその空いた手で扉の取っ手に手をかける

中にいるのが人間かイルズか

後者ならば徹底的に撃ち抜いてやる!!

「ひいいい!!!!助けて!!!!」

中にいたのは冷や汗と思われるものを滝の量ほど流しており目を瞑  
って思いつきり怯えたっていた男子生徒だった

ん？股下だけ特に濡れているような・・・

「……あれ？痛くない？へ？なんでこんなところに子供がいるんだ？」

男子生徒はイルズでないことを確認すると目の前に……というか自分の腰までしか身長がない利央を見下げた

「僕は子供じゃないぞ、これでも20歳だ、それでもってSPだ、逃げ遅れたお前を保護しに来た」

「え、SP？こんな子供が？……いやこの際どうだっていい！早く逃げないと怪物が！」

男子生徒はもう今にも逃げたそうぞそわそわしていた

だがそんな慌てても急に助かるわけでもない

「とりあえず落ち着け、お前以外にも逃げ遅れた人は？」

「え？あ、それならそこに……」

指刺された方を見るとそこはさっき物音がしていたロッカーだった

利央はそのロッカーを開けていく

「し、死にたくねえよおおお!!!!」

「いやああああ!!」

「もう……ここまでなのね」

「怪物があ……怪物があ!!」

ロッカーの中には男子生徒二名と女子生徒二名が隠れていた

同じようなりアクションされたが状況が状況だけあって仕方がない

\*\*\*\*\*

「じゃあもういないんだな？」

「うん、まあ……」

ようやく利央があだめた結果、全員大人しくなってくれたみたいだ  
彼らの話によると逃げている最中にイルズと鉢合わせしてしまった  
が運よくこの教室に隠れることが出来たためやり過ぎせたらしい

そして……人の悲鳴も聞こえたそうだ  
隠れている中でその悲鳴を聞いて自分も死に追いやられるんじゃない  
かと思ったことだろう

逃げ遅れた人間の中でもうこの者達しか生存してない

これ以上死に人を増やすわけにもいかない

早急に脱出するぞ！

(ジュジュジュン)

「ん？井上からか」

いざ脱出しようとしたとき持っていた通信機からマナトの受信が入った

マイクをオンにして向こうの内容を聞き取る

『イルズ見つけたぞ、それもかなり凶悪な奴だ』

「分かった、僕も校舎から逃げ遅れた人を見つけたから誘導してからそっちに向かう、無理はするな」

『おう、分かってるぜ、言われた通りにやってみせる』

手っ取り早いやり取りを終えるとマナトから通信を途絶えさせた

向こうではイルズと対面したのか

なら尚更急がなくては！

「今の声……ひょっとして坂白君？」

「言われてみれば確かにマナトだったような……」

今の通信から聞こえた声に女子生徒が反応した

そうか……この人達も井上と同じクラスだったのか



「なあ、SPRさんよ、今のって坂白なのか？」

今度は男子生徒が利央に質問してきた

「・・・」

本来ならここはアイツがダイヤモンドというため誤魔化さなければならぬ

でもこんな状況となつては隠しても意味がないと思う

あとあと聞かれるんだ

なら今は肯定した方がいいはず

「ああ・・・アイツは怪物と戦つてる、皆を守るために・・・」

\*\*\*\*\*

「ぜやああー！」

「グルウ！」

一方そんなディアンドはイルズに対し牽制ばかりで利央が援護に来るまで粘り続けていた

あと少し、あと少し！一刻も早く来てくれる事を願って！

「グル！グウルア！」

「のわあああ！？」

だがイルズの猛攻は勢いを増すばかり

このままではやられてしまう

そんな事を考えているといつの間にかイルズは自分の肩をガツチリと掴み廊下の両サイドの壁に交互に何度も叩き付ける

「ぐっ！っ！？」

その度にコンクリートで出来た壁にも関わらず大きな穴ができていった

何度かやられると床に放り投げられた

「くそ……！傷が疼きやがる！」

数日たったとはいえまだ治っていない悠二につけられた傷口から痛みが襲ってきた

さらにイルズから受けたダメージもあって牽制みたいな攻撃でも力が入らなくなってしまうていた

それでも容赦なくイルズの攻撃は緩むことはない

「うおっ！？この！離せ！」

倒れたディアンドを軽く拾い上げ再度肩を掴むとそのままの姿勢で壁に挟り込ませた

「グウウ……グワアアア！！！」

そして壁の中に挟り込ませたままイルズはさらに押していきついに分厚かった壁に穴が開き教室へと入ってしまったではないか

それで止まるならまだ良かったが・・・

「このお野郎お！離せ！離しやがれ！」

ディアンドの言葉など無視して同じように壁に穴が開くほどの力で叩き付け、教室、そのまた隣の教室・・・とどんどん壁に穴を開け校舎を闊歩しながら着実にダメージを負わされていく

「・・・」

あまりにも大きなダメージを喰らっているせいかもうディアンドには意識がないように見えた

それを確認するとイルズは足を止め、別方向の壁へと勢いよく投げつけた

\*\*\*\*\*

「急げ！」

利央達は必死に走って玄関を目指していた

「もうすぐだ！みんな頑張れ！」

F2から最後の階段を降りようとしたその時

「うわあああ！？」

なんと壁がひとりでに壊れ降りようとしていた階段がその瓦礫で行き止まりになってしまった

しかもその側には

「井上!?!」

ぐったりとなったダイヤモンドが横たわっていた

「そんな・・・!」

さらに壊れて穴が開いた壁の先を見るとこの騒ぎの元凶のイルズがこちらに向かってきたのだ

「うわあああああああ!?!?!?!?怪物だあああ!?!?!」

「くっ!」

なんとかしないと意思いつきハンドガンでイルズをぶっばなす

少しは怯んだがやはりこれでは決定的なダメージは与えられない

何か策はないかと考えていると

「悪い・・・こんなボコボコにやられてよ」

「井上！」

気絶寸前だったダイヤモンドが利央の腕を引っ張りなんとか立ち上がり皆を見据える

「逃げ遅れたのはお前らだったのか、利央ありがとな、コイツら守ってくれて」



「その声……やっぱり坂白君なの!？」

「ああ、まあこれはいろいろあつてだな……それより利央、アイツをなんとかする手はないか？」

ダイヤモンドはイルズを睨み付けながら利央に策を要求してきた

その答えとして利央は

「ここだと場所が悪い、せめてグラウンドみたいな広い場所なら持ち込めるかもしれない」

「OK!グラウンドに出せばいいんだな!」

それを聞きダイヤモンドはダイヤモンドライバーを左手に持ち換え右手でブッカーからカードを引き抜いた

【ATTACK RIDE】  
【ROCKET MODULE】

ダイヤモンドは自身の右手をマテリアライズさせていき完全に物質化したオレンジ色のロケットモジュールを燃やして超速でイルズに進んでいく

「ぬおりやつ！」

「グオツ!？」

突進したところでダイヤモンドライバーをイルズの顎に引っかけロケットモジュールの向きを天に向けて天井を突き破りながら共に校舎から抜け出した

\*\*\*\*\*

空中に放り出されたイルズはもがくが姿勢制御すらままならず

そこにダイヤモンドが迫り来る

【ATTACK RIDE】  
【DRILL MODULE】

さつきと同様に左足をマテリアライズさせ黄色のドリルモジュールを物質化させると続けてカードを装填

「くたばっちまえ!!」

【FINAL ATTACK RIDE】  
【FO - FO - FO - FOURZE】

「ロケットドリルキーク!!!」

右手のロケットは先ほどの噴射力とは比較にならないほど燃え上がり左足のドリルも凄い勢いで回転し出した

それらを一齐にイルズに向けかなりの速度で突進していく

これを喰らえば一たまりもない

「ぬわあああ!!!」

「グウウウウ!!!」

だがイルズも往生際が悪く、両腕を盾にしてなんとか持ちこたえている

「しづといな・・・!」

「ゲウルワァ!」

「なっ!？」

つばぜり合いの状態が長く続いていたがダイヤモンドがイルズを貫く前に行動に出た

なんと一瞬の間際に左片手防御に切り替えて空いた右手でダイヤモンドのドリルモジュールを叩いてそらしてしまったのだ

「うおおあああ!？」

その拍子に彼はバランスを大きく崩してしまいイルズ共々、グラウンドに向かって急降下していく

そして

「「！！！！！！」」

思いっきり地面に叩きつけられ両者の足場は大きくへこんでしまっ  
てる

ダイヤモンドに至ってはかなりの大ダメージの事だろう

「いつてえ……」

やばい……今の衝撃で頭がクラクラしてきた

目の前のイルズは同じように打ち付けられたはずなのにピンピンし  
てやがる……

このままじゃ……

「井上！」

精神的な苦戦を強いたげられていると利央がこちらに向かってくる

やばいちょっとボヤけて見えてきた・・・

「無茶して止め刺そうとするな、牽制しろとも言ったしグラウンドに持ち込めるよう言ったただけだぞ！？」

「利央・・・すまねえ・・・」

俺はもう倒れそうだった

時間が経つにつれ徐々に意識が遠退いて行くのがハッキリと分かる

焦って余計な行動に突っ走ったのがこのザマだ

このまま気絶したら俺も利央もクラスの皆も・・・

「井上！しっかりしろ！たった一撃でいい！それまでは倒れるな！」

「なんか・・・策でもあんのか？」

「お前の攻撃を見て分かったんだ、あのイルズは打撃には滅法強い・  
・いくら大きな力を叩き込んでもダメージは与えられないと思う」

「それで・・・？」

利央は一旦間を開けて口を開く

「賭けだ」



「？」

「コイツはいったい何を言ってるんだ？」

「打撃に強いということは特殊系の攻撃には弱いつてパターンがある、私が対面してきた中でもそういうのは時々いたんだ」

「なるほど・・・」

二人が悠長に話していてもイルズは容赦なく二人に攻撃を仕掛けてくる

動きが比較的遅いせい、素早く動き回る利央にはかすりもしない

ダイヤモンドは利央と違って無理に避けようとせず防御一筋に勤しんでいた

「くっ！それで・・・俺にそれやれってか？」

「このイルズがそうとは限らないかも知れないけど他に勝つ方法が見い出せない、・・・僅かな可能性でも試してみる！」

「・・・分かった！」

ディАндロは承諾すると薄れゆく意識の中で懸命に抗い、イルズを突き放す

「僅かな可能性でも・・・ね」

ブッカーからスーツが金色に輝いている仮面が描かれたカードを取り出しディアンドライバーに入れた

もう限界だ・・・

さっさと決めて早く倒れよう

だから・・・利央を信じる！

【ATTACK FORM RIDE】  
【FOURZE ELEK】

「頑固な奴にはこれが一番だ・・・！」

体の周りから大量の電流が発生し、複数の丸い円盤が装着される

さらに全身は金色に変化していき左腕、右足、左腕はノーマルフォーム時と変わっていないが右腕のみ同様にアースベースに変化

ダイヤモンドライバーは左手に持ち直し、仕上げに空いた右手にロッド型モジュール「ビリーザロッド」が装備された

「ダイヤモンド エレキステイツ」

強力な電磁波で敵を蓄電死させることのできる電気属性形態だ

ダイヤモンドはすぐさまビリーザロッドの左側のコンセントにソケットを差し込む

おらにさっきのロケットドリルキックで使ったカード取り出した

【FINAL ATTACK RIDE】  
【FO - FO - FO - FOURNE】

「喰らえ！100億ボルトブレエエイクー！」

ビリーザロッドとディアンドライバーの二刀がイルズに迫る

だが

「グワアアアー！」

「ぐわわわわーおおおおおー！」

その二本が白刃取りされ直撃させることが出来ていない

しかし全くダメージがないわけでもなかった

掴んだ二本から大量の電流がイルズに流れ込み大きくダメージを与えていく

「うわああああー!!」

ダイヤモンドも限界に近い

どちらも瀬戸際だった  
果たして勝つのは……

「(やばい……段々力が入らなくなっていく……!)」

どうやらこのままではダイヤモンドが負けてしまうのは自分でも予測

できてきたらしい

負ける訳にはいかないのに！

「うおおおおおあああッッッ！..！」

くそ・・・これだけ本気で押し付けてるのに！

だめなのか・・・？

そう思った矢先だった

「てやああッ！..！」

「り、利央！？」



やがてイルズは協力な電気攻撃に耐えきれなくなり膝を地面につけてしまう

それとほぼ同時にダイヤモンドも一気に振り抜いた

「はぁ・・・はぁ・・・やった・・・！」

まだ碎け散ってはいないが相手に大ダメージ与えられた事は確信している

それでもって戦闘不能状態だ

しかし次の事で喜びが無くなってしまふ



「クルシイヨ・・・ダレカタスケテ・・・」

「「・・・！」」

それは前にも聞いたイルズの声だった

二人はその事に少したじろぎダイヤモンドに関してはあの日の事が再度浮かび上がってくる

『イキタイ』

まさかあれは幻聴じゃなかったっていつのか？

「クルシイヨ・・・クルシイヨ・・・」

や、やめてくれ！

慈悲を俺に求めんな！

お前らイルズは凶悪な殺人物だ！

そうだけど・・・そうだけでも！

「そんな切ない目で俺を見ないでくれよ・・・」

「クルシ・・・イヨ・・・クル・・・シ・・・」

イルズは体がどんどん石のように硬化していきそれが顔を以外全身に行き渡るとピクリとも動かなくなってしまった

そして

「シニ・・・タク・・・」

何かを言い切る前に顔にも硬化が進み完全に石像となったイルズは粉々に砕け去ってしまった

風が吹き、砂みたいに粉々になったものはそれに飲まれて飛んでいく

「俺は・・・」

「井上！」

ダイヤモンドは意識の限界をとくに越えていたようで気が抜けて利央の呼び掛けにも応じずに気を失ってしまった

『イキタイ』

『クルシイヨ・・・ダレカタステ・・・』

気絶した彼の頭の中でもその声が襲うように過っていく

#12 生・存・願・望（後書き）

今回の戦闘は学校内ということでフォーゼを選びました

我ながら妥当な選択だと思います

それとちよつと遠回しですがグロテスクな表現も入れてみました

仮面ライダーにグロテスク表現入れるのは自分でもどうかと思いましたがイルズ一体だけでも学校が半壊するほどの凶悪なものですから入れておきたかったです

これはこれで良くなったかな？

もうちょい控え目にした方がいいかな・・・？

これで一応もう書くことはないですが

最後に一言言っておきます

仮面ライダーフォーゼの主題歌

『Switch On!』

CD皆さん買いましょう！

発売は11月23日だったと思います

# 13 苦痛な快楽（前編）（前書き）

『果てなき希望』

歌：皇杏斗

# 13 苦痛な快楽（前編）

\*\*\*\*\*

まただ・・・またあの白い空間で俺達は戦っている

『うわあぁっ！！』

「うわあぁっ！！」

それも休まずにだ、当然疲れがたまって・・・あれ？

「（夢なのになんで疲れ感じてるんだよ！？）」

そうだ、これは夢のはずだ

今いる空間だって現実ではとてもではないがあり得ない





『だってよぉ・・・お前は俺を何だと思ってんだ？まさか別人だなんて思ってたねえだろうなぁ？』

「え！？」

『今更トポケ面されても困るぜ・・・俺はな・・・お前なんだよ！』

「！？」

俺だと・・・！？

コイツが俺・・・？

『ああそつだよ、お前だよ！』

「そんな・・・」

目の前にいるコイツが？

違う！こんなやつ俺なんかじゃない！こんな・・・こんな・・・

『・・・そうだよなあ・・・こんな醜い「お前」なんか認めたくないよなあ！！』

そう言ってダイヤモンドは俺に攻撃を加えてきた

混乱気味ではあるがなんとか受け流しを行いその攻撃をやり過ごす

『人は誰だって醜いものをそうやって避けるんだよ、その心も醜いって知らずにな』

そんなの・・・そんなの！！

『皆を守るために自分は二の次って事でこの力を使役してんだっとなあ・・・本当は逆じゃないのか？』

「なに・・・？」

違う・・・違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！

『本当は自分の命最優先で他の奴の事なんてどうでもいいんだろ？』

「なにを証拠にそんな事を！！」

俺はそんな私利私欲な考えじゃないと必死に否定してダイヤモンドに投げ掛ける

証拠まで問いただして

『証拠？証拠なら俺だ、俺の存在自体がそうだ！』

お前・・・？

『何度も言うが俺はお前だ、そしてその俺は自分が可愛くてしょうがないんだ、怖くて怖くて死にたくもない、いつまでもただただ生

『きていたんだよ』

「違う！違う！……来奈達の命がどうでもいいなんて……！」

『守るって行動で自分の名目も磨けて……』

「もう黙ってくれよ……！」

こんな事俺は思ってたんじゃない……！！

【FINAL ATTACK RIDE】  
【DI-DI-DI-DIAND】

そうだ……コイツさえいなくなれば……！！

『俺を消すか？お前である俺を？全くお前は……都合のいい奴だ』



『なんでわかるか？それはな、俺がお前の・・・』

「うじゅあっ！……！」

『本心だからだよ』

\*\*\*\*\*

某日正午

その日は雨が降っていた

とても強くザーザーと降っておりなんとも雨らしい雨だった

そしてここは人一人いない田舎道

その傍らにある廃屋で一人の少年が雨宿りしていた

「あゝあゝ雨凄く降ってきちゃったよ、嫌だなあ」

と言いながらヴァロンドライバーの引き金に指を引っ掛けてクルクル銃身を回していた皇杏斗だった

まだ子供と呼ぶに相応しい中坊だがその正体は快樂殺人者

かなり質の悪い変人である



「さっさと止まないかなあ」

そろそろヴァ Rondライバーを回すのにも飽きて手を止め、ギシギシと腐ったような音がする木製の椅子へと座った

雨は一向に止む気配がない

そればかりか強さもますますばかりだ

「ああ〜！何しようかなあ・・・あ、そうだ、通りすぎた車の人間でも撃ってみよ」

などととても恐ろしい事をさりげなく言う彼は道に向けてヴァロンドライバーの銃口を突きつける

そして今か今かと来るのを待ってその体制を維持し続けた

だが・・・

「こないな・・・」

5分、10分、15分・・・と待ち続けてみたものの一台も車はこの道を通って来ない

それにつれ彼は段々とイライラを募らせていく

「く！！ああもう！！なんで来ないかなあ!？」

そしてついにそのイラつきを爆発させた

が、別段どうということはない

彼の人間性から考えればかなり穏やかに方だと思っ

人は来ないが雨はいつまでも降ってくる

でも彼が来てほしいのは人……

湿ったるい雨なんかじゃない

このモヤモヤを癒してくれるもの……

「あゝあ……」

杏斗はついにだらけ横に倒れていきそのまま上半身だけを椅子に掛けたまま寝そべった

雨のせいで木製の椅子が冷たい

ちょっとひんやりしてて気持ちいいかも

「……」

ところがそんな彼の目の前に

「じゃ〜ん」

「うん？」

椅子の下から・・・というか杏斗の足股から一匹の猫がのそつと出てきた

白い毛並をしており所々黒ブチがかかっているそこから入んにいそつなく一般猫だった

「・・・」

彼はその猫に引き付けられたかのように倒した体をむくり起こす

この猫、よく見ると全体的に埃っぽく毛が少しクシャクシャで薄汚い

その姿から見てこの猫は野良猫なのか、或いは

「これは……」

椅子の下を覗いてみると草が敷き詰められたダンボール箱があった  
さらにその箱には大きさがバラバラな子供がかいたような字で

『ひろってやってください』

と書かれていた

それを見た杏斗は

「ハハツ……まさかお前も『捨てられた』のか？」

「にゃん……」

その猫は悲しそうに返事のような鳴き声をした

人の言葉が分かっているあたりなかなか賢そうだ

そんな考えが杏斗の頭によぎると彼は

「捨てられたなら生きる価値ないね、せめて僕の鬱憤ばらしに役立ってもらえるかな・・・？」

なんと彼はヴァロンドライバーをその猫の頭に突きつけたのだ

そう、こんな行動を実行して彼のやることは一つ、

この猫を殺して少しでもこのイライラとモヤモヤを取り除くこと

でも相手は猫、自分と同じ人間じゃないときつと全ては取り除けない

「ただでじゃない・・・ちよつとした余興を楽しむか」

彼は恐れあまり気が狂ってしまう人間、あるいは命乞いする人間・  
・そんな人種が死んでいく姿を見るのが大好きだった

だからまずこの猫にも恐怖というものを与えてやることにした

杏斗は突きつけたヴァロンドライバーとは別のもう片方のヴァロン  
ドライバーを取り出しそれを天井へと銃口を向けた

そして

・・・その場に一発の銃声が鳴り響いた

例え強い雨の中の轟音でもそれははっきりと聞こえる

「へへ・・・どうよ?」

その木製の天井にはぽっかりと少々荒い穴が開けられたのだ

その隙間からは降りしきる雨が漏れて彼の頭上にシャワーのように

降り注ぐが一向に構わない

今は目の前の猫に夢中だったのだ

「じゃ〜ん」

しかしそれは無駄弾となってしまうた

なんと猫は驚きもせず引きもせず依然としてそこに佇んでいたのだ  
それどころか恐れを知らないというのか自身に向けられたヴァロン  
ドライバーの銃口をまるで猫じゃらしのように前足で弄んでいた

「~~~~ツ!~!~!」

それを見た杏斗はヴァロンドライバーを思わず力強く握り出し仕舞  
いには震えてさえきた

そして彼がとつた行動は



「く！ああっもう！やっぱお前撃つの止めた！何も面白くない！！」

杏斗はヤケクソ気味にヴァロンドライバーを乱暴にホルダーの中へ  
ねじ込んだ

「お前なんかどっか行ってしまえ！」

死という恐怖に泣きじゃくるあの姿、必死に命を救うように求める  
あの姿・・・それがたまらない・・・

でもこの猫はその双方とも違う生物に過ぎないよ

だったら生きる価値もなければ殺す価値もない

ただの目障りな存在だった

だから銃を構える気力さえなくなった

そんな閑散な空気化した中、それを打ち破るかのように杏斗が持っていたタッチパネル式の端末がブルルと音が目立つほど震え彼はそれを手にとりディスプレイの受話器マークをタッチしてうんざりするように耳に当てた

「はぁ・・・またか・・・もしもし」

『お前にうんざりされる暇は無いんだがな』

端末から聞こえてくるのは中年男性による渋い声だった

その男性も杏斗とは別の意味でうんざりしてそうな感じだ

「んで、今度は何？」

『いつもと同じだ、途中経過の報告をしろ』

「また？一体どれだけすればいいの？」

『まだまだヴァロンドライバーの出力が安定しないからな、出来るまで細かく分析する必要がある』

「ええ……もう飽きたよ……これ楽しいからすぐにでも貰いたいのに……」

そう言つて杏斗はヴァロンドライバーをもう一度手にし、それに目を輝かした

「ならば『契約』を破棄すると見ていいのか？」

それを聞いた瞬間杏斗は手の平を返したかのように慌てふためき

「そ、そんなこと言ってないぞ！勝手な解釈はやめてよ！」

『険悪そうに発言するからだ、だがこちら側としてはそうなるって問題は無い・・・お前の身は保証出来ないがな』

たかが電話だ

口だけでこの杏斗に恐怖を与えるのは不可能に等しいはずだった

なのに・・・

「わ、分かったよ！報告すればいいんでしょ！」

『最初からそうすればいい話だ、時間を取らせるな』

杏斗は胸のポケットから今使っている端末とは違うメモリー用のタッチパネル型の端末を取り出した

それを操作しそこに書かれたことを坦々と喋り始める

「現在までの通算変身回数は27回、戦果は25戦24勝1分、変身して戦ってない2回分は試しとして使用、ヴァロンドライバーの損傷は今のところ見られない」

と、ここで気になる報告が耳に引っかかった

『待て、ヴァロンドになったのにも関わらず引き分けになったというのか』

「実はこの戦いだけイルズじゃないんだ」

『ということはまさか・・・ディアンドか!?!』

「うん、あの変身体はどうみてもね、さすがに一筋縄では行かなかったよ、深手を負う前にあの場を離れて正解だった」

『ふむ・・・そうか・・・できればディアンドライバーも獲得しておきたいがそちらは必須事項ではないからしなくていい、今はヴァロンドだ、今までと同じように人を殺害して報告を続ける』

「あーよ」

杏斗は了解すると通信を切れ一息ついてみる

「毎回毎回嫌になるなあ・・・」

でもやらなきゃ貰えないよね

こないいいおもちゃ

なかなかないよ

「じゃーん」

耽っているときさっき足払ったはずの猫が彼の足側でこちらを見上げ据えていた

あれだけ叫び気味に暴言吐かれたら大抵の猫は驚いて逃げるはずなのだが……

「まだいたの……もうやめてよね……」

通信相手にもうんざりした

目の前の猫にだってうんざりした

もううんざりなんかしたくない

してやるもんか

杏斗は腰を上げて廃屋から出ていく

というのもいつの間にか雨が上がっており日が差していた

まだ所々水溜まりはあるものの、十分歩けるほどの天気だ

少なからず気持ちよく歩けるだろう

さっきの鬱憤を晴らしたいのか、彼は水溜まりをスキップでリズムよくかわしていきそれに合わせ歌も歌う

「　今　ひとりひとり胸の中　目を醒ませThe　time　to  
o　go　強くあるために」

機嫌はよくなったよ

でもね、

「じゃーん」

なんで後ろからあの猫が付いてくるかなあゝ・・・！

「そんなに死にたいのかなあ！君は！」

もういい！

殺す気なんてなかったけどいい加減目障りを通り越して邪魔に思えてきた



ヴァロンドライバーを手に取り、振り返って撃とうとした

ってあれ？

「あれ！？ない！？」

あれ？あれ！？  
ヴァロンドライバーが・・・ない！？

「にゃ～にゃ～」

慌てふためいていると猫が杏斗のズボンをくわえて引っ張ろうとしていた

「な、なに？」

「にゃ〜」

猫は杏斗が自身に気づくとさっき休憩を取っていた廃屋へと入っていった

なんだ？とやや混乱気味の彼であったがその疑問はあっけなく吹っ飛んでしまっ

「ふがあ〜ふがあ〜！」

「！」

なんとその猫が再び出てきたかと思えばホルダーに収められたヴァロンドライバーをくわえて力強く引きずって出てきたではないか

「お前……！」

「にゃ〜にゃ〜」

あれはおそらく「早く取りにおいで」とでも言ってるのだろうか  
とりあえずその場までヴァロンドライバーを取りに行った

「危づく無くすところだった・・・」

無くしたらなんて言われるかわかったもんじゃない

いや『何されるか』か・・・

・・・それにしてもこの猫利口だな

わざわざ忘れ物を知らせに付いてくるなんて・・・

「じゃあ」

「・・・」

猫はその場で杏斗を見上げていた

でも鳴き方がなんかさっきより弱々しいそうだな

まさかお腹を空かしているのか

そういえばそろそろ昼になるな

僕もお腹が空いてきた

この猫は・・・

「・・・なんか食べたいものでもある？」

「じゃー..」

杏斗の発言に猫は嬉しそうに鳴く

全ての基本は食とはよく言ったものだ

「えっと・・・」

そういえばさっき昼食用にコンビニで買った弁当があったな

本当はわざわざお金出さずにコンビニの店員全員殺してかつさらえば良かったんだけど、『命令』で日が明るい内と公の場所ではないようにされてる

嫌な制限だけどこれもヴァロンドライバー貰うためだ！

とりあえず杏斗達はさっきの廃屋に戻り再度座ってナイロン袋に入った弁当を取り出した

蓋は開けて地面に置きその上に唐揚げ1個とご飯を少々盛り付ける

これは猫の分だ

この猫が普段なに食べてるかは分からないがとりあえず体系的にこの量で満腹になるはず

残った分はもちろん全て杏斗のもの

杏斗達はいただきますも言わずに弁当にがつついていく

ものの2分と行ったところだろうか

あっという間に杏斗は平らげた

猫はというとまだ勢いよく唐揚げを食らっていた

小さな口なので時間がかかっているのだろう

「お前なんで捨てられたんだろうな、こんなにも賢いのに・・・」

「じゃあ・・・」

この猫は大事にされてきたはずだ

なぜならばあのメッセージが書かれたダンボール箱、しかもくつろげられるように丁寧に草が敷き詰められていたからだ

ということはこの猫は無惨に捨てられたわけではなく何かやむを得ない事情ですてられたのではないのだろうか

例えば養っていくだけの経済力に余裕が無くなったからとか

そうしたらもし自分が同じ立場なら・・・

「・・・って僕なら世話するしない以前に飼わないか、めんどくさいし」

僕は僕だけでいい

後には必要ない

誰も・・・信じてやるものか！

と、そうこうしている内に猫はいつの間にか綺麗に食べ終えており  
ご満悦な様子だった

ふう・・・これでお腹は落ち着いたね

後は・・・

「よしっと、まだ明るいいし時間潰しに歩くか」

「じゃー！」

「お前は来なくていいよ」

「じゃ〜・・・」

捨てられたなら捨てられたなりにそこで暮らしてくたばっていけばいいわ

僕には関係ない

・・・はずだった

\*\*\*\*\*

「なんでこうなった・・・」

「・・・こんなはずじゃないのに・・・」

今どついう状況かというと公道を歩いており単純に述べると杏斗の



肩に猫が乗っかっていたのだ

なんでこうなったか経緯を教えよう

あの廃屋から出て目的地も決めずただただ公道に沿って歩いていたりあえずは人を撃てれるようになる夜までの時間を潰すため

要するに気まぐれだ

そこまでは良かった・・・だが

あの猫に杏斗が食べ物を与えたおかげか猫が彼にすっかりなついてしまっていたのだ

引つ張り振り落とそうとして抵抗しても肩から反対の肩に逃げたり体中をはい巡られ気持ち悪かったので抵抗する気もしない

ヴァロンドライバーで撃てばいいけど下手したら自分に当たる危険もあるし僕が大人しくしているしかなかった

「はあ・・・」

「じゃ」

上機嫌でいいですこと

僕はお前に全部機嫌を吸われたみたいだよ・・・

仕方なく連れていく事にした

まあいいさ

隙を見て振り払えばいいんだ

\*\*\*\*\*

どれくらい歩いただろうか

猫が隙を見せず僕が歩き続けているといつの間にか住宅街に入って

おりすぐ公園が見えてきた

だいぶ歩いたしあそこで少し休もう

「よつと」

昼間とあつてか公園ないでは小学生らがサッカーをして遊んでいた  
り親子でキャッチボールしていたりなど日常的な光景が見られた

一言で表すなら「平和」

これ以上の言葉はこの場にはないだろう

肩に乗っている猫も先程まで鳴いていたのに今ではすっかり静かになっ  
ている

「ふうあ・・・なんだか眠たくなってきちゃった・・・」

「じゃ〜?」

ベンチに座ったからだろうか  
なんか眠くなってきた

まあ、昨日はイルズの相手に忙しくてあまりにも楽しくて寝るの忘れちゃってた訳だし

今寝て起きたら夜、少なくとも夕方にはなってるだろう

時間潰しに最高のタイミングだった

「ふう……」

彼は猫の事は気にせずベンチに足を上げ横になった

猫が肩から降りたのが見えただけで後でどうにかしよう……

杏斗はそのまま気力を失うのに素直に従いゆっくりと目を瞑った

\*\*\*\*\*

「じゃ〜・・・」

あれから数時間

彼は一向に起きてはくれない

猫は遊んでくれない彼に悲しくそして小さく鳴いた

公園にはもう彼と猫しかいなくなっており閑散としている

あたりもさつきより薄暗くなってきたしそろそろ夕暮れ時だった

「じゃ〜・・・」

お腹が空いてきた

昼食はたくさん貰ったがどうも時間が来ると決まって腹の虫がなる

何か落ちてるものでもいいから食べたい

そんな小さな欲望に従い猫は体を動かした

すると、

「じゅー」

探して僅か数秒、あそこに弁当の残骸が落ちているのではないか

しかも結構な量が残っている

猫は杏斗に目を向けるのを止めその弁当へと駆けていった

「ふがあふがあ」

賢いゆえかその場で食べるのはいたたまれない

もしどこからか横取りされては嫌だ

猫は弁当を独り占めするため念のために弁当箱をくわえて草むらの中へと潜り込んでいった

・・・

その公園には一人の少年がベンチに寝ているだけ

静寂な空気が場を支配した

\*\*\*\*\*

「グルル・・・」

ううん・・・

謎の声に自然と目が覚めていく

いつの間にか僕は仰向けになって寝ていた

あたりはもう真っ暗だ

視界の頼りは公園の灯

そしてふと横を見ると

「グルガア！！」

「！！」

なんと目の前にいたイルズがこちらに攻撃をしてきたではないか



杏斗はすれすれで起き上がったては回避し間合いを取る

振り返るとベンチは粉々になっていた

「寝込みを襲うなんてね、いい趣味してるよ」

「ダメレ！コッチハイノチガカカッテルンダゾ！！」

「ふうん、命ね・・・でもいいの？前はあんなにコテンパンにやられてるのにさ、またふんぞり返って逃げる気？」

「フン！マエトハチガウゾ！」

「！？」

すると左右の草むらから別のイルズが二体挟むようにして攻撃してきたではないか

杏斗は咄嗟に後ろへバックステップするも、

「ぐっ！」

片方のイルズの攻撃が左腕を擦ってしまふ

迂闊だった

完全に前方にいるイルズに意識を奪われてしまっていた

でも軽傷だ

血は出ていようと動かすには何の問題もない

それよりも……！！

「なるほど、仲間を呼んだわけだ」

「キサマニハムリナセンジュツダ、サスガノキサマデモコノカズデ  
カカレバ！」

イルズは言葉からして勝利を確信していた

いくら強いといえど結局は数がモノを言う

多い方が勝つ

単純且つ強力な戦術だった

だが時として例外もあるのも世の情け

「ふふ・・・」

「ナ、ナニガオカシイ!？」

「そうだねえ・・・感謝しないと・・・」

「カンシャ・・・？」

「そう感謝、礼をいうよ、だって皆でかかってきた方が一人より断然楽しいじゃん!塵も積もれば山となるって聞いたことない?まさにそれだ!!--」

彼は狂気染みた声で言った

杏斗の頭の中ではもうやる事が定まっているだろう

対してイルズ達も万全だった

「フザケルナア！！」

三体のイルズが一斉に襲いかかってくる

・・・が、杏斗は別段慌てる事なくヴァロンドライバーをクルクル回しながら取り出し瞬時に発砲して三体のイルズを一掃する

「まあ待ってよ、余興を楽しむにはそれなりの準備ってものがあるんだから・・・ね？」

【KAMEN RIDE】

「ご法度級だよ？変身」

【VALOND】

ヴァロンドライバーをスキャンさせトリガーを引くことでヴァロンドへと変身した

そのオーラは不気味としか言い表せなかった

「さあ、余興を楽しもうじゃないか」

「コノ！」

イルズ達はヴァロンドを取り囲み三方から攻撃を仕掛けていく

それにヴァロンドは蹴りでいなしたりドライバーで牽制したりスマー  
ートな戦い方で挑んだ

その差は歴然、三対一だというのにヴァロンドが圧倒していたのだ

【ATTACK RIDE】  
【BLAST】

「「グワアアア!!?」」

ヴァロンドの厚い弾幕に三体はなす術がない

それでも諦めまいと彼にガムシャラに突っ込んでいった

しかしヴァロンドの余興はまだ終わっていないかった

「・・・そうだ！もっと楽しくやれる方法があるよ！」

そういつてヴァロンドは二回連続でドライバーをスキャンしトリガーを引いた

【KAMEN RIDE】

【ZOLDA】

【OUJA】

一体は銃を携えた緑の仮面

もう一体はヴァロンドに似たオーラを放っている青い仮面

「ゾルダ」と「王蛇」がそこに立っていた

「ゴチャゴチャした戦いは好きじゃない」

「祭りの場所はここかあ？」

《SHOOT VENT》

《SWORD VENT》

二体はそれぞれの武器を構えてとくにかくにも三体のイルズに向かって猛撃を披露した

ゾルダは中距離からの射撃

王蛇はもはや狂った動きでイルズ達を翻弄した



その光景をヴァロンドが見て楽しむ

「なかなか楽しかったよ、さ、ちょっと早いけどお開きにしようか」

【FINAL ATTACK RIDE】

【VA - VA - VA - VALOND】

役目を果たしたゾルダと王蛇はその場で消滅しヴァロンドはドライブー同士を合体させそれをイルズ達に向ける

「お疲れ様！」

小さな銃から極太の電磁砲が発射されどンドン迫っていく

それが近づくにつれ次第にその電磁砲に飲み込まれそんな感覚に陥  
った

# 13 苦痛な快楽（前編）（後書き）

一ヶ月も空いちゃった・・・

ちよくちよく書いても意外に時間かかるんですね

さて今回は本編からちよつとずれて悪役ライダーの杏斗回にしてみました

自分的にはこんな話もあつていいんじゃないかな？と考えています

後半ちよつと話が飛躍していますがこれは「あえて」なのです

杏斗は主人公達よりも戦いの事情に深く知っている・・・みたいな感じにしたかったのこのままでは杏斗がただの快樂殺人者の印象しかなかったので入れてみました

また微妙な終わり方になってしまいましたね・・・

どうしても切り方が雑になっちゃうんです

もっと綺麗に絞めることが出来ればなあ・・・

後半では出来るようにしないと・・・！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1379v/>

---

仮面ライダーディエンド

2011年11月24日00時47分発行